
音ノ門スケキ音ノ日

はじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日ノ音カキケス門ノ音

【Nコード】

N8657V

【作者名】

はじ

【あらすじ】

『ア行の問題児』そのような蔑称を持つ五人の子どもたちがいた。教師や他の生徒たちに疎まれていた彼ら。その小さな胸には、自分たちを蔑視するこの世界への憤懣が少しずつ蓄積していた。それぞれが抱く闇のやり場を求めた彼らは、『使われることのなかった防空壕』へとたどりつく。そこで彼らを待っていたものとは……

苦行の担任（前書き）

今年の3月からちまちま書き進めていた長編をアップしようと思います。

苦行の担任

しん——とした教室にチョークの音が鳴る。

真っ白なチョークで黒板に数字を綴っているその教師の顔は、溶け出したアイスクリームのように情けない。それが反映されているのか、彼の身なりはどこかたびれたものである。

白いカッターシャツには所々に皺が寄り、洗濯をしているのかも疑わしい。細長い顎の下から垂れるネクタイも同様に皺くちやで、それを誤魔化すように着けられたネクタイピンは塗装が剥けていて光沢がなく、相当に使い古されているものであるようだ。髪には細かな白髪が混じり始めていて、年齢の割に老けているように見られてしまうのが最近の彼の悩みでもあった。

教師は単純な四則演算を書き終え、天性の物侘しい面持ちで緊張感が満ちた室内を見回す。

小学校といえば生徒たちがざわめき活気にあふれているのが通常で、授業中といえども隣席の生徒と二三の戯言を交わしていても何ら可笑しくないはずであるのに、この張り詰めた雰囲気はどこことない異常さを感じさせた。

口を一文字に結んだ生徒たちの表情には、やって来る嵐を窓辺に立って待っているかのような、高揚感を含んだ独特の静けさが浮かんでいた。

「それじゃ、今日は六月一日だから——」

そこまで言い終え、教師は何か重大なことを思い出したのか言葉を切った。

眉根の皺を深くして、彼は廊下側の一列に顔をやる。視線を受けた最前席の生徒は、「ひっ」と小さく怯えた声を上げてうつむいた。その様子を見た教師の左頬が僅かに痙攣する。

ややあつて、教師は言葉を続けた。

「六月一日だから、出席番号一番の明石。この問題を前に出て解いてみて」

柔和な声で前へ出るように促したのだが、明石は何かに臆しているかのように軽く癖のついた髪の毛をぶるぶると震わせ、

「わ、わわ分かりません」

と声を裏返し忙しく答えたのであった。

「分からないって……この問題は五年生の範囲だぞ。六年生のお前が解けないはずないだろう」

少し語調を強めてそう言った。

しかし、明石は体を縮めて首を横に振り、前に出て問題を解くことを頑なに拒否する。それを見た彼は、これ以上のやり取りは無意味と判断してこれ見よがしに口から大きなため息を吐き出した。

「分かった。――じゃあ、市川。明石の代わりに解いてくれ」

人前に出て問題を解くことが後々の益になる。そう妄信している彼はあくまでも生徒自身に問題を解かせようと、明石の後席に座る出席番号二番の市川を指名した。

しかしどうしてだろうか。

市川と呼ばれた生徒は、片眉を上げて卑しい笑みを浮かべ、腕組みをして席を立とうとしなかった。その挑戦的な態度に腹が立ったのだろう。

怒気を含めて催促したのだが、市川はにやにやとしながらメガネの位置を修正し、試すような目付きで教壇の彼を見つめ返すだけであつた。

怒りに堪える教師の反応を楽しむように笑いながら、市川が一言。

教師は手の教科書を強く握り、まぶたを力いっぱい閉じて目の前の現実を遮断した。

心の中で十数えるとともに、『耐えろ』と四月にこのクラスを受け持つことに決まってから何度も使用してきた呪文を反芻させる。

——耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ。

唱え終えて気持ちも新たになった彼は、張り付けたような笑顔になる。

「分かりません」

内田は手元の文庫から顔を上げ、切り揃えられた前髪の隙間からギョロリと三白眼をのぞかせ、教師を一瞥した。

あまりにも内田が即答であつたため、しばしの間、教師はぼかんと口を開いて哑然とした。手元から教科書が滑り落ちそうになつたことで、彼は氣を持ち直し、唇をきつく締めて阿呆面を正す。

「おい、内田。本当に分からないのか？」

内田は視線を手元に落とし、「はい」と即断。

教師は鼻の穴から深く息を吸いこみ、十二分に満たしてからゆつくりと吐き出した。そして、口の中で例の呪文を繰り返した。

——耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ耐えろ。

「し、仕方ないなあ。よし、気を取り直して、江ノ島。解いてくれ」

教師は間欠的な瞬きをする。明らかに無理をして陽気にふるまっている様子が目に見えて感じ取れた。

江ノ島と呼ばれた生徒は、風船のような腹を揺らして席から立ち上がった。それを確認した彼の表情が一時だけ安らかなものへと変わったのだが、江ノ島が手に取ったチョークを見て、彼の顔面は彫りたての石像のように固まった。

——うわ、何で緑色のチョコレート使うんだよ。それじゃ、見えにく
いだろ。

喉元まで上がってきた注意を、彼はとつさに思い直して飲みこむ。チヨークのことは大目に見よう、何事も起こらず授業を終えることだけを考えよう、とだらしのない図体を弛ませて黒板に解答を書き出す江ノ島へ、期待と不安を等分した眼差しを向ける。

「先生、できました」

江ノ島の記した回答を見て、教師は打ち震えた。

喜びのあまりではなく、憂いの感情で、である。

江ノ島が示すイコールの先には、こねくり回されて捻じれた縄のようなものが描かれていた。その悪筆は、「あれ、今は図工の授業中だったっけ？」と思い悩むほどであった。

教師は頭を振って雑念を散らし、疲労の所為で視界が霞んでしまったのだ、あれは一種の幻覚だったのだ、と目頭を摘んで今一度解答を見返した。

しかし、どれだけ純粋な心に戻っても、江ノ島が書き記した解答を判読することはできなかった。江ノ島の自身に満ちあふれた表情を見る限りでは、わざとではないらしい。それがなによりも涙を誘い、教師は江ノ島の厚い肩に優しく触れて呟く。

「江ノ島、ありがとう。席に戻っていい」

それを聞いた江ノ島の顔がぱっと明るくなった。自分の解答が正解したとでも思ったようで、彼は生意気な口調で言った。

「渡辺先生、こんな問題楽勝だよ」

そして今しがた「分かりません」と答えた明石、市川、内田の三名を順繰りに見やり、

「こんな簡単な問題を解けないやつがしれないな!」

腹を震わせて哄笑する江ノ島に、渡辺教員と生徒たちは嘆かわしい視線を向けた。今にも誰かが「そもそもお前は問題外だ」と口走ってしまいそうな危うい状態であった。奇跡的にそのような事態にはならず、渡辺は高笑いを続ける江ノ島の背を押して席に戻るよう促した。

意気揚々と凱旋する江ノ島が席に着くと、その背後の席に座って

いる生徒が高らかに手を上げて言い放つ。

「先生！ 江ノ島くんの解答は間違っていると思います！」

江ノ島が勢いよく背後へと振り返る。腹の肉がよじれて息苦しいのか、野太い声で叫んだ。

「なんだよ、大谷！ どこが間違ってるんだよ！」

「どこがって、ねえ」

大谷は教室中の生徒をぐるりと見渡し、教壇にいる渡辺にばかりとウインクをして合図を送る。渡辺はその視線から逃れるように目を逸らして言った。

「そ、そうだな。たしかに、少しだけ、惜しいな」

「違うでしょ先生！ こいつはハッキリと言ってやらなきゃ分からない馬鹿なんですよ！ 先生の口から言ってやってください！

お前の書く字は、干上がったミミズが踊る死のダンスのようだって！」

教室のどこかで小さな笑い声が上がり、江ノ島は顔を赤くして大谷の襟を引っ掴む。

「そんなことない！ お母さんは俺の字を見て、天女の羽衣のようだって言ってたぞ！」

ははははは、と大谷は割れんばかりに大笑する。

「天女の羽衣？ トンカツの衣の間違いだろうがっ！」

江ノ島の恰幅のよい腹がぴくりと動いた。大谷の口にした言葉が、触れてはならない彼の一線を超えてしまったようで、江ノ島は声を低めて唸った。

「おい、それは俺がブタみたいに太っているって言いたいのか？」

この江ノ島の静かな怒りは大谷にとって予想外であったのか、多少困惑しつつもう後には引けないと腹を括り、敢えて気を逆なでするように返した。

「それ以外の意味に取れるのなら、お前の耳はブタの耳だな――」

言下に、大谷は勢いよく後方へと吹き飛んだ。

机がけたたましく倒れ、隣接する席の女性とから小さな悲鳴が上がらる。それを皮切りにして閑寂としていた教室に、わっと喧騒があふれ返った。

二人を煽る男子の歓声。女子の悲鳴。阿鼻叫喚と化した教室。

大谷は掃除用具入れにぶつけた頭を擦りながら起き上り、殴つてきた江ノ島を睨みつける。

「さすがブタのパンチだな。体重が乗ってて強烈だ、ぜっ――」

と、今度は大谷が江ノ島へと殴りかかったのだが、大谷のほっそりとした腕に付いた拳は、江ノ島のでっぷりとした頬に当たり、ぺちん、とこんにゃくを物差しで叩いたかのような鈍い音を鳴ならしただけであった。

「はっ、大谷。お前は口だけだな」

江ノ島は何でもなさそうに殴られた頬を擦り、「次は俺の番だ」

と言わんばかりに拳を振り上げた。それを見た大谷は衝撃に備えてさっと身構える。

「――はい、そこまで！」

ようやく駆けつけた渡辺が、振り上げられた江ノ島の腕を掴み二人の間に割って入った。

「みんな、しばらく自習ね」

渡辺がそう言い残して江ノ島と大谷の二人を廊下へと連れ出したのだが、騒ぎの元凶が場を去っても興奮しきった生徒たちのざわめきは当分納まりそうもなかった。

自分のすぐ後ろで起こったというのに内田は、引きずられるようにして連れて行かれた二人を軽く見ただけで読書を再開し、騒ぎを諦観していた市川は相変わらず笑みを浮かべていて、明石は頭を抱えてぶるぶるとうずくまっている。

担任がいなくなったことで開放的になり、ここぞとばかりに喚き散らす生徒もいれば、これ以上の授業の継続はないと知っているのか、教科書やノートといった類を早くも机の中に放り始めている生徒もいた。

このクラスにとってあの程度の事件は日常茶飯事のようにであった。



お馴染みのチャイムが鳴ると、件の二人を脇に、疲れ切った顔の渡辺が教室に入ってきた。江ノ島は涙目であったが、大谷の方は何事もなかったかのようにけろっとしていた。二人を席に着かせて渡

辺は教壇に立つ。ざわめき立っている教室を一喝しようという気も起らなかったようで、

「今日の授業はこれで終わりです……ホームルームは、なしで」

ふらふらとした足取りで教室を後にした。

渡辺はなめくじの如く廊下を歩き、泥水の如く階段を下り、やっとの思いで一階の職員室に到着する。窓際の自分の席へと倒れ込むようにして腰を下ろすと、背もたれのスプリングが大きな軋みを上げ、彼は大きなため息を吐いた。机に放りだした出席簿を開き、それを覚束ない目付きで眺める。

『明石 実』

『市川 涼弥』

『内田 玲』

『江ノ島 浩次』

『大谷 陽平』

見事なまでに一人ずつ名字の頭に母音を持っている彼らのことを、誰が命名したのか『ア行の問題児』と影ではそう呼んでいる。

この誰か一人の氏名を見ただけでも不快感を示す教師もいるというのに、彼のクラスにはその悪ガキ五名が綺麗に揃っているのだった。

彼らが卒業するまで残り九か月あまり、それまでに彼らはどのくらい問題を起こし、自分はどのくらい他の教員から渋い顔をされ小言を言われるのか。それを考えただけで陰鬱としてきた渡辺は、気分を入れ替えるために窓を開け放った。

六月の湿っぽい外気と一緒に、校庭で遊ぶ生徒たちの笑い声が入って来る。低学年だろう生徒たちの無邪気な声が、多少ではあるが彼の鬱屈も吹き飛ばしてくれたようだった。渡辺は自分の頬を叩い

て気合を入れ直す。

彼が教員生活を初めて今年で三年の月日が経ち、その半分以上はこの草ヶ丘小学校での生活が占めていた。

草ヶ丘――

東京都の中心からやや外れた市域の名称である。

起伏の激しい丘陵地帯に多くの住宅が立ち並び、丘を登って行くような形で住宅街となっている。その丘の頂上付近に建っているのが、草ヶ丘小学校である。

住宅地に住まう多くの子どもたちが在籍しているため、この学校には五百にも及ぶ生徒が毎日勉学に励んでいる。

渡辺は、初めてこの街を訪れたときのことを思い起こす。

坂の勾配に驚愕し、学校に到着したときは息も絶え絶えであった。そして、校門から一望した草ヶ丘の景色を観て、大いに感動したことを懐かしく思う。まだあのときは、このような状況になるとは思ってもいなかったのだと、渡辺は追想して少し涙する。

彼は二年近くこの小学校で教鞭を振るってきた。その間、『彼ら』に直接接触する機会が今までなかったことは奇跡と言えるのかもしれない。

それでも彼らの噂を度々耳にしてはいた。

決して人前に出ようとしない明石。緻密性に富んだ悪戯を重ねる市川。授業に無関心な内田。傲慢稚気な江ノ島。場をかき乱す大谷。一日一回、必ず何事か起こす彼らのことを、職員たちは煙たく感じていた。なるべく関わることを避け、関わったとしても荒波を立てないようほとんど無視するような形で彼らに応対していた。

ただ一人、渡辺を除いて。

それは、渡辺が何よりも差別を厭い、慈愛に満ちた感性を持っていたからではなく、彼は、ア行の問題児と自分は、まったく接点のない別世界の人間だと気楽に考えていただけなのであった。

もし、タイムマシンが完成したのなら、過去の自分に会うことによって起こるパラドクスやその他諸々のことを無視してでも、そのような甘い考えをしていたかつての己を渾身の力を籠めてぶん殴ってやりたい、と渡辺はかねがね思っている。

「大丈夫ですか？」

隣席にいた大柄の老教師が心配そうに渡辺の顔をのぞき込む。

——大丈夫なものか。お前らが逃げたから、私がこのクラスを受け持つことになったんだ。

内心で悪態を吐きながら表情では笑顔を造成し、「大丈夫です」と見栄を張る。

今年の初春。まだ肌寒さが残る中、草ヶ丘小学校ではある重大な会議が開かれていた。

議題は彼ら、すなわち『明石 実』『市川 涼弥』『内田 玲』『江ノ島 浩次』『大谷 陽平』の五名をどのように各クラスへと分散させるかであった。

彼らは今春で六年生になり、彼らの学級はすべてで三クラスしかない。よって、いくら上手く彼らを分配させようとしても、少なくとも一クラスに彼らが二人集まる計算となる。

できるだけ彼らを少人数で収め、被害を少なくするための方策として、2―2―1というバスケットのフォーメーションのような分散方法が例年の黄金比とされてきた。この比率が四年前に発見されたときは、職員室が歓声で沸いたという伝説が残っている。

今回も、この黄金比が適応されるものだと思っていた。あとはそのクラスの担任にならないよう、全身全霊で神様に祈るだけでいいと高を括っていた。

今年は、最も被害を抑えられると熟考に熟考を重ねた組み合わせ

——明石と市川、内田と大谷を二クラスに配分し、残りに江ノ島を
組み込むという案で可決されなかったとき、能天気な顔をした副校
長が言ったのだった。

「今年度で彼らも卒業です。いつそのこと一まとめにしてみても
いかがですか？」

会議室が凍りついた。

この耄碌は何を嘯いているのだ、と全教員の視線がその副校長に
集約した。

副校長はそれを賛同と受け取ったらしい、自身の良策を見せびら
かすように口ひげを上げて呵呵大笑した。会議室は氷室と化したの
だが、副校長の提案に誰も異を挟さなかったので話はその方針で
進み始めた。

何故、その愚策を糾弾するものが現れなかったのか。

それは皆が皆、ある一点に着目したからであった。

五人を三クラスに分ければ、三名の教員がその苦勞を分けて背負
うことになる。

しかし、副校長の案を取れば、誰か一人が膨大な苦勞を背負い込
めば済むのである。誰か一人を人柱にすればいいのである。

いつの間にか、会議室には戦場で行き交う殺意にも似た感情が行
き来していた。

作り笑いを浮かべ、互いの腹の内を探り合う。もちろん、話の中
心は誰を犠牲にするかであった。

その風景を、渡辺はどこかのんびりと眺めていた。

クラスを受け持つ教員の数は、全部で一七名。簡単に考えれば、
一七分の一の確率である。六パーセントに満たないその低率に、ど
こか安穩としていた。

それが彼の失策であった。戦場での油断など愚の骨頂。三十路に
も満たない彼には、それが理解できていなかった。そして、大人は

歳を重ねているほどに狡猾であることも、まだ認識していなかった。

「それでは、渡辺先生。よろしいですか？」

趣味の山登りのことを考えている内に、どうやら渡辺が件のクラスを受け持つことで概ねの教員が同意したらしい。あとは渡辺の承諾を待つのみとなっていた。

硬直する渡辺に古参の教師たちの鋭利な眼差しが次々に突き刺さる。

「よろしいですね？」

それはもう恫喝といってもよかった、と渡辺はあの会議を振り返っては嘆息する。

苦行の担任（後書き）

完成はしているので、どんどんアップしていこうと思います。

アの問題児 『明石 実』

幽鬼のように立ち去った渡辺の姿を思い出すと、やる瀬ない感情が実の胸に溜まった。担任の心労の原因を生み出しているのは、紛れもなく自分たちであることを彼は自覚していた。

——でも、今回は仕方ないよね。みんなの前に出て問題を解くなんて、緊張して僕にはできないし……

自分自身にそう釈明をしてみるけれど、やはり今日のいさかいの原因を招いてしまったのは自分だろう。授業が終わったあともそのようなことを悶々と考えていた。

「実、そろそろ帰ろう」

顔を上げると正面に涼弥が立っていた。

涼弥は前髪をキザったらしく、ふっと吹き上げてにやりと微笑んだ。他の人がそのようなことをしたら、自己愛の激しいやつだと後ろ指を指されそうだが、彼がやると様になっていると実は毎回そう思う。

涼弥とは一年生の頃に知り合った。入学式前の緊張で心臓が張り裂けそうだった実の肩を叩き、「お前、緊張しすぎだよ」と一笑したのが彼だった。

それ以後、どこか大人びた涼弥の影に隠れるようにして学校生活を送った。四年生のときに一度だけ別々のクラスになってしまったけれど、そのとき以外すべて涼弥と同じクラスであったことは、緊張しいの実にとって救いであった。

実は、自身の異常なまでに内気な性格を疎ましく思っている。できることなら一人で何でも熟せるようになりたい。そう願って

いるのだが、いざ単身で行動を始めようとすると周囲の視線が気になって仕方がないのだ。

自分が注目を集めるような存在でないことは自覚しているけれど、どうしてか始めの一步が踏み出せないのである。

彼がここまで極端に内向的な性格になった原因は、二年生のおきに起こった。

個々人で興味のある職業を調べ、みんなの前で発表するという授業があった。実は警察官について調べた。それは勇士あふれる警察官への羨望があったからだろう。

調べること自体はとても楽しかったのだが、ついに発表の日が来てしまう。

人前で発言をすることは気恥ずかしく思えたけれど、これも授業の一環であるので自分だけ例外とはいかないだろうと覚悟を決めて教壇に立った。

自分一人に集まる、視線。

三十人弱という小規模な注目であったのだが、初めて人前で何かを行う実にとってこの状況は、大統領演説をするのと同列の行為のように思え、実際にそのような錯覚に陥った。

心の底にまで深く根を伸ばしたトラウマが甦り、涼弥と廊下を歩きながら実はぶるりと身を震わした。

当時と同じように心臓が暴れ出す。喉がからからと渴き、膝と唇が震える。

「ば、ばば僕が調べたのは――」

緊張のあまり、第一声で実の舌は絡まった。

子どもは無邪気であるが故に残酷なものである。緊張しきった様子をみて、クラス中が大笑いに包まれた。

彼らの笑い声はすべて嘲笑に変換されて届いた。それは紛れもない錯覚なのだが、一度思い込んでしまうと引きずられるようにして

実は錯誤の波にもまれていった。

顔中から汗が噴き出、耳はトマトのように赤くなる。いよいよ涙が流れ始め、結局、先生に導かれるようにして自席へと戻った。

そのあとの発表は涼弥であった。

実は顔を机に伏せながら、涼弥の『宇宙飛行士について調べたこと』を聞いた。

黒板の前に立った涼弥は、大人が顔負けするくらい堂々とした居住まいで、自分とは同い年とは思えないくらい流暢に喋り、意図的に皆の笑いを誘い出して発表を終えた。

実は悔しくなって机の上にぽろぽろと涙を落とし聞いていた。

どうして自分はここまで出来損ないなのか。どうして涼弥はあんなにも自信に満ちあふれているのか。どうして自分は一番の友達でもある涼弥のことを、恨めしく思ってしまったているのか――

「おい、実。聞いてるか？」

耳元で聞こえた涼弥の声に、実は驚いて飛び上がる。

「え、え？ なに？ ごめん聞いてなかった」

「まったく、すっかり頼みますよ、実さん」

茶化すような語調の涼弥に、実は弱弱しく笑い返した。

「それで、なんの話をしてたんだっけ？」

「かー。そこからっすか、実さん」

涼弥はわざとらしく額に手をやって天井を仰いで嘆いた。それがまた様になっているところが涼弥らしい。

「さっきの授業のことだよ」

「ああ、先生に悪いことしちゃったよね」

「あ、自覚はあるのね」

「自覚というか……やっぱ原因を作っちゃったのは、僕だと思うし……」

「ま、原因にしたのは俺だけだな」と涼弥がにやりと笑った。
階段を下り職員室の横を抜けて二人は昇降口へと向かう。

「しかし、なあ。浩次は本当に『空気』の読めないやつだよな」

涼弥が靴を履き替えながらそう言った。彼は、先ほどの授業で『起こした』一連の騒動での江ノ島の話をしているようだ。

「実が作った流れに俺が便乗して玲も乗ったってのに、どうしてお前は問題を解きに行くかねえ、と呆れたよ、まったく。俺の計画では五人連続で『分かりません』って答えるはずだったのに」

涼弥は心底から呆れているようで、息を強めに吹き上げて前髪を揺らした。

「でも、仕方ないよ。口頭で伝えた訳じゃないんだし」

「玲はちゃんと乗ってきたぞ」

「あの子は——いろいろと変わってるからねえ」

そこで何となく会話は途切れ二人は黙った。

下校時刻を回っているからだろう、他の生徒の姿は疎らにしか見られない。その所为で、実はこの沈黙がやけに重く感じた。

涼弥は大きく開け放たれた昇降口を抜け、そのすぐ先の御影石でできた床にどっかりと胡坐をかく。焦って靴を履くのにもたつきな

がら、実も涼弥の横で三角座りをした。

——こんなところに座っていたら、通る人の邪魔にならないかな
……

通行人の心配をしていた実の横で、庇よりもずっと上にある青い空を見上げて涼弥が言った。

「この空の先には、本当に宇宙があるのかな」

鼻白むセリフであったが、それが様になっていたのは言うまでもなかった。

イの問題児 『市川 涼弥』

前席に座る実が「分かりません」と声を震わせながら答えたとき、涼弥の脳髓にある方策が駆け回った。

——これが成功するときって面白いだろう。というか、俺が面白ければそれでいい。

成功したときの担任の困惑した顔を楽しみにしながら、涼弥はにやにやと黒板を見つめた。

彼は今までにも数々の作戦ならぬ悪戯を実行し、周囲の大人たちを惑わせてきた。彼にとってその行為は、自身の好奇心を満たすために敢行してきたにすぎず、大人たちに迷惑をかけているという実感は毛ほどもなかった。

渡辺が苛立った声音で涼弥に問題を解くように促す。そろそろ不味いかな、と思い涼弥は「分かりません」と応じて再び笑みを浮かべる。

——さて、成功するかな？

玲は予想通りの冷徹振りで渡辺をいなし、本作戦で唯一の杞憂である浩次が指名される。浩次がのそのそと立ち上がり黒板の前に出たとき、涼弥は心の底から落胆した。

——俺の策が浩次に妨害されるのは今日に始まったことじゃないけど、一度きつく言っておいた方がいいかもな。

黒板に気味の悪い縮れ毛のようなものを書き殴り、揚々と自席へと戻る浩次に、涼弥はメガネの奥から冷たい目を浴びせた。無論、

浩次がこの視線の意味を察せられるようなやつではないと知りながらである。

物事が思い通りに展開しなかったことで、半ば苛立ちを感じ始めていたそのとき、彼にとって予想外のことが起きた。

作戦のトリであった陽平が、浩次の解答に難癖をつけ始めたのである。

涼弥は心臓の高鳴りを止めることができなかった。

——やっぱり、あいつは一味違う。

陽平の思わぬ行いに涼弥は感激していた。

涼弥が陽平の存在を認識したのは、小学三年生の時分であった。それまでも同じ悪ガキの一人として聞き知ってはいたが、大して興味を引くようなこともなかったので直接的に接触したことはなかった。

涼弥が陽平に関心を抱いたその日は、茹だるような暑い夏の日のことであった。

学校中のトイレットペーパーを一カ所に集め、それらを人質ならぬ『モノジチ』にして体育倉庫に三時間立てこもった挙句、モノジチ解放の交渉に、一日一回の給食を二回にするように要求するという事件が起きた。

その犯人が、大谷陽平であった。

そのようなバカの所業を目撃したとき、涼弥の全身に嫉妬にも似た衝撃が迸った。

自身が目指す人物像に、彼ががちりと音を立ててはまったのである。

涼弥が目標とするものを、仮に四字熟語で表すならば、当意即妙や融通無碍、奇想天外がもっとも近いが、彼の目指しているのは、そのような言葉を超えた自然的な機転、それは、自然災害のように予測不可能で突発性の発想を持つ人物であった。

その理想とする人物像に陽平が当てはまるように思え、涼弥のことで悪友に近い立ち位置であった陽平の評価は一変した。同朋でありながら一目置く人物となったのである。

気になるものは自分の目で確かめなければならぬ性質である涼弥は、事件後ただちに陽平に接触を図り、事件の内情を問い質した。陽平は唇を尖らせ不服の体を顕わにしながら、「その方が学校に行く楽しみが増えるだろ」とただそれだけを述べたのだった。

その返答を聞いた涼弥は拍子抜けしながらも、彼といれば常に新鮮な刺激を受けることができ、自身の成長の助力になると確信した。それ以後、涼弥は陽平と交友を持つようになったのである。

今回は浩次のお陰で失敗に終わったけれど、結果として想定外の出来事を楽しむことができたので、口では文句を垂れつつも涼弥は大いに満足していた。

涼弥は空に向けていた顔を何やら騒がしい校庭へと移す。そこでは、低学年らしい数名の男子たちが和気藹々とサッカーゴールの前でボールを転がしていた。

——あんな、規則に雁字搦めの遊びのどこが面白いんだよ。

白黒の球を蹴る彼らを鼻で笑い、他の奴らはまだ来ないのか、と涼弥は背後の下駄箱へと振り向いた。

ちょうど陽平と玲が外履きに履きかえているところであった。

「あ、来るみたいだね」

実が細い声で言った。

「だな。あとは、ブタくんか……あいつ、先生に怒られて涙目に

なってたろ、どこかで泣いてるんじゃないか？」

言いながら涼弥は昇降口にいる二人に大きく手を振った。二人は何やら話し込んでいるようで、こちらに気付かない。

「はは、さすが泣きはしないでしょ」

「いーや、浩次は見かけだけで、心はガラス細工のようにもろいぞ、おーい」

大声で呼ぶと、陽平と玲は驚いた表情をこちらへ向ける。涼弥はさらに声を張り上げ「うおーい」と二人を呼び、その学校中に響きそうな大声に実は苦笑をもらしていた。

「よしよし、気付いたか」

満足げに頷く涼弥のところへやって来た陽平は、ケラケラと笑いながら言う。

「そんな離れてもねえんだから、馬鹿みたいな大声を上げなくても聞こえてるって」

玲は「お待たせ」と呟き、陽平の横で付き人のようにたたずんでいる。

「おう、待ってたぜ。まあ座れや、お二人さん」

芝居がかった口調で二人を座らせ「浩次は？」と陽平に尋ねる。浩次の名前が出たことに陽平は少しむっとした表情をして、「知らね」と短く答えた。

涼弥は肩を竦めて実と視線を合わせると、実は微妙な笑みを返し

てきた。

「玲は、浩次がどうしたか知らないか？」

床にできた凹凸に指をぐりぐりとねじ込んでいた玲は顔を上げる。

「トイレに入って行くところを見たよ」

涼弥はにやりと口元を綻ばせて言った。

「あいつ、絶対に泣いてるな」

ウの問題児 『内田 玲』

実と涼弥が出て行ったのを確認してから、玲は読んでいた文庫をランドセルにしまい、帰り支度を始めた。

黒板の前に三人の女子たちがてんとう虫のように集まっている。先ほどの騒動の話題や、放課後はどこに遊びにいくかなどの談笑が耳に付き、玲は何気なさを装いながらその様子をうかがった。その視線を察知した女生徒は、ひそひそと声を潜めて言葉を交わした後、固まって教室から出て行った。

玲は別段気にも留めないでその固まりを見送り、席を立て陽平のもとへ歩み寄る。

「また馬鹿なことをしたね」

陽平は小さく鼻で笑い、ランドセルをひょいと背負う。半袖から出る腕に痛ましい青あざを見付け、玲はそこから目を背けるように視点をずらした。

「俺は間違いを正したから良いことをしたんだぜ？」

「あの騒動で彼が、自分の字は恐ろしく汚いということを実感したのなら、それはきつと良いことなんだろうね」

「あいつは気付かねえだろ、『空気』読めないし」

吐き捨てるようにそう言った陽平を連れて玲は廊下へ出る。

「たしかに彼はものすごく状況認識能力が欠けているね。その癖、自己の能力を過信している」

ガランとした廊下の先に、のそりのそりと闊歩する話題の張本人

である浩次の後姿を見付けた。

「どうする？」と並行する陽平に尋ねた。

「んー、今はまだ顔を合わせたくねえな」

苦々しい表情をして陽平は脇に折れ、階段を下りて行ってしまった。残った玲はしばらく思案顔でその場に立ち、やがて身を翻して牛歩する浩次の方を追った。

浩次は廊下を直進してトイレに入ろうとしたので、玲は慌てて呼び止める。振り返った浩次の表情は、どこか暗く目元が赤く腫れていた。

「なにか用かよ」

その無骨な態度に、玲は若干苛立った口調で告げる。

「みんな待っていると思うから、キミも早く来るんだよ」

浩次は「分かってるよ」と吐き捨て、水色のドアを押してトイレの中へと消えた。

玲はふんっ、と鼻から息を吹き、足早にその場から立ち去った。駆け足で階段を下り、職員室付近で陽平に追いつく。

陽平は玲の横顔を一見し「どうだった？」と、さも関心がないかのように装って尋ねてきたが、本当のところは浩次のことを心配しているのだと傍目からでも容易にうかがえた。

「いつも通りの彼だったよ。恐らく、ボクがどうして声をかけたのかでさえ理解していないだろうね」

そっか、と陽平は自分の下駄箱から履き古したスニーカーを取り

出す。玲も外靴を逆さにして中に入っていた砂利を吐き出させてから、上履きと入れ替える。

開け放たれた昇降口の向こうに、空を見上げている涼弥と実の背が見えた。

「陽平、ちょっと聞いてもいいかな」

「んー、なんだあ？」と陽平は解けかけた靴ひもを結び直し、おざなりに返した。

玲はずっと疑問に思っていたことを口にする。

「どうして、あのようなことをしたんだい？」

陽平の手が止まった。玲はもう一度、今度は取り違いのないように尋ねた。

「どうして、浩次を挑発するようなことをしたんだい？」

屈んでいるため彼がどのような表情で聞いたのか分からない。けれど、付き合いの長い玲には、何となくその面持ちを予測することができた。

「あのままじゃ、あいつはただの笑いものだったろ」

陽平は靴ひも結びを再開して喋り出した。

「しかも、涼弥の作戦もかき乱した。涼弥はそういうのを嫌うからなあ。あそこで放っておいたら、あいつ、涼弥からウザがられて、俺たちからも孤立するんじゃないかって思ってたな」

靴ひもを結び終えた陽平が立ち上がり、玲へと振り向く。その顔は万遍の笑みだった。

「しかし、殴ることはねえよな。ああ、顔が痛えー」

玲が口を開こうとすると、外から大音声が響いてきた。

「あ。あいつら、あんなところにいるぞ」

陽平がケタケタと笑いながら先に行ってしまったので、玲は喉元まで上がってきた言葉を口の中で小さく呟いて消化した。

――キミは、本当に強いね。

昇降口を塞ぐようにしてふんぞり返っていた涼弥に座るよう催促されたので、玲もその場に正座して通行妨害の仲間に参加することにした。

「玲は、浩次がどうしたか知らないか？」

ズボンの膝にアリがよじ登ってきたのでそいつを摘み上げ、近くにあった床の穴にぐりぐりとねじ込んでいると涼弥がそう尋ねてきた。

「トイレに入って行くところを見たよ」

涼弥は「あいつ、絶対に泣いてるな」とメガネの奥の瞳を細めた。玲も絶対にそうだと思ったが、特に口を挟まず、いつもの通り会話をぼんやりと聞くことにした。

「まったく、浩次くんには困ったものだねえ。俺様の妙策が見事にぶっ潰されてしまったよ、まったく」

口癖の「まったく」を連呼しながら毒づく涼弥。その横にいる実が空笑をして言った。

「涼弥くんはさっきからそればかりだね。江ノ島くんだって悪気があってやってるんじゃないんだしさ」

「そこだよ、そこ」

涼弥は上体を乗り出して続ける。

「故意にやっていないところがあいつの悪いところなんだよ。悪意があって俺の作戦を妨害してくるなら、まだ対処できるからいいんだよ。浩次はまったく気付かずに邪魔をしてくるだろ？　それがなあー」

涼弥は後ろに倒れ込み、会話に参加してこない陽平の顔色をさり気なくうかがっているようであった。陽平はどこか上空で、浩次との悶着の尾をまだ引きずっているふうである。

玲は涼弥をきつく睨み無言の一撃を加えた。涼弥はそれを敏感に察して、

「あー、まあそうだな。俺が勝手に考えたことだし、浩次を責めても仕方ないよな」

と取って付けたように浩次を氣遣った。

「そうそう。涼弥くんがちゃんと説明すれば、江ノ島くんもきっと『遠慮』してくれるよ」

そこは自重させるんだ、と玲は実にツツコミを入れそうになったがぐっと辛抱する。

——彼は意外と腹黒いのかもしれないな……

玲が心のメモ帳にそう記入していると、仰向けに倒れていた涼弥が「来た」とぼそりと口にした。

エの問題児 『江ノ島 浩次』

——どうして俺が怒られなくちゃいけないんだ！

鏡に映るふくれっ面を睨みながら、浩次は胸中で吠えた。

——どう見たってケンカを吹っかけてきたのは大谷からだっだし、俺が先生に怒られる意味が分からない。たしかに、先に手を出したけど……そうだ。あれは、正当防衛だ！俺を家畜にたどえてバカにして精神面を攻撃しようとした大谷に対する正当防衛だ！だから俺は悪くない。悪くないはずなのに……

浩次は赤く腫れたまぶたをこしこしと擦る。

擦れば擦るほどまぶたはひりひりと痛みだし、どうして自分がこんな思いをしなければならないのか、という不満となって瞳からあふれ出た。

担任の渡辺に廊下へと連れて行かれた浩次と陽平はこっぴどく叱られた。

「挑発した大谷も悪いし、手を出した江ノ島も悪い。二人とも悪いことをしたということをしっかりと自覚するんだよ」

浩次は必死に自分に非がないことを述べたが、渡辺は「きみも悪い」と諭すのみで、まるで聞き入れようとしなかった。

鏡の表情がブタのように醜悪なものへ変化していく。浩次は奥歯を噛み締めて鼻から太い息を吐き出した。

——太っているから、みんな俺のことを馬鹿にするんだ。俺だっけなりたくてこんな体型になったわけじゃないのに、くそっ。ぜん

ぶお母さんがいけないんだ……

家に帰ると、必ずといっていいほど膨大な量のお菓子を用意して待っている母親の顔を思い浮かべる。折角用意してくれたのだから、その好意を無下にすることはできない。その結果が、鏡に映るこの姿であった。

浩次は、自分の姿とよく似た母の愛情を心の底から憎らしく思った。

浩次の母は彼がどのようなことをしても許した。そのため、自分には何を行っても叱られない特別な資格のようなものがあるのだと、幼心に勘違いをしてしまった。

それが思い違いであると小学校に入学して気付くことになる。

最初の給食。当時から同年代の子よりも倍近くの図体を持っていた浩次にとって、小皿のような食器に盛られた小規模なカレーは、飲むヨーグルトのカレー味に等しく、ものの数秒で平らげておかわりをした。

同じ過ちは繰り返さない、と白飯で頑丈な基礎を作り、その上に何重にもしてカレーの装飾を施した。彼が山のように盛ったカレーを食べていると、どこからか悲鳴が上がった。

「先生！ カレーのおかわりがもうありませんっ！」

そんなはずはない、と教師が笑いながらカレーの鍋をのぞく。

そこにまだ数十人分は残されていたはずのカレーが消失していた。生徒たちの視線は悠々と大山のカレーをむさぼる浩次のもとへと集まっていく。

その日、浩次は生まれて初めて叱られ、おかわりをするときは後の人のことを考えなければならぬということ学んだ。

それからというもの、浩次は集団の総意から外れたことをする度に叱られた。

初めのうちは素直に従っていたが、次第に「どうして自分の好きな通りにしてはいけないのか」という鬱憤がたまり、彼は反発するようになった。

反発は非難という形で自分へと跳ね返ってきた。やがて学年が上がっていくと、自己中心的で我が侘な彼のことを他の生徒たちは意識的に避けるようになり、教師たちからは問題のある子として取り扱われるようになっていった。その境遇がより彼を苛立たせた。

浩次が行動するたびに周囲から煙たがられるような存在になりつつあったとき、ある事件が起きた。

その日は授業中に少しよそ見をしていただけで咎められた。その怒りをどこにぶつけていいのかも分からず、浩次は止める教師を振り切ってトイレへと駆け込んだ。

歯をぎしぎしと鳴らし拳を握りしめる。

――授業中によそ見をすることがそんな悪いのかよ。もしかしたら、よそ見をした先に授業なんかよりも大事なことがあるかもしれないじゃないか！

徐々に荒くなって呼吸。すべての出来事が理不尽に感じ、厚い腹の底でどす黒い塊が溜まっているような気がした。

――こんな学校なんてなくなってしまえばいいんだ。

このわだかまりの解消法をはっと思いつき、浩次は奥にある大便用の個室へ足を運んだ。

『放火って日本じゃすごく重い罪なんだって』

今朝、自慢げに話していたクラスメイトの得意げな顔がよぎる。ズボンのポケットに手を入れてまさぐり、浩次は家からこっそりと

持ち出してきた道具の一つを取り出した。

髭を生やしたオジサンの横顔が描かれた、手の平に納まるほどの小さな箱。

それを縦にスライドさせ、中から先端の赤い棒を摘み出す。燃えるように赤い先を見つめ、口の中に溜まった唾をぐくりと飲んだ。

——火を点けるだけなら、大丈夫だろ。ここなら水なんて腐るほどあるんだし。

摘まんだマッチ棒を箱の側面に素早くこすり付ける。シッ、と紙を破くような音がしてマッチ棒の先端に小さな火が点いた。それだけで、腹の底に溜まっていた塊が溶け出したような心持ちになった。先に灯る火は、ただの赤色とは違う、もっと生命に近い『赤』をゆらゆらと燃やしていた。

「おい、江ノ島」

トイレの扉が勢いよく開き、浩次はびっくりしてマッチを手放す。

「あ、いた。せんせーい、江ノ島くんいましたよー」

マッチはくるくると放物線を描き――

教室から飛び出した浩次を探していたらしい男子生徒がトイレの中に入ってくる。

呼びかけても何の反応も示めさないで個室の中を見据えている浩次を不思議がり、その男子生徒も個室をのぞき見た。

「おい、江ノ島。あんまり心配――」

生徒の目に、メラメラと燃え上がるトイレットペーパーが映った。その生徒の行動は迅速だった。急いで手洗い場まで引き戻り、そこに置いてあったジョウロに水を入れて帰ってきた。

「おい、どけっ」そう言っただきくなり始めた炎にありったけの水をぶちまけ、あっという間に鎮火させた。そこに残ったのは、半分以上が黒い燃え炭と化して、ぐっちりと濡れたトイレットペーパー。

「ここにいたか。——おい江ノ島！ 授業中に飛び出しちゃだめだぞ！」

担任が太い眉をしかめてトイレの中へ入って来、浩次は焦った。

——ただでさえ、授業を抜け出したことで叱られるのに、黒焦げのトイレットペーパーを見られてしまったら……。どうしよう、どうしよう、どうしよう！

「——先生ッ！」

突然、火を消した男子生徒が叫んだ。

「どうして給食は一日一回しかないんですかッ?!」

浩次と教師の頭上に疑問符が浮いた。生徒は気にも止めずに続けた。

「先生、俺はですね。給食を食べることだけを楽しみにして毎日学校へ来ているんですよ。ほとんどの生徒もそうだと思います」

「そ、そうか」と担任は何が起こっているのか分からない様子で

流されるままに頷く。

「だからですねえ。一日一回の給食が二回になれば、楽しみも倍になって学校に行くことが嫌な生徒も行くことが楽しみになると思うんです」

担任はようやく我に返ったようで二人に歩み寄りながら、

「分かったから。大谷、お前は早く教室に――」

「止まれいい！」

大声がトイレの中で反響し氾濫する。反射的に担任は動きを止め、浩次も思わず身を強張らせた。

「先生、俺は、あなたをこの学校の代表だと思って交渉しているんですよ。一日一回の学校給食を二回にしてください、この条件が飲めないのなら――」

生徒は瞬く間に黒焦げのペーパーを引っ掴み、さらにその隣の個室からもトイレットペーパーをかすめ取った。

「学校中のトイレットペーパーを人質に取らせてもらいます」

両手に二本ずつペーパーを手にし、浩次のクラスメイト、大谷陽平は悪の手先のような大笑いをした。

「い、意味が分からんぞ……」

「なら、交渉決裂ですね――」と言うや否や、陽平はペーパーを

はためかせながら韋駄天の如くトイレから飛び出していった。

担任は頭の中で状況を整理していたようだが、陽平が突如奇行に及んだ理由について皆目見当もつかなかったようで、やがて「お前は先に教室に戻っている」と浩次に言い残して彼を追っていった。

一人残された浩次は、どうして陽平があのような奇怪な行動に出たのかを必死に考えた。それが自分の失態を隠すために行われたことだと思い知り、むず痒さを覚えずにはいられなかった。

浩次は鏡の先の自分を見返す。そこには醜悪なブタの姿はなく、何とも言えない笑みを浮かべている自分がいた。

「うお——い」

窓の外から馬鹿みたいな大声が聞こえ、浩次は窓から身を乗り出して声のした方を見た。昇降口に四人の姿を見付け、つい緩んだ口元を誰も見ていないのに慌てて引き締める。

オの問題児 『大谷 陽平』

腹を揺らしながらやって来た浩次は、「ごめん」と呟くように言った。

それが遅れてきたことに対してなのか、先の騒動について謝ったのかは分からなかったが、陽平は笑顔で浩次を迎え入れた。

「長げえトイレだったな、浩次」

「うるさいなあ」

浩次が大きな尻を床に下ろしたのを確認し、涼弥が自分の膝をばしり、と叩いて立ち上がった。太陽を背にして腕を組み、四人の前へと躍り出る。

「よし、みんな揃ったか」

「みりゃ分かんذار。んで、今日はなにすんの？」

陽平は欠伸を噛み殺して気怠そうに尋ねた。

「それを今から決めようと思う。何かやりたいこと、あるか？」

陽平は目を閉じて頭の中で『やりたいこと』を探してみた。

何も思い当たらない。

他の四人も同じようで、みな一様に閉口していた。

四月からこの問題児五人組が一つのクラスにまとめられた内実は、一部の大人たちの思惑によるものだが、彼らが群れ集まったのは彼ら自身の意思によるものであった。

それまでは、点と点を結ぶ線分のような交友のみで、五人が一堂

に会したことはなかった。教員たちも異分子同士は反発し合うものだ和高を括っていたのかもしれない。その当て推量は見事なまでに的を外れ、彼ら問題児五人組は、点と点を繋ぎ合わせて歪ながらも五芒星を作り上げたのである。

不安定なペンタグラムは分裂や破綻を繰り返しながら、その都度より強固に結ばれ現行の状態に至る。

「やっぱ、なんにもないか」

唸りながら涼弥がすんと腰を落とす。

彼らは可能な限りの遊びを一通り熟した積りであった。

鬼ごっこや隠れんぼなどの体を動かす遊びは、とうの昔にその真髄を見極めたため、今になってやろうとも思わない。オセロ、将棋という知性の伴う遊戯は、彼らの性分には合わない。ここ最近には「何か心躍るようなものはないものか」と思索を巡らす毎日であった。

はい、と実が嬉々とした顔で手を上げる。

「童心に返って『おままごと』っていうのはどうかな？」

「――却下」

涼弥に一蹴され、実はしょんぼりと膝を抱えて縮こる。

「おい、他の奴らはなんの案もないのか？ 実ですら発言をしたんだぞ」

「突っぱねたくせに」と膝に顔を埋めた実がぼそぼそと呟く。

「誰も挙げないなら俺から指名してやる――よし、玲！」
「ない」

「うん、お前らしい回答だ！ 次は、浩次！」

「俺、お腹減ったから家に帰りたい」

「っじゃあ、ひとりで帰れっ！」

涼弥は肩を竦めて外人さながらに息を吐く。

「まったく、お前らときたら……陽平を見習え、目を閉じて真剣に考えているぞ！ なあ、陽平」

「……………」

玲が陽平の肩を指で突つつく。陽平は銅像のように身動き一つしない。

「寝ているよ」

「まあ、そんなとこだと思ったよ、まったく」

涼弥は尻の後ろに手をついて空を仰ぎ、ウザったそうに前髪を吹く。

太陽に雲がかかり五人の上に影が差す。誰かがため息を吐いて再び沈黙に包まれた。

ほんの数メートル離れた校庭にいる生徒たちの声が陽炎のようにぼやけ、遠く聞こえた。先刻までは数名であったサッカーの人数も、今では二十人近い大所帯となって丸い球を追いかけてまわしている。

陽平が目を開けると、他の四人は遠い目でその光景を眺めていた。幸せそうな子どもの姿を見ると、陽平は、世界が自分たちを排除しようとしているかのような空想を抱く。

——規則に馴染めない俺たちのような奴らは、隅の方にまとめて押し固められて『取扱注意』と赤いペンで書かれた張り紙を張られ

る。それを見た他の人たちは、まるで核弾頭であるかのように俺たちを危険視し、ただそこにいるだけで忌み嫌う。そのような手段を取って俺たちを隔離しようとするのなら、俺たちはそいつらを敵視してより反発する。世界との溝はますます深まるばかりで、俺たちはそれを少しでも埋めようと足掻き、腹の底に溜めこんだ黒い濁りをその溝に流し込む。

「陽平。ひどい顔をしているけれど、大丈夫かい？」

玲が陽平をのぞき込んだ。

陽平は「平気だよ」と意識して笑顔を作り、校庭を見つめていた涼弥たち呼びかけた。

「なあ、みんな。俺のとおきおきの場所、教えてやるよ」

沈んでいるように見えた彼らの顔に花が咲く。

「それはどこだ！ 近いのか？！」

「危ない場所じゃないよね？」

「へっ、あるなら最初にいえよ」

てんでばらばらの反応であったが、彼らの瞳は一樣に好奇心が満ちていて、きらきらと輝いていた。玲だけがしかつめらしく眉を寄せていた。

興奮を隠せない三人をなだめながら、陽平は口を開く。

暗黒壕

「特殊地下壕のことは知ってるよな？」

各々が頷くのを待ってから、陽平は語り出した。

草ヶ丘特殊地下壕。

この地域に住むものなら、誰しもがその名称を聞き知っている。けれどその実体は闇の中で、子どもの間ではその名称だけが流通し、都市伝説のように扱われていた。

真偽のほどを大人に尋ねてみると、その地下壕は実際に存在しているものだという。

第二次大戦中に軍用目的で建設されたもので、完成間近のところまで終戦となり実際に利用されたことはないらしい。その地下壕が、この草ヶ丘の地下に蜘蛛の巣のように張り巡っているというのである。

「おい、おいおい！ まさかっ！」

涼弥が跳び上がって叫ぶのを見て、陽平がにやっと笑う。

「そのまさか」

激情のあまり涼弥が絶叫する。サッカーをしていた生徒たちが仰天して試合を中断し、何事かとこちらを眺め返していた。

「お、大谷くん。それは本当なの？」

実も驚きを隠せないようで、少し喰い気味に言い寄ってくる。

「本当だって。それで、どうするよ？」

「そんなもん、今すぐ行くに決まってるだろ！」

涼弥が今にも駆け出しそうな勢いで立ち上がる。血気盛んな涼弥を尻目に、浩次は腹を擦りながら不服そうに口を開いた。

「今から行くのかよ。俺、腹減ってるから明日にしようよ」

それを聞いて、涼弥はメガネの底からきつく浩次を睨みつけた。

「おい、お前さ。何で陽平がこの状況でこの話をしたのか分かってるのか？ 陽平はな、俺たちがつまらなさそうにしてたから、自分だけのとっておきの場所を教えてくれようとしてるんだぞ？ それを明日にするだと？ だからお前は——」

——チツ、と露骨な舌打ちが玲の口からもれた。

「ケンカとか面倒くさいから止めてくれないかな。行きたくないのなら行かなければいい」

口数が少ない玲の言葉だからこそ、一語一語に重みがあったのだろう。場は急速に鎮静化していった。涼弥はやり場のなくした罵詈雑言を口の中でもごもごと咀嚼し、浩次はそっぽを向いて膨れた。その二人を見比べるように、おたおたと視線を行き来させていた実の口から、「あっ」と声が出た。

実の視線の先、昇降口を挟んだ中側に担任の渡辺が立っていた。どうやら五人を注意しに職員室からわざわざ足を運んできたらしい。

「おい、お前たち。そんなところで溜まっていたら出入りできない

いだろ。集まるなら違うところにしなさい」

職員室が近いことを忘れて騒ぎすぎた、と陽平は少しだけ反省をする。

反抗して説教を受けるのも面倒だったので、五人はそそくさとその場から移動した。

校門を指して校庭を縦断する。涼弥が先頭を歩き、その後ろに実がひよこひよこ続く。少し離れたところを浩次が歩き、殿を陽平と玲が並んで歩いた。

「で、どうするよ？ 俺は別に明日でもいいけど」

陽平はさり気なく浩次をうかがいながら、四人へと投げかけた。

「俺は行くね。そんな楽しそうなところ今すぐに行かないと、俺の気が済まない」

「な、なら、僕も行こうかな」

「玲は？」

「行く」

浩次がわざとらしく鼻を吸る。

「……浩次は、どうするよ？」

「――行くよ。行けばいいんでしょ」

先を歩く涼弥が「別に来なくてもいいぞー」と蒸し返す。浩次は何か言い返そうとしていたが、玲の大きな咳払いを聞いて、びくりと背を揺らして押し留まった。

「どうした玲？ 風邪か」

「さあ、どうだろうね」

玲は細い眉を歪ませて涼しげに言った。

煙に巻かれたようで腑に落ちない陽平は、むっとした顔を玲に近づける。陽平の行動に意表を突かれた玲は、「近いっ!」と狼狽えて陽平を押し退ける。

中々やって来ない陽平を急かすように、校門に寄りかかった涼弥が声を張り上げた。

「おい、陽平! お前が案内しなきゃ分からないぞ!」

「分かったから、そんな急ぐなって」

涼弥のはしゃぎように苦笑いをしながら、陽平は先導して校門をくぐる。

校門を抜けると、視界いっぱい都下の景色が広がった。

住宅が多いことはもちろんだが、自然公園や緑地といった天然の緑も随所に見られ、ここが都会と田舎の境目であるかのように思えてくる。実際にそうなのかもしれないけれど、ここがどんな場所であろうと、陽平たちにとって大切な故郷であることに変わりなかった。

彼らは校門の先にある長くて急な階段を下りていく。六年生ともなれば、この急な階段を楽々と上り下りするが、入学したての一年生にとっては見ただけで卒倒してしまう代物だろう。

焦げ茶色や藍色、深緑といった暗色系の屋根瓦が、段々となって眼下に伸びる。

帰宅する際、必ず眺めるこの風景。その度に陽平は、色とりどりビー玉を家中からかき集め、坂の上から転がした幼少期の思い出をビデオテープでも流すかのように繰り返し甦らせるのであった。

――赤、青、緑。

カンカン、と音を立てて跳ね転がっていくビー玉たち。水滴のように滑らかなガラスの球面に目映い太陽の光が乱反射して、辺りの生垣に不規則な光を返す。

それはキラキラしていて、とても綺麗で。

わくわくして、胸を高鳴らせた。

これから自分に訪れる未来も、きっと、こんな胸が踊ることばかりが待っているんだと思った。

それは街中の騒ぎになった。

目撃者が何人もいたから、すぐ家に連絡がいつてお母さんが走って駆けつけてきた。温厚な母に叱られたことですら今ではいい思い出だった。だって、あのような綺麗な景色が見られたのだから。

「おい、大谷。そこまでどのくらいかかるんだよ？」

いつの間にか隣へ移動していた浩次が聞いてきた。

「俺の家の近くだから、ここから十五分くらいじゃねえかな」

「十五分かあ……」とため息交じりに浩次はもらす。

その体型じゃ辛いだろうな、と言い掛けて止めた。ここでまたケンカをする気など毛頭ないと、陽平は友好的な声で浩次に語りかける。

「それだけの価値はあると思うぜ。結構すごいから、そこ」

「本物なのか？」

「まあ、見てからの楽しみにしとけて」

豪華な洋風邸宅『シオハラ邸』の前を通りすぎ、角を左に折れて細い路地に入る。その先は進入禁止の緑地地帯となっていて、二メ

１メートルほどの高さがあるフェンスが張られていた。陽平はそれを慣れた動作で軽々と乗り越えて緑地へと踏み入った。

「お、おい。勝手に入って平気なのかよここ？」

フェンス越しの浩次が不安そうに『侵入禁止』と書かれた立て看板を指さした。

「シオハラさんの家が陰になって見えないから、さっさと入って木陰に隠れれば大丈夫だって」

陽平に催促されるまま、浩次は緩慢な動きで金網をよじ登る。動作があまりにも遅いのでその間に追いついてきた涼弥が一息に越え、玲と実も続いて金網を乗り越えて浩次を待った。

浩次がどつしりと緑地へ着地すると、五人は素早く木陰に身を潜める。

「おいおいおい！ 冒険っぽくなってきたな、まったく！」

声を潜めているが瞳を爛々と輝かせて、高揚を隠せない様子の涼弥。実は相変わらず挙動不審にきよろきよろと視線を泳がせている。

「ム、ムカデとか出るんじゃないかな」

「ムカデくらいでビビってんじゃないよ。俺なんて昔、土管みたいにデカイ蛇に襲われたことがあるんだぞ」

浩次は嘘っぽい自慢話をし出す始末。

「キミたち、少しは落ち着きなよ」

玲は普段通りの冷静さで浮き足立っている三人をいさめる。

「よし、そろそろ先へ進むぞ」

腰ほどまで生育した草を掻き分けながら緑地の奥へと進行していく。

林立する喬木の樹冠が空を覆って太陽からの光を遮っているため、緑地の中はどんよりとした灰色の膜が張っているかのように薄暗い。加えて、肌に吸い付くような湿気である。その陰気な景觀に触発されるようにして、五人の口数はぽつぽつと減っていった。

先鋭な草の先端が、ちくちくと露出した彼らの肌を刺した。地味な攻撃であるが、少しずつ不快感が蓄積していく。足元には統一感のない大小の石や、崩れた朽ち木が転がっていて、慎重に足を運ばなければ派手に転倒しそうであった。

十分ほど進行すると、浩次が遅れ始め、実も苦しそうな呼吸を始めた。

「ここで、少し、休憩するか」

涼弥も息が上がっているようで区切りながらそう言った。五人は足を止めてその場に座り込む。浩次が一番辛そうで、ひんやりとした地面を気にもせず仰向けに倒れて息を喘がせていた。

「あと、どれくらいなんだ？」

苔の生した石に腰掛けて涼弥が陽平に尋ねた。陽平はけろっとした表情で、

「もう少しだよ。この先にある上り坂を上ればすぐ」

「上り坂あ」と倒れている浩次の腹の向こうからもれた。

それぞれが黙り込んで呼吸を整えることに専念していると――近くの林藪から大きな動物が動くような葉鳴りがした。

「へびだああ！」

実の叫び声がしめやかな木立に跳ね返り木霊する。

先刻、浩次が吹いた法螺話を信じ切っていたようで、実は涙目になって周囲の草藪を見回した。

しばらく待っても何事も起こらず、実は安心して胸を撫で下ろした。

実も叫べるほど元気が回復したようなので、「そろそろ行こうか」と陽平は腰を上げた。浩次は不平をもらしながらも、他の三人が陽平の後を追うとのろのろと動き出した。

濡れそぼり堆積した落ち葉の絨毯が、靴の裏へと付着して五人の進行を妨げる。垂直と錯覚しそうな腐葉土の傾斜を四つん這いになりながら上がっていき、やっこの思いで上り終えたと、今度は本当に垂直の石壁が視野の外にまで広がった。

「おい、陽平。行き止まりじゃないか」

少し遅れて実が到着して涼弥と同じような反応を示す。

「あれ？　行き止まり？」

石壁は十メートル以上の高さを持っていて、見上げた壁の縁に沿ってフェンスが張ってあった。涼弥が頭の横に手をやって耳を澄ませると、車の走行音がその上から僅かに聞こえた。

「上はどうなってるんだ？」

「この上は、自然公園の前の舗道だよ」

陽平は断定的な口調で言った。

ああ、と涼弥は得心がいったようであった。頭の中にある地図に現在地を吹き付けるかのように、ふうと前髪を揺らした。

玲と浩次が上がってくるのを待ってから、陽平は石壁に沿って進んでいく。足場が傾いているため他の四人は苦戦しているようであった。

そして――

ついに、五人の前に大口を開いた洞穴の入り口が現れた。

高い石壁と地面が接触するところに穿たれた洞窟の入り口は、地獄の底に続いているかのように陰惨とした漆黒を解き放っていた。

「こ、この中に入るの？」と瞳を潤ませた実が陽平をうかがった。

「これが地下壕の入り口だから、そうなるわな」

涼弥も大きく唾を飲み下して目を見張っている。浩次は平静と変わらぬように見えるが、視線を落とすと二つの膝ががくがくと振動していた。

「陽平、明かりもなしにこの中に入るのかい？」

玲に問われて陽平は初めて思い出したようであった。

「まずいな、忘れてた。いつもは家から懐中電灯持ってくるんだけどなあ」

陽平は頭をぼりぼりと掻き、

「――誰か、灯りになりそうなもの持ってないか？」

「俺、マッチなら持つてるよ」

言ってから浩次は、しまった、というような顔をした。

「お、気が利くじゃねえか浩次。って、お前まだそんなもの持ち歩いてるのかよ」

陽平は苦々しく笑いながら手を差し出す。浩次は渋々といった体でズボンのポケットをまさぐる。

「いや、でもさ。今日はいいんじゃないか？ やっぱさ、また明日にしないか？」

「ここまで来て帰るのか？ 俺は別に構わないけど――」

陽平は、穴の底に上体を乗り出している涼弥を見やる。涼弥は神妙な顔をこちらに返して言った。

「行きたくないなら無理に行く必要はない……けど、マッチは置いてけよ。さすがに俺も真っ暗闇を手探りで進む勇氣はないからな」

涼弥は中へ入る気のようにだ。陽平は玲にもどうするか尋ねた。

「陽平も行くのだろう？ ならボクも行く」

玲の意思は変わらないようだ。

陽平は浩次が取り出したマッチ箱を受け取り「お前は？」と目配

せをし、今一度確認をする。

「俺は——なあ、別に入ってもいいけど……あ、そうだ。実が一人だとかわいそうだろ？　俺が付き添ってやるよ、なあ？」

勝手に残ることにされた実は、珍しく怒りを顕わにした面持ちになった。

「勝手に決めないでよ。ぼ、僕は行くよ」

「え？　ああ、そうか」

浩次の語尾が弱弱しく消えていく。

「よし、なら全員で行くぞ！　陽平、引き続き案内を頼む！」

「へーい」と間延びした声で陽平は答える。マッチに火を灯し、瘴気の垂れこめる魔窟への進軍を開始した。



『——暗黒に身を浸したとき、形容しがたい情動が全身に訪れた』

しっとりとした闇が、爪と肉の間から這い上がり背筋をなぞった。やがて全身を覆いこみ、瞳を侵食し視界は溶暗する。火が消えてしまわないように、空いている手で風除けを作る。背後から見れば、

俺の陰だけがくつきりと見えているのかもしれない。

『それは言葉による説明が利かない——知覚のみで味わうことができる不可思議な感覚』

先頭で薄弱と揺れる橙色の火が心強く感じる。暗闇に包まれた瞬間、とっさに近くにいる誰かの服を掴んだ。それが誰なのか薄闇の所為で分からないけれど、この薄い布の感触と先を行く小さな炎が、自分はたしかに存在していると報知してくれている。

言葉を知らない獣のように誰も口を開かない。

砂を蹴る音。

細かい呼吸音。

ほのかな灯り。

指先の感触。

それらが、不安定なボクを世界に繋いだ。

途切れてしまいそうな糸。途絶えてしまいそうなボク。

ボクはどうしてここにいるのだろう。ボクはどうして弱いのだろう。

『脳髓を麻痺させ陶醉させる——恍惚』

ただ、夢中になって灯りを追っていた。明かりが左に逸れて行けば、それに従って軌道を左に修正する。冷や汗が背中を伝い、シャツが引っ張られているかのように重い。心なしか肩も重く感じた。味わったこともない動悸が胸に奔る。恐怖から湧き上がったものではなく、未開の地を自らの力と知恵で切り開いていくような高揚

感と好奇心からだ。

今、俺たちは冒険をしている。

『それが外面に現れないように意識し——て表情を固くした』

不安で不安で、僕は目を閉じた。開けていても真っ暗なのだから、そんなことをしても意味がないと分かっている、怖くてそうせすにはいられなかった。誰の肩か分からないけれど、一心不乱になつてその肩を掴んで足を進めた。

目を閉じ、完璧に視覚を失うと不思議と居心地がよかった。

誰からも注目されず、誰からも中傷されない。

ここは僕にとって理想的な世界なのだ。

そう思うと恐怖心が消え失せていき、僕は瞳を開けた。

暗闇。

目を開けようと、そこに視線はなく、この世界でなら僕も彼のようにふるまえるんじゃないかと思った。

『いや——表情に現れていたとしてもこの暗闇の中だ、誰も気付くことはないだろう』

この暗闇でなら素直な言葉を吐けそうだった。

俺は胸から競り上がる吐き気を懸命に堪えていた。できることなら引き返したかったけど、吐き気とともに上がってきた見栄がそれを邪魔した。俺は惨めに声を殺しながら、手首を感覚がなくなってしまうほど強く握りしめていた。

『そう、自分ですらその——狂気の起床に気付かない』



灯りは何度も消えそうになった。その度に陽平は新しいマッチを取り出し、火を移し替えていたようであった。萎んでは膨らむという単調な動作をする灯火を眺め続けていたためか、軽い頭痛が実を苦しめていた。

「——みんな、止まれっ！」

遙か昔に忘れてしまった人の言葉。それを理解するのにしばらくの時間を必要とした。

火の上に陽平の顔が浮かび上がり、隈取りされたその顔はまるで別人のようであった。

それがとてつもなく奇妙で、ここは浮世ではないどこか地の底にあるお伽の国なんじゃないか、と実は思った。

陽平は壁際まで移動し、そこに置いてあった木箱を漁った。

「お、あった」そう言って箱の中から『白い骨』を取り出した。

——どうして、そんなものが……

実は息を凝らせて、白骨にマッチの火を移動させる陽平の姿を見つめた。

骨に移った炎が力強く燃え盛り、血液に似た粘質な汁をどくどくと垂れ流したので、あれはロウソクか、と実はほっとして息を吐いた。

陽平はロウソクを斜めにして地面に蠟を垂らし、その上にロウソクを固着させた。そうすることで、倒れてしまわないよう細工を施したのだろう。

誘蛾灯に群がる蛾のように、四人は陽平が設置したロウソクのもとへ集まる。

このロウソクの光力では周囲二メートルを照らすだけで、洞窟の全貌を把握することは叶わなかった。一寸先も見えない状況は、黒幕に包囲されているかのような威迫を彼らに与えた。

足元は意外にも凹凸のない滑らかなもののようであった。涼弥がそれを確かめながら、暗幕をくぐるようにして慎重に奥へと進んでいった。

「なんだこれ、水か？」

薄闇に紛れた涼弥が足を止め、中腰になって深奥の闇をのぞき込んだ。実たちも涼弥の傍まで移動し、深海のような不気味さを孕んだ黒い水面をのぞく。

そこには、たしかに水が張られていた。

視界が悪いため、その水がどのくらいの範囲に及ぶものなのかを見定めることはできない。水溜まり程度なのかもしれないし、大海のように膨大なものなのかもしれない。

浩次が水面を手の平で叩いた。水が跳ね、黒い波が静かに打って足元まで押し寄せる。波は足場の縁に衝突し、細かな泡を立てた。

「詳しくは分からねえんだけどさ。たぶん地下水がここで一時的に溜まってるんじゃないかな」

全員が抱いていた疑問に陽平が答えた。

「この底はどうなっているんだい？」

「それも詳しくは分かんねえ。一度、釣り竿を中に入れて深さを測ってみたんだけどさ、底まで着かなかったから二メートル以上はあるはずだぜ」

奥の見えない暗闇と淡々と波打つ黒い水は、星のない夜の大海原に臨んでいるような、漠然とした畏怖を彼らに感じさせた。

「しかし、すげえな、まったく！　よく教えてくれた、陽平！」

ロウソクのもとへと戻りながら、涼弥は陽平の背をばしぼしと叩いて功績を称えた。陽平は「いてえよ」と笑いながらその手を振り払う。

そのときの陽平の表情が驚くほど冷たく見えた。

ただの見間違いだと実は思ったが、ここがどこなのかを思い出し、底知れぬ不安を覚えてそれぞれの様子を盗み見るように観察した。

あちこち興味深く振りまわっている涼弥の姿は、平常の好奇心旺盛な彼と何ら変哲のないように見えた。しかし、実の目に映った涼弥は、獲物を前にした野獣のようで、メガネの奥で爛々とする瞳は何か良からぬことを企てているように思えた。

浩次は、それほど寒くもないのに肉付きのよい肩を抱え込むようにして震えている。

うつむく玲の表情はうかがえないが、影のさし方によっては口がつり上がっているようにも見えた。

そして、薄笑いを浮かべている陽平。

——なんだろう、この違和感……

「ここを俺たちだけの秘密基地にしないか？」

涼弥が出し抜けにそう提案した。

「それでも構わないよな、陽平？」

「いいぜ。そのために、ここを教えたんだから」

五人でロウソクを囲み、誰かが動いたときに起きた風で炎が揺れた。火が揺げば地面に投射された五人の影も揺れ、周囲を覆う闇も生き物の体内のように蠕動した。

その暗闇の奥底で、どろりとした墨がゆっくりと蠢いているのを実は瞳で捉え、目を凝らしてそれを注視する。

薄暗くよく見えない壁際を、ナメクジのように粘液を垂れ流しながらその闇はじくじくと移動している。やがて闇は自分の帰る場所を見つけたかのように、一段と濃密な暗黒となっているところへと沈み込んで行った。

来たときからずっと感じていた頭痛が加速したかのように激しさを増した。

こめかみを指で強く押し、皆から感じる違和感や今の不可解な現象を忘れ去ろうと努めていた実は、また新たな異質を発見した。

——あれは……お札？

あの『闇』が消えて行った先に、小さな祠のようなものが設えてあった。

木組みで作られたその祠の正面には、風化し色あせた紙切れが張られ、その奥へと招くようにひらひらと揺れていた。

実の抱いていた不安が爆発的に膨らんでいった。

——もしかして、ここは踏み入ってはいけない場所なんじゃ？

膨らみ始めた想像は、宇宙の如く膨張する。実はこの深憂の行き場を求めて、陽平に視線を投げた。その視線を陽平は微笑で受け止

める。

「実、どうした？ 汗がすごいぞ？」

「あ、あれは？」

実はその祠を指で示した。

「ああ、あれか。俺が初めてここに来たときからずっとあるぞ。安全祈願とか、そんなんじゃないのか。何てったって、ここは防空壕だからな」

実は吹き出した汗をハンカチで拭う。いくら拭いても汗はだくどくと流れ出て、抱えている心労の大きさを暗示しているようでもあった。

「実もいいよな？ ここが俺たちの秘密基地ってことで？」

いつもと変わらない陽平の声に、実の気は少しだけ休まる。涼弥もいつもみたいに気取った笑みに戻り、玲は相変わらず冷静で、浩次は「腹が減った」としきりに口にしていた。

先ほどの光景は暗闇がもたらした幻影か何かだったのだろう、と実は絶えずあふれ出てくる感情を強引に押し込めた。

「うん、僕もそれでいいと思うよ」

「玲も浩次もいいよな？」

二人が首肯すると、ぱん、と涼弥が音を立てて手の平を合わせ、注目を集める。

「おっし決定！ 今日からここは俺たちの秘密基地だ！」

秘密の合図

良い国作ろうウンチャラ幕府とか、源の何々がどうだとかを、渡辺が力説をする度にその口から飛び出だした飛沫が教卓前の生徒のノートに点々とシミを作った。

毎日、唾のしぶきを浴びるその子は自分の名字を呪い、早く席替えの日がくるよう神様に祈るのである。

そんな授業の風景を、陽平は退屈そうに頬杖をついて眺めていた。前の席の浩次は、肉の付いた腕を枕にして居眠り。玲は通例に従って下を向いて読書。その二人の先にいる涼弥は、渡辺が黒板に向けたのを見計らっては消しゴムのカスを投げつける一人遊び。真面目に授業を聞いているのは実だけである。

平々凡々とした風景に飽きたのか、陽平は教科書をばらばらと捲り、まだ落書きをしていない偉人を探した。

つるつとした手触りのページを次々に繰ると、温かい木の匂いを残した風が顔の横を吹き抜ける。その風情を味わうようにして教科書を捲る。

しかし、どの偉い方も万遍なく陽平の死化粧の餌食となっていて、新たな獲物はなかなか見つからない。

諦めて居眠りでもしようかと思いついたとき、今まで見逃してきた索引のページで陽平の指が止まった。新たな獲物を見付けて舌を舐めずり、彼は喰い気味にそのページをのぞく。

そこには、各単語の所在を示すページ数の羅列とともに、草むらの中を前傾姿勢で歩いている『猿』のような絵が描かれていた。

これは『アウストラロピテクス』という大昔の地球にいたヒトの先祖のようなものだ、と陽平はテレビで見知っていた。

それより何より、この猿人のくたびれて歩いている姿が教壇に立って熱弁を振るっている渡辺に似ていて、陽平は可笑しくて声を殺して腹を抱える。

捲れ上がった上唇は、下品を通り越して悲惨であり、その上で瞬くつぶらな瞳が哀愁を誘う。猫背の立ち姿は生き急いでいるようにも見え、毛むくじゃらの体は皺くちやのシャツを連想させた。

見れば見るほど、意識すればするほど、双方は瓜二つとなっていく。

——あのシャツ、いつも皺があるけど毎日ちゃんと洗ってんのか？

陽平は、授業に熱中している渡辺の服装を下から上まで眺めた。

——ネクタイだって、皺だらけでいつも同じ柄だ。それを止めているピンも始業式からずっと同じものを使ってるような気がするぞ。ズボンも変わってないし、もしかして、他の服とか持っていないのか？

みすばらしい担任を少しだけ不憫に思ったが、そのような同情心は熱心に授業をする猿人の前では春霞のようにぼやけて消えた。

教科書を目の前に掲げ、描かれている猿人と黒板の前にいる渡辺を並べて見比べる。やはり両者は似ていて、陽平はついつい声を出して笑ってしまう。

陽平がこぼした笑い声で授業に水を差された渡辺は、「大谷、どこか可笑しいかな？」と持っていた教科書を教卓に置いた。

陽平は狼狽してとっさに、

「こ、この猿みたいなの絵って、何ですか？」

猿人が描かれたページを見せるようにして言い訳を取り繕った。渡辺は思いもよらない質問に驚いたようだった。つぶらな瞳をぱちぱちと瞬きさせ、教科書を捲って陽平が示したページを開いた。

「ああ。これは、アウストラ……アウストラロピテクスだよ」

舌をもつれさせて渡辺は答えた。

陽平は今にも吹き出しそうな笑いを鼻からすかし、「アウストラロピテクス？」と、さも初めて耳にした単語のように復唱した。

興味を示してくれたことが嬉しかったのか、渡辺は澆漑と応じた。

「こいつは、昔の人間っていうのが一番分かりやすいかな」

渡辺は教科書を生徒たちに向けて広げ、自分によく似た猿人の絵を指さす。

「ほら、こいつは二本の足で歩いているだろう。猿は基本的に四足で歩くんだけど、アウストラロピテクスは、ヒトに近いから二本足で歩くことができるんだ」

消しカスの弾丸を製造していた涼弥が動きを止め、何か思いついたのか質問を重ねた。

「センサー、人は猿から進化したって聞いたことがあるんですけどー、それは本当なんですかー？」

どうやら彼は、猿人の話題を広げて授業の進行を遅らせようと企んだようであった。

いつも不真面目な生徒たちが自分の話に食いついてくれている、と渡辺は涼弥の真意に気付くことなく鼻高々に講説を始める。

「ヒトはサルから進化した、って信じられていた時代もあったけど、本当のところは、ヒトとサルの祖先が同じだけで、ヒトはサルから進化したんじゃないんだよーそうだね。分かりやすく言えば、ヒトとサルは遠い親戚ってところかな」

「へー、センサーって物知りですねー」

渡辺の鼻の穴がブラックホールのように大きく拡張し、二つの穴は音を立てて周囲の空気を吸引した。涼弥に褒められたことが相当嬉しかったようだ。

「そうだ！ 君たちはヒトとサルが、具体的にどう違うか知っているかな？」

いよいよ火が点いた渡辺は、いつもより多めに唾を飛ばす。教卓のすぐ前の生徒のノートが、見るも無残な状態になったのは言うまでもない。

目論み通り授業の指針を逸らすことに成功した涼弥が、知識をひけらかす渡辺を眺めながらあの卑しい笑みを浮かべているに違いない、と陽平は予想した。



授業後のホームルームが終わり、生徒たちが帰り始めたのを見計らって涼弥の席へと集まった。

銘々の顔を見やり、涼弥は顔の前に真っすぐ伸ばした人差し指を立てる。それを確認した陽平、浩次、実も続いて自分の顔の前へすっと指を立てた。玲だけが口を固く結び無然としていた。

「嫌だね。ボクはそんな下品なこと絶対にしたくない」

「まったく。昨日、みんなで多数決をして決めたじゃんか」

見せ付けるように指をくねくねとさせながら涼弥が言った。

「多数決なんて悪の総意だ。そんなもの、たとえガンジーが認めたとしてもボクが認めないね」

ボクは屈しない、とそっぽを向く玲に「今日だけだぞー」と陽平が投げやりな言葉をかけた。

一本指を立てた四人は互いに視線を交わし、涼弥が仰々しく口を開いた。

「それではみなさん、私に続いてください」

そして、顔の前に立てた指を自分の鼻の穴へと突っ込んだ。

他の三人も次々に自分の指を鼻へ、ぶす、ぶす、ぶすと勢いよく突き刺した。

真顔で鼻に指を入れている滑稽な四人を横目で見ながら、玲は昨日の出来事を思い出し、深くため息を吐いた。

地下壕を秘密基地にすると決めた後、五人は帰りながらあの壕を今後どのようにするかを話し合った。

より快適なものにすることを優先とし、「各自必要なものを持ち込もう」と言ったのは涼弥であった。皆それを了承し、明日から洞窟の改装に着手しようということになった。

「それはそれでいいけど。俺、野球があるから毎日はこちらだけだ」

浩次がそう告げ、実もおずおずと続く。

「僕も、家庭教師の日があるから毎日……」

涼弥は唸り声を上げたかと思うと、すぐさま妙案が浮かんだのか目を見開いた。

「合図を決めよう！」

皆が何のことかと首を傾げ、その疑問を陽平が代弁して尋ねた。涼弥は自分の方策に自負があるのか胸を反らす。

「合図を決めて、毎日ここへ来る前にそれで確認をとるんだよ。それで『行ける』合図をした暇な奴だけでここへ来て整備をする——どうだ？」

「別に口頭でよくないかい？」と至極単純な疑問を告げる。涼弥は呆れたように「まったく、玲は分かってないなあ」と首を横に振った。

「秘密基地と言えば合言葉。これは男のロマンだぞ、玲」

なら合図ではなくて合言葉を決めるべきだろう、と口を挟もうと思ったが、場をかき乱すのも何であったので止めた。

——そもそも男のロマンってなんだよ。

「どうせやるなら、かっけえやつがいいよな」

陽平の言葉を皮切りに、話の主旨はその合図をどのようなものにするか、ということへと移って行った。

「それは僕も賛成。ヒーローの変身ポーズ見たいなカッコいいや

つがいいな」

「馬鹿か。そんな目立つことやってたら、先生に、またあいつらなにか企んでやがるってバレちまうぞ」

「一理あるね。今ここにいるボクたちにしか判別できないような、それでいて明瞭でなおかつ意思疎通が容易な合図でなければ意味がない」

「お前ら興奮するのは分かるけど落ち着けよ、まったく」

「なら、涼弥が何か案を出してくれよ」

「そうだな――」と涼弥は瞑目し「洞窟……穴……」とぶつぶつと呟く。

玲がオレンジ色の街並を眺めていると、

「――ハナノアナ」

立ち止まった涼弥が片言の外人のように囁いた。

「鼻の穴だよ、鼻の穴！」

そう言って自分の鼻を指さす。

「その日に用事がなくて行ける奴は、自分の鼻の穴に指を入れて他の奴に合図を送るんだよ！ 同じ合図を返したらそいつも行けるってことで、鼻の穴に指を入れなかったら、そいつは今日行けないってことにしよう！」

「――いやだ！」

玲は堪え切れずに叫んだ。

「そんなもの、鼻の穴でやる必要はないじゃないか！」

「じゃあ、どの穴ですんだよ？ 耳か、口か、ケツか？」

ケツ、という言葉に反応した玲は、頬を赤らめながら怒鳴る。

「そもそも！ 穴でやる必要がないと言っているんだよ、ボクはもっと、単純でいいものがあるだろう！」

「でもさ、『明瞭で意思疎通が容易な合図』って言ったの玲だぜ？ 鼻の穴に指を入れることが洞窟に入る合図というのは、なかなかその条件に見合ったものだと思っぞ。——これ以上にいいものがあるなら、なにか案を出せばいいじゃないか」

何も思い浮かばず、ぐううう、と腹の底に響くような唸り声を上げる玲を尻目に、涼弥はしたり顔で言う。

「それでは、公平を期して多数決で決めたいと思います。賛成の人は手を上に——」

夕映えの住宅街に四本の手が上がるのを見て、玲は発狂せんばかりに声を張り上げた。

「キミたちはボクが嫌がる姿を見たいだけだろう！」

「そんなことないよ、なあ？」

陽平が他の三人に確かめるように見回す。

「そうだ、普段は冷静な内田が狼狽える姿が見たいから手を上げたわけじゃない」

「僕も、江ノ島くんたちと同じだよ」

あの内気な実までもがにこにことした笑みをしてそう言ったとき

は、さすがの玲も悔しさのあまり齒噛みをした。

「とにかく！　ボクは絶対にそんな下品なこととはしないからな！」

玲は頑としてその合図を認めない意向を表明した。

鼻の穴に指を突っ込んでいる四人の姿をこっそりと見ていた玲に
気付いた浩次が、殊更に嫌味たらしさを強調して言った。

「あれえ？　内田は何か大事な用事でもあって来られないのかあ、
残念だなあ」

玲はむきになって言い返す。

「そんなこと言っていないだろう。ボクも行くよ」

「だったらねえ？」　「いやだ」　「なら今日は来ないんだな？」　「
行く」　「だったら」

そのような押し問答を再三繰り返していると――

「お前ら、それぐらいにしとけて」

涼弥が教室の前方を顎で指して、いよいよ白熱し始めた二人を止
めた。

その顎が示す方へ顔を向けると、疲れ切って顔面蒼白な担任がプ
リントや出席簿をまとめてふらふらと教室を後に行くところであっ
た。

陽平は殊勝な面持ちでランドセルを背負い直し、声を潜めて言っ

た。

「今日は初めての実施だったから仕方ねえけどさ、明日からは念のために人目に付かないようにやり取りしよう。目立ったこととして、ボロを出してあの場所のことを知られたくねえし」

その日から、草ヶ丘特殊地下壕、あらため秘密基地の探索が開始された。

洞窟の暗闇を進むには何らかの明かりが必定で、一度自宅に戻ってから懐中電灯なりを持参する運びとなった。それを面倒くさがった浩次が、「今度から学校に持っていけば、わざわざ家に戻らなくてもいいじゃないか」と提案をした。

それを陽平がやんわりと拒んだ。懐中電灯などの必要ないものを学校に持ち込み、それが教員に露見した場合、目を付けられて行動が制限される恐れがあったからである。そのような経緯を踏み、放課後は一度解散してから各自の家から持ってくることにしたのだった。

帰宅後、洞窟の前で待ち合わせをして五人で中へと入った。地下水の溜まるあの空洞を拠点とし、陽平の案内に従いながら少しずつ内部を巡った。

陽平が迷ったときのために目立つ石ころなどを目印に置いていたので、洞窟にまだ馴染のない四人もある程度は錯雑する洞窟内構造を把握することができた。

が、「洞窟に地図はロマン！」と涼弥が言い張り、簡易的な地図を陽平が一枚作成することとなってその日は解散した。

次の日からは、地下水溜まりの拠点を改装することにした。涼弥が持参したキャンプ用の大型ライトを五人で囲む。

キャンプ用と銘打っただけのことはあり、その明かりはロウソクのものよりも強力であった。それでもすべての暗闇を照らすには至らず、壁面には暗闇が薄曇り、濁りのように停留していた。

「おーし。それじゃ、それぞれ持ってきたものを一斉に出すぞ」

五人は、拠点を飾り付けるために持参してきたものを一斉に取り出した。

涼弥が真っ先に目を付けたのは浩次であった。

「おいおい、さすがにそれは――まあ、ある意味お前らしいか」

馬鹿にされた浩次はお菓子が大量に詰まった袋を胸に押し付け、反論する。

「市川だって、なんだよそれ。ただのデカイ海賊の人形じゃなか
！」

「バカ野郎！ これはすごいんだぞ！」

涼弥は人形の頭をぽかりと叩く。

人形は片目に黒い眼帯を着け、団子鼻の下にヒゲを蓄えた『如何にも』な海賊であった。ニタニタと形容するのがもっともらしい表情を浮かべ、その何か含んだかのような顔は持ち主のそれとよく似ていた。

人形自体の大きさは、薬局やケーキ屋の前に置かれているビニール製のマスコット人形くらいある。どうやって家から運んできたのか、そもそもどうしてそのような代物が家にあるのか、と誰しもが気にはなったが、涼弥なら工場に特別注文して作らせていそうだと敢えて口にはしなかった。

「ほら、ここを開けると――」

涼弥は海賊が胸に抱えているプラスチックの宝箱を開けた。

「どうだ、小物入れになる！」

「しょぼいよ、涼弥くん」

これ見よ顔で人形を自慢する涼弥に、実の口から本音がこぼれた。

「そ、そういう実は、なにを持ってきたんだよ？」

思ったより反応が芳しくなかったことに落ち込みながら、涼弥が尋ねた。

「僕は――」と実は一メートル四方ほどの額縁に入れられた絵を前に掲げる。

絵の上半分は濃い青、その下には一面に緑色が描かれていた。

その絵を見て、おお、と感嘆の声が上がった。

一見すると、青と緑の二色が画布を上下に分けている絵に見える。よくよく目を凝らしてみると、その二色の中にも濃淡の違いがあり、なお見続けると次第に青色は膨大な青空に、緑色は広大な草原の風景画に観えてくるのである。

その独特な絵に面白がって触れようとした浩次を、実が慌てて止める。

「あ、これは砂絵だから、触らないで！」

それを聞いた浩次は不満げながらも手を引っ込めた。

幻想的なようで現実味のあるその絵を、食い入るように見つめていた陽平が、やけに真面目な顔で尋ねる。

「それって、どこか、外国の景色なのか？」

「あ、これは……昔、演劇で観たイメージをもとにして描いてみたんだ」

「……へえ。上手いもんだな」

絵の中の風景を実際に眺めているかのように、はっきりとしない調子で陽平は絵を称賛した。

実ははにかみながら、

「大谷くんはなにを持ってきたの？」

「俺？ 俺はこれ」

陽平は背後に置かれた物体を指さす。

後ろには、中敷きが外れ小さめの棺と化した本棚がどっしりと構えていた。

「そんなものを一体どこから持ってきたんだい？」

玲が半笑いで聞いた。

「粗大ごみの日に置いてあった奴を持ってきたんだ。んで、玲は？」

陽平の目線が玲の手元へと落ちる。

「はんっ」「ふっ」「ぶわっ」「くっ」

玲の胸に抱かれた可愛らしいウサギ型の時計を見て、玲以外の四人は盛大に息を吹き出した。玲は赤面し、弁解するように息巻く。

「ここには時計がないじゃないか！　ボクは必要だと思って持ってきたんだ！　本来キミたちはボクに感謝すべきなんだよ！　それがなんだ、その反応は！」

「まあまあ」

憤然とする玲を何とか落ち着かせたかと思えば、涼弥は再び茶化す。

「しかし、玲。最近のお前はキャラが変わったな」

「う、うるさい！」

玲が喚くように取り乱し、洞窟内には温かな笑いが満ちる。

外面では怒りを顕わにしながらも、玲の心は、この家庭的ともいえる空間から穏やかさを感じていた。

伍物語

五人が秘密基地作成に執心していたので、学校には度を越さない活気と束の間の余暇を楽しむかのような平穏が訪れていた。職員室では、昨今のア行の問題児情勢の話題で持ちきりであった。

「最近、あの生徒たちの噂を聞きませんか」

「それは平和でいいですね」

「私は少しばかり怖いです。何というか、嵐の前の静けさといいますか……」

「たしかに。彼らは何をし出すか分かりませんからね」

「またトイレットパーパー立て籠もり事件でも起こすのではないですか？」

「それは……あり得るかもしれませんがね」

「奴らのことです。もしかしたら、もっと恐ろしいことを企てているかもしれませんよ」

「渡辺先生に少し聞いてみますか」

「先生も相当疲れているようですね」

「仕方ありませんよ。彼ら一人でも手に余るというのに、それが五人ともなると」

「考えただけでも悪心がしますな」

「あ、渡辺先生が来ましたよ」

「彼らの様子はどうなんですか、渡辺先生？」

「いやあ、私には何とも……」

担任の渡辺に彼らの様子を尋ねても煮え切らない返事をするだけで、この事態に教師陣も首を傾げるばかりであった。そのような不穏な空気が密かに蔓延しているとは露にも思わない彼らは、着々と洞窟を居心地の良いものへと変えていった。

合図の出し方ひとつでも、どれだけ巧妙に日常の所作の中に仕込み、周囲に悟られないようにするかということに心血を注いだ。

大きく伸びをしたときにさり気なく、音楽の授業中にリコーダーを吹きながらさり気なく、給食の牛乳を飲むときにさり気なく。周りの生徒たちに気取られないように、彼らはひたすら『さり気なく』鼻の穴に指を入れた。

この合図を知らないものが見ても、「またあいつら変な遊びしてるよ」程度の感想しか持たなかったことだろう。

玲は依然としてその合図への反骨精神を顕わにし、一度も実行することはなかった。

体育の授業中に暇を見つけ、そのことについて五人は相談した。玲は断固として首を縦に振らなかった。涼弥たちは強要することを諦め、玲だけは特例として鼻の頭を擦るだけで可とした。

「最初からこのようにすれば良かったじゃないか」

体育の授業を終え、教室に戻ってきた玲はそう言って体操着の胸を張った。

「いや、玲が素直に折れれば丸く収まったはずだぞ——ってお前、どうしてまだ体操着なんだ？」

生徒たちは更衣室で着替えを済ませて座席に付いている。まだ体操着を着ていた玲を見て涼弥は不思議そうに尋ねた。

「今日も行くのだろう。どうせ服が汚れるんだ。着替えても仕方がない、と思ってるね」

そっか、と涼弥はさして気にも止めないで前席の実へと話しかけ

始めた。

帰り支度をしていた玲の元へ、物言いたげに唇を歪めた陽平がやって来た。彼は何も言わず、けれど何か言いたげに玲の席の横に立っていた。

「何だい、陽平。用事があるのなら早く言えばいいじゃないか」

その語気にはそこはかとないうるささが含まれていて、陽平の返す言葉も自然と冷めたものになる。

「服、どうしたんだよ」

「別にどうもしていない。今日もあの場所に行くのだろう。わざわざ着替えるのが面倒くさく感じたから、このままでいるだけだ」

言って玲は陽平を睨みつける。その瞳の奥には、これ以上の詮索を許さない、といった力強い感情が宿っていた。それに気圧された訳ではないが、陽平は何も言わないで自分の席へと引き返した。

陽平は机に開いた粒ほどの穴を睨みつける。切歯扼腕するが如く全身に力を籠めて穴に強く視線を注ぎ、溜まった感情をそこへ発散する。

——自分たちが、いわゆる問題児として教師たちの間で忌み嫌われているのは知っている。俺や涼弥はいろいろとやらかしているし、浩次だっていろんな問題を起こした。実も教師にとっては迷惑なやつと思われているだろう。

俺たちは、それ相応のことをしてきたのだから、問題児として見られるのは仕方のない結果だとは思う。けど……あいつは、玲は、俺たちと一緒にいるから色眼鏡で見られているだけだ。

伏せていた顔を上げ、彼は鋭い視線を教室中に向けた。

——授業中に本を読むことのどこが悪いのだろう。もっとひどいことをしている生徒たちもいる。真新しい携帯電話でメールを打っているやつ。こっそりと持ち込んだ携帯ゲーム機で遊んでいるやつ。悪口が書かれた手紙のやり取りをしているやつら。

そいつらは常に影に隠れて、こそこそと規則を破る。大人たちはそれに気付かない。大人たちが叱るのはいつも、目立つことをしている俺たちだけだ。堂堂と好きなことをして、結果として規則を破っている俺たちだけだ。

どちらが正しいとか、そういう問題じゃない。どちらも規則を破っていることに変わりない。俺たちがコインの表だとすると、ずるがしこいそいつらは裏。表側には派手な装飾があるから、手に取ったものの目を引いてしまうだけの話だ。

教室にやってきた渡辺へと、彼は湧き出した怒りをすべてぶつける。殺気にも近い感情を浴びせられているとは思いもしない渡辺は、教室のざわめきを気にも止めないでホームルームを始めた。

陽平は再び机の穴を覗む。その先にいる何ものかを呼び覚ますかのように、じつくりと怒りを練り上げる。

——先生たちは、玲のことも俺たちと一緒にたにして見ているけど、陰で規則を破る姑息なそいつらは違う。玲が、ただの大人しい生徒だということを知っている。

だから——『標的』にする。

汚い言葉を吐きかけようが物を隠そうが、薄い反応しか示さない玲は、そいつらの格好の餌食になるんだろう。どんなことをしても、教師陣にバレることがないから、そいつらは安心して実行する。それに……

『あのこと』も玲が標的にされる原因なんだろう。

陽平は口内に広がった苦い鉄の味を唾液と一遍にして飲みこむ。その液体は、後に引けない後悔のような味がした。

——俺がいけないことは分かっている。玲とした、あの約束をないものにしてしまえば、すべて解決する……でも。

でも、それじゃ——

「おい、大谷。帰るぞ」

穴から顔を上げると、浩次がランドセルを肩に引っ掛けて立っていた。

いつの間にか帰りのホームルームも終了していたようで、入り口付近に涼弥と実、玲の姿もあった。

「悪い、ぼうつとしてたわ！」

陽平はできるだけ普段通り、軽快に笑う。そうしなければ、たちまち顔面の骨格が崩壊して笑顔も崩れてしまうと思った。一度でも壊れてしまえば、もう同じように笑えない気がした。失ってしまったものは絶対に返ってこない気がした。それが恐ろしくて、陽平はひたすら丁寧な笑い浮かべた。

三々五々になって帰路に着く生徒たちの中、五人は密着するようにして完成間近に迫った秘密基地のことを話しながら歩いていた。

「他になんか必要なもんってあるか？」

「俺はもう十分だと思うぜ」

陽平に追隨して実が「僕も」と頷く。

「俺はもう少し食料の蓄えがあった方がいいと思う」

頬を弛緩させた浩次が言うと、玲が鋭く切り返す。

「貯蓄しておいても、キミがすべて食べてしまうじゃないか」

「そんなこと――」と言い掛け、持ってきたお菓子をすべて自分が食べてしまったことを思い出して浩次は言い淀んだ。

「よしっ、今日中に仕上げて、明日はみんなで完成パーティーを盛大にやろうぜ！」

完成した秘密基地を思い浮かべ、満足そうにうんうんと首を縦に振っている涼弥に、実が申し訳なさそうに言った。

「……ごめんね。今日行けなくて」

「気にするな！ 明日は四時間目までしか授業がなくて都合がいいし。それに、用事があるのは仕方ないことだしな。――もつとも、気にも止めてないやつもいるけど、な」

「えっ？ なんだよ、ジロジロ見て」

浩次は怪訝そうに目を細めた。

そんな浩次を歯牙にもかけず涼弥は、「じゃっ、陽平と玲はまた後でな」と手を振りながら路地を折れて矢のように坂を駆け下りて行った。それを契機に皆ばらばらに別れ、自身の家路に着く。

陽平は自然公園の前で玲と別れる。

「またあとで」

「うん」

乾いた別れのあいさつを交わし、自然公園を突っ切って行った玲の背を目で追った。

緑葉を透過した光は、茶色い砂の跡が残る体操着に落ちて濃緑の影を作る。歩く度にその裾が風を孕んで大きく膨れ、背負っているランドセルが芽吹き始めた新緑の中でやけに映えて見えた。その姿が林道の端に消えてから、陽平は緩く湾曲した舗道を歩き始める。

左側には転落防止用のフェンスが張られている。その向こう側には、よく見知ったただっ広い緑地が見下ろせた。ここからだ、緑地を挟んだ先にあるシオハラ邸や、坂を駆け上がっていく家々が望むことができ、丘の上に立つ城のような大きな校舎もありありと見えた。

陽平は靴の底で黒光る路面を叩く。

——俺たちの街の下には、縦横無尽に張りめぐっている地下迷路がある。

その空想に限りなく近いものが、この靴の下に実在している。

彼は走り幅跳びでもするかのように加速をつけ、アスファルトを強く蹴り上げて大きく跳躍する。

ほんの一時だけ宙に浮き、今度は両足で地面を鳴らした。

着地の反動で膝が軋み、体勢が崩れて転倒しそうになっている彼を転ばせようという思惑があるのか、一際強い風が吹いた。

風に当てられた髪の毛が散り、それがぱらぱらと頬を落した。くすぐったそうに毛を払いのけ、陽平はしっかりと足取りで歩みをアパートへと向ける。

住まいはすぐに現れる。築三十年の年季の入った木造アパートで、二階を支える柱には白アリが食い入った著しい跡が見られる。山の上から吹き下りる風によって、建物全体が絶えずカタカタと音を鳴らして振動しており、いつ倒壊してもおかしくない、と近隣ではもっぱら噂の物件である。

薄い木戸に鍵をさし込むと、かちゃ、と安っぽい音がして開いた。陽平は煙草の臭いが染みついた雑多な居間を抜ける。物置のような自室の隅にランドセルを置き、居間へと取って返す。食べかすが付いて汚れた食卓の上にビールの空き缶を見付け、手早くそれを片付けた。台所のシンクにはフライパンや皿が組み重なって、山のようになっている。彼は時計を確認し、溜まった食器類を洗い始める。流れる水がシンクに映った彼の顔を歪ませた。その顔が泣いているように見え、陽平はそっと目元に触ってみたけれど、乾燥した肌に触れるだけであった。

——もう、四年も経つのか……

涙が尽きたその先からは、なにがあふれてくるのだろうか？ と、あの地下壕に出会うまでの自分は、純粹無垢な疑問を抱いていた。涙の枯れたその先は、黒くて深くて汚くて——でも、暖かいものがあふれてくるよ。

胸臆に立ち尽くす過去の自分にそう囁いた。

陽平は台所から懷中電灯を持ち出し、戸締りをしておんぼろのアパートを後にした。

最初はゆっくりであった彼の歩調は、次第に速さを増していき、たちまち全力疾走となっていた。

陽平は、自分が呼吸をしているのかも分からなかった。ただがむしやらに地面を蹴り、空気を掴むようにして腕を振った。目の端にちかちかと星が瞬き、張り詰めた腿を痛みが覆う。その痛みから逃

げるかのように彼は必死に駆けた。

自然公園の入り口がのぞいてきた辺りで体力の限界が訪れ、陽平はつんのめりながら足を止めた。

酷使した体を労わるようにして金網へと背中を預け、全身で息をする。この網が壊れて背後に倒れでもしたら、彼もろとも下の緑地に真っ逆さまとなるだろう。

陽平は、絶えず肺から絞り出される熱い呼吸の中にある達成感を久しく思った。

もっと幼かった頃は、何のしがらみも知らず常に全力で駆けていた。その先に何かがあるのか、早く知りたいと思っていた。今もそれを知ることはできていないけれど、走り続けた先にあるものが、決して明るいものだけではないことを彼は予感していた。それでも、歩みを止めることはできなかった。もし止まってしまうば、僅かに感じていた希望でさえも、いつしか夢のように覚めてしまうような気がしたからである。

顎まで垂れてきた汗を拳で拭い、陽平は正面に広がる自然公園を眺めた。

都市緑化のために保護された自然の緑。繁殖する木立の隙間から白い漆喰の建物が小さくのぞく。

——あそこには、親のいない子どもたちが住んでいる。

その温かな緑に抱かれた『ミナシゴの家』を見据えていた彼の心音が、とくん、と跳ねた。

それが発端になったのか、陽平は見える範囲に人影がないことを確認し、もたれていた転落防止のフェンスから弾けるように体を引き起こした。身を反転させ金網に手を掛けてよじ登る。

がしゃ、がしゃ、と歯車が絡まって軋むような耳障りな音を立てながらフェンスを乗り越え、その先に突き出ている僅かな空間にひ

らりと降り立つ。

その小さな足場から十メートルの落差がある緑地まで、遮るものは一切存在しない。断崖絶壁に立っているかのような心境で彼は後ろ手に金網に掴まり、そこからの景色を一望した。

薄く伸びる巻雲が浮いた青空は地平を越え、その下に広がる緑地を丸く包み込む。

四年前に見た、青と緑の静かな景観とよく似ていた。

とくん。

——お母さんと動物園に行ったことがあった。

陽気な昼下がりで、電車に揺られてたどり着いたこの街の名物といってもいい動物園。二頭の大きな象の門を抜けて、動物臭さが漂う園内に入った。動物たちの檻を巡りながら、母は一匹一匹丁寧に解説をしてくれた。

『バクは夢を食べるのよ』

『オスのクジャクの羽は、メスに好きになってももらいたいから綺麗なのよ』

『タヌキは人に化けるのよ』

『クマは寒いところと暑いところでは毛の色が違うのよ』

『横縞のシマウマはいないのよ』

最後に立ち寄ったのは、ライオンの檻だった。檻の奥の日陰で身を横たえていたライオンは年老いていたのか眼光に威厳はなく、たてがみは萎びたタンポポのようで百獣の王の名に相応しくない有様であった。

『元氣ないね』

そう母に尋ねた。

『そうね、檻の中は息苦しいのかもね』

母はそう答えて、闘志の欠片もないライオンを寂しそうに見つめた。それを聞いた俺は、元氣のないライオンを檻の中から出して上げようとも思っただろうか、おもむろに檻へと手を伸ばした。

そのときのことは、今でも克明に記憶に残っている。伸ばされた手を見て、ライオンの目の色が変わった。強靱な四肢を跳ね伸ばし、瞬時に檻の格子にまで接近し鋭い牙をむき出しにして、吼えた。

檻の中にいようと、埋めることのできない猛獣との圧倒的な力の差を感じた。

人は猛獣の恐怖から逃れるために、檻の中に封じ込めているのだろう。封じ込めて安心し忘れてしまっているのだ。彼らの凶暴さを、寧猛さを。檻の中の猛獣は虎視眈々と爪を研ぎ、牙を尖らせて檻の鍵が開かれるときを待っているのだ。

恐怖のあまり母の胸で泣き出ながら、動物園を後にした。帰りの電車の中で、母が語ったライオンの子どもの話。

獅子は堅強な子を選別するために、産み落とした我が子を崖から突き放す。そうやってよじ登ってきた子どもだけを育て、より強い子孫を残そうとする。

——檻の中にいたあのライオンも、試練に耐え抜いた猛者なのだろうか？

とくん。

陽平は金網を背に滑るように蟹歩きで移動し、蔦が金網に巻き付いて舗道側から姿が見られなくなる死角に入った。

呼吸を整え、指を一本一本網から離していく。薄く息を吐き、緑地に茂る数々の緑を見下ろす。そして――

前方の虚空へ、ゆっくりと身を倒した。

陽平は世界から解き放たれ、鈍化した時間を降下した。

緑がコマ送りとなって接近してくる。

自分が落下しているのか地面がこちらへと近寄ってきているのか、彼にはよく分からなくなる。

全身で切った風がいななきを上げる。

見えないはずの空は高くて深いと想像できた。

虚脱感と親近感を受けた体に浮遊感が訪れ、時の間断を見つめる。

――動物園に行った次の日、お母さんは独りで家を去った。

俺は父と二人だけになった。

母のいない家。父との生活。

これは試練だと思った。

だから、俺は自分自身を試そうと思って、四年前、今みたいにフエンスを越えて緑地へ飛び降りた。飛び降りて、死んでしまえばそれまでで、もし生きていられれば俺はまだ希望を抱くことができる。母は敢えて俺を一人残すことで、より頑強に育つように仕向けた。そのために、俺を動物園へと連れて行き、ライオンの子ども話をしたのだ。そして、ライオンが子突き落すように、俺が独りで強く生きることを願って去ったのだ。そう思わなければやりきれなかった。あの優しい母が自分を棄てたなんて、信じたくはなかった。

飛び降りた小さな体は、うず高く積み重なった枯葉と柔らかな土壌に受け止められた。

十メートルの高さから傷一つ負うことなく緑地へと倒れ落ち、掴みとった勝利を噛み締め、生きる希望を見出した俺は、何気なく顔

を向けた先に大きく口を開いた大穴を発見した。

幼い日の俺は、この闇の奥に僕を生かした何かがあるのかも、と思ひ導かれるように地下壕の暗闇へと足を踏み入れた。

無明の闇に身を置くことは一種の修行に近いのだろう。暗闇を進んで行くにつれて心身から数々の苦痛が綺麗に拭われていった。

その日以来、どうしても生活に耐えられなくなったときにだけ、この場所を訪れては鬱積したものを吐き出した。そうすることで自身を奮い立たせ、耐えることができた。このまま現状に耐えていれば、いつしか母が帰って来て、「よく一人で頑張ったね」と、昔より十センチも伸びた背丈に驚きながら褒めてくれると思った。

地表に身を抱かれた陽平は、鼻孔を膨らませて土の匂いを嗅ぐ。

母なる大地と言うけれど、この地面から母の匂いはしなかった。

彼はうつ伏せだった体を返して青空を仰ぎ、口元に力のない笑みを浮かべた。その笑みは、絶対にありえないことを健気に信じていたかつての自分を笑ったものであった。

——俺は、現実から目を背けたかっただけだった。

土壌の匂いを鼻腔に満たしながら、どうして自分は、四年前と同じように飛び降りたのだろうと考えてみた。

四年前は一種の願掛けでもあった。ライオンの子のように崖から落ち、それで死んでしまうような弱い子のもとには母は決して戻ってこない。逆に、あの高さから落ちて生きていたるほど強い子なら、いつか強くなった俺を見に母が戻ってくると信じることができた。今ではそれが愚かな行為であったと分かっているけれど……

——じゃあ、さっきはどうしてなのだろう？

俺は何を試そうとして、上から飛び降りたのだろうか？

自分の心中を図りかねていた陽平の脳裏に、あの幼い日の出来事、坂を転がっていくビー玉の記憶が思い起こされた。

どうしてなのかと彼は、その理由を探ってみたけれど、風に流されていく雲のように指の隙間を抜けてしまいそれには届かなかった。

陽平は上体を起こして背中に付着した土埃を払った。嫌なこともこうやって簡単に落とせばいいのに、そう思いながら膝を立てて立ち上がり、秘密基地の入り口で玲と涼弥を待った。先に入っているかと思ったけれど、そのような抜け駆け行為に涼弥は何かどうるさいので、陽平は腕組みをしてはやる気持ちを抑えた。

五分ほどして、大きなビニールシートを丸めて脇に抱えた涼弥が息を荒げながら坂を上がって来た。どうやら彼も走ってここまで来たらしい。

「あれ？　今日は早いな。いつもは俺が一番なのに」

少し悔しそうに涼弥が言った。陽平は「まあな」と答えてはぐらかす。

——あんなところから飛び降りて来たなんて、信じてくれねえだろ。

それもあったが、何よりもあの行為は陽平にとって秘匿したい、神聖な儀式のように思えて口をつぐませた。

幸いにも、涼弥はそれ以上その話を広げるようなことはしなかった。筒状のビニールシートを地面に突き立て、深呼吸を繰り返していた。

間もなく、体操着姿の玲が腐葉土の坂を上がってくる姿が見えた。

玲が揃うのを待ち「よし、行くか」と血気盛んに涼弥が洞窟へと入っていった。

懐中電灯で暗闇を丸く照らして歩く。

この秘密基地の改装を初めて一週間は経っただろうか、暗闇にはもう慣れたもので三人はすいすいと奥へと進んで行く。

つきあたりにぶつかる。ここを左側に折れれば、拠点の地下水溜りに行きつく。右側は通路が細かに分かれていて迷路のように錯綜している。陽平たちは左に曲がって地下水の溜まり場へと向かった。

「おるあっ！」

涼弥が巻き舌の利いた掛け声をして、抱えていたビニールシートを下に広げた。その中心に大型ライトを置き、汚さないように靴を脱いでから三人はシートに上がった。

「来たはいいけど、やることはないんだよな」

涼弥は手塩にかけた作品を眺めるように、ぐらりと周りを見渡す。革が破れ中身のクッション材がはみ出したぼろぼろのソファは、陽平に倣って先日ゴミ捨て場から五人がかりで運んできたものだ。ソファの横には陽平の本棚が置かれ、その上に玲のウサギ時計がちんまりと乗っている。実の砂絵は壁に飾った。「形が綺麗だから」と言っ、浩次が汗を流し流し緑地から運んできた大石は、オブジェクトとして隅に置いてある。海賊の人形は、実が怖がっていた祠を隠すようにして設置した。

その内装はどのような鼻屑目で見ても、不良の溜まるあばら屋とあったところであった。それでも、彼らにとってここは自分たちが創りだした世界であり、楽園よりも居心地の良い空間であることには間違いない。

「ほんと、今日やりたかったんだけどな」

涼弥が言っているのは、秘密基地完成パーティーのことだろう。

「仕方ねえよ。実も浩次も用事があるんだし」

「そうだな。楽しみはできるだけ残した方が良い——ということ
でっ！」

涼弥はメガネをキザったらしく中指で上げる。

「明日の催し物を決めたいと思う！」

「催しって……そんな盛大なものをキミはやるつもりなのかい？」

ふっと涼弥は髪を吹いた。

「パーティーは盛大にやるのが鉄則だろうが！」

玲は「また始まった」と呆れながら、涼弥の真似をして前髪を吹き上げた。

「なにか良い案あるか？」

涼弥は陽平に向けてそう言った。

「んー、面白そうなのが一つあるけど」

陽平が含みを持たせてそう答えると、涼弥の目が鋭く光った。

ライトの上で顔を突き合わせるようにして、陽平は二人に話した。それは、この洞窟でしかできないことであった。聴き入る涼弥の口端が、悪の化身のように吊り上がっていく。どうやら彼のお眼鏡に

適ったようだ。

その後、その作戦に若干涼弥の手が加わったが、その根幹を担っているのは自分の発案である。陽平は顔にほのかな喜色を浮かべ、一言も意見を言わなかった玲の反応が気になってこっそりとうかがった。

玲の顔には涼しげな笑みが表われていた。

とくん。

それを見て、今日、緑地に飛び降りたとき、どうしてビー玉の転がる场景を思い起こしたのか、その理由の一端に一瞬だけ触れることができたかのように思えた。



ホームルームが終了すると、五人は浮き足立った様子で涼弥の席に集合した。今日の完成パーティーに必要なものを話し合い、それぞれが持参するものを確認して下校する。

浩次は当然の如くお菓子担当に任命された。若干の不服を抱きながらも、家から持って来られるだけものをコンビニの袋に入れて秘密基地に赴いた。

「やっぱ、お菓子と言えば浩次だな」

水場に着いたとき、陽平がそうはやし立ててきた。浩次は舌を出して対抗し、皆が溜まっているとこへ歩もうとしたそのとき――何かに足を取られ、抱えていた袋を放りだしてしまう。

慌てて涼弥がそれをキャッチし事なきを得るも、涼弥は浩次の不注意さに不機嫌になりつつあった。お菓子で膨れた袋を抱えながら、

彼は不愛想に足の下を指して言った。

「汚すんじゃないぞ」

足元を見ると、ブルーシートが広げられていた。昨日、自分がないときに持って来たもののなのだろう。「こんなの言ってくれないと分からないじゃないか!」と反論しようとして、涼弥のむすっとした顔を見て口を止める。ここでケンカでもしてしまえば、さすがに雰囲気が悪くなってしまおうと浩次は珍しくも察した。

踏んでしまったところに細かい砂粒が落ちていたが、浩次は見なかったふりをして皆に倣って靴を脱ぎシートに上がった。

ライトを囲み、ポテトチップスやチョコレートといったお菓子を広げる。

「おっし、始めますかっ!」

先ほどのことなどもう忘れてしまったかのように、涼弥が今にもはしゃぎだしそうに言い、基地の完成を祝うパーティーが開始された。

お菓子を食べながら昨晚やっていたテレビの話、最近読んだ漫画でどのシーンがどうかとか、家の愚痴、学校の愚痴、昨今の世界情勢をふざけて話してみたりもした。

それから二十分ばかり経って宴もたけなわとなったとき、ライトに照らし出された涼弥の顔がぐにやり、と悪魔のように歪んだのを見て、今朝から彼がしていた意味ありげな笑みの正体を浩次は思い知った。

「百物語をやりたいと思う!」

涼弥が言い放った言葉を聞いて、ポテトチップスを摘まんだ浩次の手が止まる。

「——と言っても、さすがに百話は時間がかかりすぎるから、一人一話の『伍』物語だけだな！」

涼弥は上手いことを言ってやったと言いたげな顔をしているが、浩次はまったくといってその思い付きに心惹かれることはなかった。

「そ、そそそんなの止めようよ！」

案の定、実は涙ながらに訴えかけたが、一度決めたことを涼弥が取りやめるはずはない。そう思いつつも浩次は微弱な抵抗を試みる。

「お、俺は別に、そんなもの怖くないから構わないけどさ、急に言われても——なあ？」

声を上擦らせ、陽平と玲をうかがう。二人の態度は平然としたもので、察するに昨日の内に三人で打ち合わせをして決めたのだろう。そうなってしまえば数の暴力によって、もう後には引けないのだろうと浩次は泣く泣く覚悟を決めたのであった。

「お前らもそれなりの人生を歩んで来たんだろ？ 怖い話の一つや二つほいほい出てくるだろ」

「怖い話がほいほい出てくる人生ってどんなのだよ」

悪態を呟き、その口に目一杯掴んだポテトチップスを放り込む。用意も周到なようで、陽平が五本のロウソクを取り出してライトの前に放り投げた。

一つずつ明かりを落としていくのなら、それぞれが持っている懐

中電灯でもいいように思えたが、こういう本式に忠実なところは涼弥らしかった。

「ま、今更どうこう言っても仕方ねえって。覚悟を決めろよ、実」

その陽平の手には既にロウソクが握られている。

放られたロウソクを涼弥が飄々と拾い上げる。玲も無表情で手に取り、浩次も遅れをとらないよう奪うようにしてロウソクを掴んだ。火の点いていないロウソクはいやに冷たいのだな、と浩次は妙な感想を持った。

「順番はどうするんだよ？」と浩次が尋ねる。涼弥は、そんなものとの昔に決めてる、と言わんばかりの顔をして答える。

「まずは言い出しっぺの俺から行こうと思う。その次は、俺から見て時計回りでかまわないよな？」

浩次は自分の順番を確認する。涼弥の後に浩次。続いて玲、実、陽平の順番であった。特に異論もなかったので浩次は頷いた。

「ほれっ、実ももう諦めろって」

涼弥が愚図る実の手にロウソクを握らせる。実はおっかなびつきロウソクを握り、浩次と同じ様にロウソクの触感に驚いたのか瞳を不自然に泳がせた。

何か怯えているような、それでいて言い出せないような逡巡の視線は、問題を当てられたときの実の態度であるのだが、浩次はとくに意にも介さず、涼弥から回ってきたライターでロウソクに火を点けた。

全員のロウソクに火が灯ると、中心に置かれていた大型ライトの

灯りを涼弥がもったいぶった手付きで落とした。

先ほどまでの馬鹿騒ぎが嘘であったかのように、洞窟の内部に暗雲が垂れ込める。

掲げた五本のロウソクが、五つの顔をほの白く照らし上げた。

浩次は息を吸うことも忘れ、芝居がかった涼弥の声を静かに聞いた。

「それでは、私から始めさせていただきます——」

イの物語 『ある雪国の話』

ある雪国での話。

一人の若者が息も絶え絶えに白銀の世界を進んでいた。

眼前を斜めに通過する大粒の雪が視界を霞ませ、彼は何度も意識を落としかけた。

感覚を失い棒きれとなった彼の足に、何か固いものが引っ掛かり雪の上にうつ伏せに倒れ込む。

若者はこのまま死んでしまおうとも思った。が、吹雪を縫って聞こえてきた人のうめき声のようなものを聞いて、緩慢に顔を持ち上げた。

それはまさしく僥倖と言えた。

若者の倒れていた先に、小さな小屋があつたのだ。

その窓には暖かな明かりが揺れていた。若者はまだ天が見放さなかったことに深く感謝し、這いながら小屋の中へと転がり込んだ。

唐突に小屋に入ってきた彼を見て、屋内にいた三人の男たちは眼球が飛び出るのではないかというほどに驚いた。

若者は、吹雪が止むまでの間でいいので小屋に居させて欲しい旨を一心に伝え、何とか三人から了承を得ることができた。三人の男は彼に肉の入った温かい汁物を与え、労を労った。若者はやけに固い肉を頬張りながら、男たちの話を聞いた。

何でも、男たちもこの吹雪の所為で足止めを食らってしまい、食料も今若者が口になっている汁物が最後であつたらしい。

若者は最後の食料を与えてくれた男たちに心から感謝し、その言葉を含み隠さず素直に述べた。男たちは曖昧な笑みで若者の謝辞を受けた。

吹雪は止む気配を見せることなく吹き続けた。若者は疲弊しきり、時折、戸の向こう側から獣のうめき声のような幻聴を聞くようになった。その唸りが聞こえる度に、どうしてか三人の男たちは血相を

変えて取り乱していたようであった。

ついには、火種も途絶えてしまった。

若者の全身から感覚が消え始めたとき、男の内の一人がある提案をした。

——このままでは、全員が命を落としてしまう。動かずにいれば神経が鈍り何時意識が途切れてしまうかも知からない。ちょうど、ここには四人いる。吹雪が止むまでの間、小屋の四つ角にそれぞれが座し、肩を叩かれたら今度は自分が叩きに行く、という風に順繰りに回って互いを鼓舞するというのは如何だろうか？

若者はなるほどと思った。その方法ならたとえ寝込んでしまっても、他の者に起こしてもらえするため凍え死ぬことは免れる、と。

若者と男たちは小屋の角で横になり、その方法を繰り返して互いを励ましあった。

若者は幾度も意識を落としては、肩を叩かれ救われたか分からない。ただひたすらに、肩を叩かれたら身を起こして先方で寝ている人物の肩を叩きに行く、と心奥に刻み込み朦朧とした足取りでその行為を繰り返した。

ふと、この行為に対する疑問が彼に訪れた。

——四人で四つ角を回る？

麻痺した神経がそれ以上の詮索を許さなかった。

やがて若者は肩を叩かれても気付くことなく、深い眠りに落ちて行った。

窓から射し込む陽光で若者は目覚めた。

そして自分が寝ていたことに驚き、次に吹雪が止んでいることに歓喜して、喜びのあまり疲れも忘れて外へと飛び出した。

吹雪は止み、暖かい日差しが白雪に反射して若者の目をすばませた。

生きていることが本当にありがたいと、彼は大きいなるものに感謝を捧げた。

不意に、目線の先に何かが映り彼はそれを凝望した。

白い雪の中に埋まる赤黒い何か……

若者はそれに近寄り、視認し――戦慄した。

それは、人の腕部であった。

雪と同等に白く骨ばった腕に反して、かつて胴体部と接合していた断面は赤黒く凝固した血液がこびり付いていた。

若者は、小屋を訪れた際の男たちの態度や、馳走された汁物に入っていたあの嫌に固い肉からある連想をし、途端に胸まで込み上げてきた吐瀉物を吐き出した。

そう、あの三人の男たちは元々四人であったのだ。

男たちの間にどのような禍根があったのか知る由もないが、吹雪に見舞われ食料が尽きた男たちは、誰か一人を犠牲にすることを選んだのだ。力の弱い痩身の者が選ばれたのであったのだろう。肉付きの悪かった腕は、ここに棄てられたのだ。

雪に撒かれたヘドロのような嘔吐物を呆然と眺め、あの肉はとうの昔に自身の体内に吸収されていることを知り、若者は再び嘔吐した。

胃酸で焼かれた喉から饅えた臭いのする吐息が抜けた。それで急激に現実に関連戻され、頭中で感じていた疑問が音を立ててはまっていた。

——四人で四つ角を回することは、果たしてできるのであろうか？

若者は頭の中で、出口のない箱の中を順番に回っていく四匹の鼠を空想する。

けれどそれは上手くいかない。

四角い箱を延々と回るには、どうしてもあと一匹必要になるのだった。

その行為の構造を理解した若者の背筋を、ぞわりぞわり、と悪寒が這い上がった。

彼は痙攣するように呼気と吸気を繰り返し、ゆっくりと背後の小屋を振り返る。

仄暗い屋内の三つの角には、三人の男たちが眠るようにして横になっていた。まだ息があるのか、横臥した彼らの肩は小さく上下している。

そして、残りの角。先刻まで自身がいた角に視線を合わせ——

若者は無我夢中で駆けだした。

見る見るうちに小屋は小さくなっていく。

何もかも忘れ、口から涎を垂れ流し、若者は雪上をもがくように走り抜けた。

最後の角。

角。

角にいた——

頭。

あつ、と若者は『何か』に足を取られて雪の上にうつ伏せに倒れる。

若者はその場で倒れたまま動かなかった。

——今、私は何につまずいて転げたのだろうか？

それを確認するのが恐ろしく、若者は何時までも雪の上に倒れ込んでいた。

ふっ、と涼弥がロウソクを吹き消す。

灯心から尾を引いた煙が伸び、暗闇へと雲散していく。親族の悲報に接したかのように低迷した雰囲気が漂い、拝聴していた四人はそれに飲まれていた。

場の空気を作り出すことをさせれば、涼弥を超えるものはそういないのだろう。

満足げな涼弥は髪を吹き、目で浩次へ続くように合図を送った。

浩次は音を立てて唾を飲みこんだ。恐怖しているというよりは、涼弥の後に続く話がはたして自分にできるのか、という懸念の方が彼の心中を占めているようであった。

浩次はもう一度、唾を飲み下す。

瞳を閉じ、大きく息を吸う。腹の中に湧く闇を吐き出すように口を開いた。

エの物語 『子どもになれない大人』

子供のいない小さな村に、可愛らしい男の子が生まれました。

村には少年以外の子供がいなかったため、少年は村中の人々の愛情を受け可愛がられていました。

村の中を歩けば、老人たちが神様でも拝むように手を合わせ、甘いお菓子や飲み物を与えました。家に帰れば少年の両親が食べきれないほどの料理を振る舞い、優しい言葉だけを口にしました。少年がどれほど醜悪な悪戯をしても、怒られるどころか褒められる始末でした。

そのため少年は、自分こそが世界の中心であることを信じて疑いませんでした。

少年が二十歳の誕生日を迎えたある日、両親が神妙な面持ちで言いました。

——あなたは今日から子供ではなくなりました。なので、この村から出て行ってください。

両親はつい昨日までしていた甘い表情を豹変させ、まるで塵でも見るかのように冷たい目で少年に言いました。戸惑う少年に、村人たちも罵るような言葉をぶつけました。少年は涙を流す暇もなく村を後にし、逃げるように近隣の街へと向かいました。

街にたどり着いた少年は、まず空腹を満たすためにその街で一番大きなレストランへ入りました。

スーツに身を包んだウェイターが、「ここは正装でしか利用できない」と厳しい口調で少年に伝え、汚いものでも見るかのように追い出しました。少年はすぐ隣のお店に入りました。そこでもまったく同じことを店員に言われ、少年は追い出されました。

少年への対応はどの店も決まって鼻を摘み、まるで家畜に接しているかのようでした。

少年は暗い路地で丸くなり、どうしてこのようなことになってしまったのか、と真剣に考えました。

昨日まで神様であつた自分。

それが一変し、畜生のように扱われている今日の自分。

昨日と今日の自分にどのような違いがあるのか？

冷たい夜風に晒され、少年はその違いを思いつきました。

——僕は子供じゃなくなったから、このような扱いを受けているんだ。

なら、子供に戻ればいいじゃないか。

『子供は何をするものでしょう？』

どこからか聞こえてきた声に少年は丁寧な口調で答えます。

——子供は悪戯をするものです。

少年はポケットからマッチを取り出します。

小さな明かりをマッチに灯し、無邪気な子供のように、にっこりと微笑みました。

——これで子供に戻る。

少年は生まれた村まで帰りました。

そして、誕生日ケーキのロウソクに火を点けるような手軽さで、村に火を放ちました。

村は燃え、少年は子供に戻りました。

浩次が火に息を吹きかける。

火は辛抱強く耐えたが、やがて勢いに負けて煙に変わった。明かりが一つ減ったことで、場が一段と深潭に近づく。

話し終えた浩次の表情を玲はうかがった。が、浩次の顔には影が落ちていて、のぞき見ることはできなかった。

涼弥が作った異様な雰囲気、若干だが浩次が変えたように思えた。

まるで、修学旅行の夜に怖い話をしていたら、いつの間にか愚痴を吐露し合っていたかのように、その変化は自然で流動的であった。玲は迷った。この流れに乗るべきか、進路を再び怪談話へと訂正しようか。

迷いに迷って――結局、口に任せることにした。

ウの物語 『白猫と黒猫』

水煙のけぶる街。

その街の片隅にあるおんぼろ橋の橋脚に、一匹の白猫がいました。その毛は所々茶色くくすみ、一見するだけではとても白い猫に見えませんでした。

白猫は雨に濡れた毛を舐め、いつ上がるとも分らない灰色の空を見上げていました。

そこへ、一匹の雄猫が黒い毛をびしょびしょに濡らして駆け込んできました。黒猫の首には、綺麗に輝くガラス玉の装飾が施された首輪が着けられていました。

白と黒。二匹の猫が出会います。

黒い猫が言います。

「君はここで何をしているのですか？」

白い猫が答えます。

「私はここで雨宿りをしています。あなたはここへ何をしに来たのですか？」

黒い猫は返します。

「僕は逃げて来たのです」

白猫は首を傾げます。

「一体、何からですか？」

黒猫は雨粒が光る毛を舐め「飼い主からです」と答えました。

白猫は黒猫の全身に細かい傷があることに気付きました。

赤く血の滲む肌を黒猫は赤い舌でべろべろと舐めています。

白猫は灰色が垂れ込める空を仰ぎます。

そして、かつて自分にも飼い主がいたことを思い出します。

どのような顔であったか、それはもう灰色の雲のように判然としませんでしたが、温かいミルクを毎日与えてくれたことは鮮明に覚えていました。

「この街は、私たち猫にとって理不尽なことばかりですね」

白猫はそう言いました。

「そうですね」

黒猫もその意見に同意しました。

雨風が吹き込み、二匹の猫を濡らします。

「どうして私は捨てられてしまったのでしょうか」

白猫は自分がそう呟いていたことに驚き、慌てて黒猫の方を見ました。黒猫は相変わらず傷口を舐めており、心の内を聞かれていなかったことに白猫はほっとしました。

「強く――」

唐突に黒猫が口を開きました。ぎょっとしている白猫を余所目に黒猫は続けます。

「強くなりたいですか？」

どのような思惑があつて黒猫がそう尋ねたのか、白猫には皆目見当もつきませんでした。しかし、白猫は無意識の内に頭を縦に振っていました。

ころころと頭を振る白猫を見て黒猫は笑い、言いました。

「それなら僕と約束をしましょう」

白猫は小さく頷いてから「どのような？」と尋ねました。

「君と僕、この理不尽な街を受け入れ、強く生きると互いに誓い合ひましょう」

——互いに約束を交わせば、きっと僕たちは強く生きることができると思ひます。

黒猫が傷だらけの前足を上げます。白猫はその足に自分の足を重ねます。

二匹の猫は誓ひます。

『理不尽でどうしようもないこの街で、強く生きていくことを誓ひます』

雨が上がりました。

けれど、空は依然として灰色の雲を一面に湛えています。

黒猫は重ねていた足を離し、首輪からガラスの玉を外して白猫に差し出します。

「今日という日を忘れないために、君にこれをさし上げます」

白猫はそれを受け取り、よくよく観察をします。そこには、黒猫の名前らしきものが彫られているようでしたが、白猫にはそれを読むことができませんでした。

そうしている内に、黒猫は何も言わず橋の下から出ていってしまいました。

黒猫は決して後ろに振り返りませんでした。

黒猫がどこへ向かうのか、それは分かりません。

飼い主のもとへ戻るのかもしれませんが、どこか別の当てがあるのかもしれませんが。

曇天を衝くようにピンと立った黒い尻尾を、白猫は無言で見送ります。黒猫の背が草陰に消え尻尾も隠れてしまうと、白猫は灰色の空を見上げました。

そして、いつかきつと現れる青い空を、おんぼろ橋の下で待つことにしました。

玲が唇をすぼめ、ロウソクの火を消した。

また一つ明かりが落ち、涼弥の背後にある海賊の人形が不気味に浮かび上がった。

実は先ほどからそれを極力見ないように心掛けていたが、どうしても目はそちらへ向いてしまう。

初めてここを訪れた際に幻視した、蠢く闇。

その闇が消えて行った先に建てられていた、妖気漂う寂れた祠。

他の四人はこの祠のことをまったく気にかけていなかったのだ、実も次第にその存在に慣れていったのだが……百物語をしているという現在の状況が、彼の畏怖心を再び喚起させた。

実は海賊の人形から睨まれているような威圧感を受け、身を震えさせていた。

——祠の神様が、僕たちがここを荒らしていると思って怒っているのかも……

そのような猜疑がますます彼の矮軀を締め上げた。

おい、と左隣の陽平が実の肩を小突いたことで、その硬直が解ける。

「実の順番だけど、大丈夫か？」

陽平が心配そうに実をうかがう。

ロウソクに照らされたその顔は仮面のように白く、昔観た映画に登場した怪人を思わせた。

実は分からない程度に首を振り、滔々と語り始めた。

アの物語 『 』

みんなは、変な視線を感じたことある？

自分一人しかないはずなのに、どこからか誰かに見られているような、そんな視線を感じたことはある？

僕はね、みんなも知っている通り、誰かに注目されることがすごく苦手だから、人並み以上に視線に敏感なんだ。

だから、ね。

分かるんだ。

幽霊ってね。僕たちが一人でいるのを見付けると、どこからかやって来て、ただ茫然と僕たちのことを見てるんだ。生きている僕たちを呪おうとする訳でもなくて、悪戯をしようとする訳でもなくて、ただ見てるんだよ。

たぶん、彼らは気付いてほしいんだと思うんだ。

生きている人間はこんなにも多くいるのに、死んでいる自分を見してくれる人は一人もない。

——お願いだから僕を見て、僕はすぐ傍にいるんだよ。

君のすぐ隣で見えているんだよ。

だから、僕を見て——

自分のことを見てほしくて、彼らは僕たちが一人になるのを見付けては、僕たちのことをただ見てるんだ。

いつか、偶然にも目が合うことを信じて。

実の息に当たって火が消える。

五つあったロウソクも、今では陽平の一つが灯るばかりである。

実が物怖じして固まったときはどうなるかと思ったが、何だ意外にやるじゃないか、と涼弥は胸の中で予想以上に頑張った実に拍手を送ってやった。

そして、メガネの奥の瞳が、唯一の明かりを手にする陽平を捉えた。陽平は涼弥と視線を合わせ、小さく顎を引いてから囁くように喋り始めた。

「サルとヒトの違いが何かは、前に授業で渡辺が話してたよな」

「二足歩行、喋ること、火を起こすこと」

間を置かずに玲が言った。

授業中は読書に集中しているのかと思ったが、意外と聞いているらしい。さんざん渡辺をもてはやしておきながら、自分はほとんど覚えていないことを涼弥は多少恥ずかしく思い、唾を吹き飛ばしながら担任が語っていた話をおぼろげな記憶から掬い上げる。

——たしか猿は、短い間なら二本足で歩けるし、人の言葉ではないけど会話みたいなことはしてるんだっけか。けど、火だけは人にしか起こせないんだよな。

涼弥が授業の復習を密かにしているとは思ってもよらない陽平は、皆周知であるかのようにさくさくと話を進めていく。

「二足歩行のことは一先ず置いといて——ここで大事なのは言葉と火。それは人間と猿、つまり、ヒトとケモノを分かつ境界なんだ。

複雑な言葉が俺たち人間の知性の象徴とするならば、火は人の理性の象徴だといえると思うんだ。このことを念頭に置いて、今から俺がするある事件の話を聞いてほしい」

オの物語 『ヒトとケモノ』

遠雷が轟き頭上から砂粒が降りかかる。毛髪は砂塵で針金のように傷み、鼻腔に埃が溜まりむず痒いことこの上ない。

この洞穴に籠ってから、どれだけの時間が経ったのだろうか？

私には正確な時日を断定することができない。その理由は、私がまったく太陽の日差しを浴びていないからである。

人の一日の始まりは、東空に昇る太陽とともに始まる。朝明けに身を晒し、昨日の穢れを炙り出すことで清い一日が始まるのである。ここに籠ってその言葉の意味をようやく咀嚼することができた。

陽光を浴びていない体の節々に鬱屈とした澱のようなものがじくじくと停留し、凝固していくように思えて仕方がないのだ。

眼下でゆらゆらと灯る矮小なロウソクを呆然と眺めることで、少しでもその澱を炙り出そうと先ほどから試みているのだが、澱は一向に溶解しない。

この鼻息で消し飛んでしまいそうな明かりを中心とし、五人の男が車座になり腰を落としている。無論、私もその内の一人である。

仄かに浮かび上がる各々の面相は悪鬼の如く悍ましく、他者の瞳を通せば私の姿も悪辣と映っているのだろう。

どうしてこのような状況に陥ってしまったのか。私は、突然の大雨に見舞われたときのことを静かに想起させた。

私たち五人は、逃げ込むようにしてこの穴蔵に飛び込んだ。しばらくここで雨宿りをしようとロウソクを取り出し、それを五人で囲んだ。言葉を交わすこともなく、朦朧と灯る炎を静々と見つめながら雨が止むのを待った。腹が減ると懷から干し菓子を取り出し腹に収め、喉が乾くとすぐ近く溜まっている湧水を啜った。それ以外の動作は何一つ行わず、何時しか一本のロウソクの行く末を見守るこ

とが、私たちの義務のように思えてきたのだった。

時折、ごおおん、と爆撃のような落雷が洞窟内に反響しては、暗闇へと溶けて霧散した。

このロウソクは何時まで燃え続けるのだろうか？

私たちは何時まで斯様なことを続けなければならないのか？

もしかしたら雨はとうの昔に止んでおり、この轟音は何か別の音ではないのだろうか？

数々の不安を抱いたが、默然と炎を見つめる他の者の瞳に希求のようなものを垣間見てしまい、一旦外を見に行こう、と口火を切ることを躊躇わせた。せめてこの火が消えるまで待つて見よう。そのような誓いを立て、私も彼らと同じように炎を見つめ続けた。

見守り続けたロウソクも小指の爪ほどとなり、ついに――

消えた。

それは呆気のないものであった。まるで人生のようだと思い笑いそうになった。

視界は萎むようにして溶暗し、暗闇となる。

淡々と続く暗黒。

目の前に手の平をかざしてもなにも見えない。まるで自分が闇になってしまったかのような錯覚。他の人物の吐息が、自分は自分であると現実には繋ぎ止めていくれているのだが、微塵の変化もない闇を前に、その呼吸音は自分の妄想ではないのかという不安が腹の底から立ち上ってくる。少し横に手を伸ばせばそこに誰かがいると分かっている、もし手をやってその手が空を切ったら、という憂慮が頭の隅の方に渦を巻いて体を縛り上げる。誰かがこの静寂を一笑してくれる、この奇妙な緊張を振り払えるのだけでも、と誰しもがそう思っているのか、自分からは決して声を出さない。その

根底には、もし声を出して誰の返答もなかったらという恐怖があるのだろう。

結局、私も何もできずに闇へと身を浸す。

暗黒は毛穴から体内へと侵入し、腹の奥に沈殿した。

次第に動悸は収まり、心身ともに闇に適応を始める。それはぬるま湯に浸かっているかのように心地よく、凝り固まった身体を丁寧に解きほぐしてくれているようにも思えた。

この空間にいる限りは世間の煩悶から隔離され、不変の甘美に酔いしれることができる。そのような興奮に脳髓を麻痺させていると、今度は先ほどまで頼もしく感じていた誰かの氣息が鼻に付くようになる。この快楽を他者も味わっているのだと思うと、腹が立ってくる。この空間は私だけのものだと、独占欲が沸々と這い出してくる。一度でもそれを自覚してしまうと、他の存在が無性に気に障ってくる。

腹の奥の――さらに奥。

その人間の深潭部で、荒々しく禍々しい気配の生起を実感し、自分にもこのような感情があることに驚愕する。

その気配は闇を味わうように四足を屈伸させ立ち上がり、脳の片隅で萎縮していた理性を舐める。僅かに知性を得たそれは、本能に従い縄張りを侵す他の者たちの排除を遂行する。

理性の炎を失くした私は、闇の中で本能に従順な獣となった。

数週間後、近所の竹藪から気味の悪い雄叫びを聞いた、と近隣住民が地元の警察官に連絡を入れた。警察官はその竹藪に掻き分け、ひっそりと鎮座する洞窟を発見した。

奇妙な雄叫びはその奥から聞こえてきた。恐々と洞窟に踏み入った警察官は、最奥部でうずくまったみすばらしい男を見付ける。

男の周囲に転がる幾つもの白骨と肉片。口元から滴る赤い汁。警察官は瞬時に状況を判断し、無線で応援を呼んだ。押っ取り刀で現れた同僚と五人がかりで、錯乱状態の男を取り押さえ、連行した。

後の現場検証で、この男が四人を殺害したことが明らかになった。遺体の損傷は激しく、まるで『獣』に襲われたかのようなであった、と当時を知る警察官は語った。

陽平がゆっくりと息を吸うと、目の前の炎も一緒に吸われて揺らめいた。

その揺らぎを見た玲の胸を、ざわめきが掻き立てた。

——百物語をすべて語り終えたとき、本当に何か良くないことが起こると聞いたことがある……いや、違う。このざわめきの正体は、恐らく、今陽平が語ったばかりの物語があまりにも現在の状況に即しているからだ。

陽平が息を吐き出す寸前、玲は手をかざしてそれを止めた。息を吹きかけていた陽平は驚いて目を剥く。

「すまない陽平。その明かりを落とすのを止めて貰えないだろうか？」

「どうした、玲。怖気づいたのか？」

涼弥は珍しいものを見られたと口を歪ませて言った。

「まあ、そういうことにしておこう。だからすまないが、止めて貰えないだろうか？」

玲の哀願に皆、どのような反応をすればよいのか困惑して互いに顔を見合わせた。そんな中、陽平は眉をしかめ、苛立ちを顕わにしていた。

昨日、浩次と実を脅かす算段を相談し終えた後の、喜色満面となった陽平の顔が浮かんだ。自分の発案に相当の自信があるようであった。その裏付けに涼弥も絶賛をした。

玲も期待していたはずだった。それが見事に成功を収めたとき、実と浩次がどのような反応を示すか、考えただけでも胸が踊った。帰り際、そう陽平に伝えたとき、彼ははにかみながら喜んでいた。

——けれど、陽平がこのような話をするとは聞いていなかった。

玲は先ほど陽平が語った話を思い返す。

暗闇で五人の男たちが囲むロウソクが消えたとき、男の一人が暗闇に溺れ、理性を失くし『獣』となる。獣となった男は、本能に従い縄張りを侵す他の四人を殺害した。

——そのようなことが実際に起こるとは、到底考えることができない。でも、もしも、仮にも、万が一にでも、そのような事態が起こってしまったら……それだけは、絶対に嫌だ。

「昨日、ちゃんと打ち合わせしたじゃねえかよ」

陽平はこれが作戦の一部だということを、浩次たちに隠す気もないようであった。そのことに本人も気付いていないようで、苛立ちの度合いを言動の端々から計ることができた。

玲は腹の底で、赤黒くどろどろしたものが動くのを感じる。

「だから、さっきか済まないと謝っているじゃないか」

その所為なのか、玲の口調は刺々しいものになった。

陽平は目尻を上げ、こめかみを細かに動かした。下唇を突き出すようにして、今にも飛び出しそうな怒りをかろうじて耐えている。それはそうだ、と玲は心の静かな部分で陽平の怒りに共感をしていた。

——自分が楽しみにしていたものを横から奪われたら、誰だって怒りを覚えるだろう。

そう共鳴できていても、子どもの癩癩のように何故か陽平に謝り直そうという気持ちにはならず、玲は黙って陽平と反目し続けた。

どのくらいそれが続いたのだろう、ついに陽平の堪忍袋が切れた。興奮からだろうか陽平はせん妄者特有の、眼前のものを視点に収めず自身の意識野に説き伏せているかのような具合で、その瞳孔をばつくりと開かせて言った。

「へっ、お前はなんだかんだ口は達者だけど、女々しいよな」

それを聞いた瞬間、まるで空気を媒介として陽平の興奮が移行したかのように玲の頭は真っ白になった。

真っ白になり、血が上って真赤に染まっていく。嘔吐のように喉まで駆け上がってきた数々の罵倒を、辛うじて口先で食い止める。鋭く研ぎ澄ませた瞳で陽平を睨みつけ、

「黙れ」

と唇の堤防を越えたその一言だけを残して、一人で出口を目指した。



「お、おい。行っちゃったぞ、いいのかよ」

浩次があたふたとして言った。

陽平は渋面を作り「いいんだよ」と吐き捨てる。どうしてあのようなことを口にしてしまったのか、自分自身でも分からず滲み出る後悔に苛まれているようにも見えた。

浩次はどうすればいいのか困り果て、救いを求めて涼弥に視線を投げた。

涼弥はやれやれと肩を竦める。

「陽平、いいのか？」

陽平は無視して消えていたライトを点け、ロウソクを無造作に放り投げた。ロウソクは空中で火を落とし、回転しながら水の溜まり場に落ちて沈んでいく。

明るくなった場にほっとした浩次は、いつもなら一番慌てふためいているはずの実が大人しいことを不思議に思い、呼びかけた。

正面に座っていた実は、浩次と涼弥の間を見据えたまま動きを止めていた。幾秒か待ってからもう一度呼ぶと、「なに？」とどこか疲労がうかがえる表情で聞き返してきた。

「いや、何でもないけど。大丈夫か、ぼうつとしてるけど」

浩次は実の視線を追って振り返る。実は涼弥の背後の人形を見ていたようであった。

浩次は向き直って、落ち着きなく膝を揺すっていた陽平に言った。

「いいのか大谷。内田とはずっと仲良いんだろ？」

陽平は膝をぴたりと止める。浩次はそれを見て、ぎくりとした。

「そんなの、関係ないだろ」

押し殺した咆哮のような陽平の声が、洞窟の内部をぐわんと振動させた。

彼自身も自分の口から出てきた怒声に驚いたようで、明かりを見つめる顔が気まずそうに歪んだ。

声は余韻を残しながら暗闇へと溶けて拡散し、場は急激に静まり返る。

決まりが悪くなった陽平は、ポケットの中に手を突っ込む。指先に触れた紙切れのことを思い出し、折り畳まれたそれを取り出して涼弥に放った。

受け取った涼弥はそれを広げる。

「おっ。地図、できたのか」

それは、涼弥が懇願して作るようになった地下壕の内の地図であった。

浩次と実が涼弥の手元をのぞき見て、「おお」と嘆声をもらした。

「大谷くんすごいよ！ 僕ならこんなに詳しく描けないよ！」

「確かにこれは、手間がかかってるな。陽平ありがとうな！」

場を和ませようと気を使っているのか、二人は一段と明るく喋っていた。

「そう言えば、前から気になってたんだけど」

浩次は地図を見ながら前々からの疑問を口にした。

「大谷はこの洞窟の入り口、どうやって見つけたんだよ？　こんな緑地の奥にあるようなところ、そう簡単に見つけられないだろ」

陽平は苦虫を噛みつぶしたような顔を作った。

小波のように下まぶたを揺らし、接ぎ穂を探しながら口を開閉する。「それは……」と言葉を絞り出したが、それ以降は濁すように口をつぐんだ。

浩次の所為で再び険悪な空気が流れ始め、即座に涼弥が嘴を容れた。

「まー、あれだ！　言いたくないことは誰にでもある！」

勢いよく立ち上がって、大きく両手を打ち合わせた。

「よし。俺たちも、もう帰ろう！　お前たち、片付けをするぞ！」

「そ、そうだね！」

実が散らばった菓子包装を集める。

浩次は釈然としなかったが、陽平の沈んだ表情を見て、さすがにこのときばかりは雰囲気を感じて辺りに散々しているポテトチップスの袋をまとめる。

「陽平、この地図ありがとな！　俺が大切に保管しておくぞ！」

「涼弥くん、一枚しかないんだから失くさないでよ！」

「分かってるよ！」

そう言って涼弥は海賊の人形が抱く宝箱を開き、

「へへっ、宝を隠すなら宝箱ってね」

そこへ地図をしまい込んだ。

実と涼弥が陽気にふるまう。その度に陽平の沈痛さがより際立っているように感じた。だから、配分を合わせるために浩次は少しだけ暗くふるまうことにした。

それがたぶん、今できる陽平への気遣いだと思ったから。

オの物語 『ヒトとケモノ』 (後書き)

ちよつと疲れたので続きはまたあとで更新しておきます。

そして、蠢く闇（1）

玲が学校で陽平と顔を合わせたとき、腹の底から怒りが込み上げてきたのと同時に、胸の奥では謝りたいという気持ちもせり出してきた。

二つの感情はない交ぜになり有耶無耶な態度を示す結果になってしまった。

陽平の態度も玲と同様のものであった。

いつも通りなのだけれど、どこかこちない。

まるで初デートの心境だ、と玲は苦笑したが、自分はまだそのような経験を積んでいないので本当にそうなのかどうかは分からなかった。

授業中、黒板の前に出て問題を解き終えた涼弥が、無然と教卓の前に立って、見せつけるようにして鼻をほじり始めた。

その意味を知らない生徒たちは大笑いし、教室はどっと笑いに包まれる。担任は、珍しく従ったと思ったらこの有様だよ、というような心労な表情をして、涼弥へ席に戻るように言った。

涼弥は一人ずつ確認を取りながら席に戻って来る。玲は涼弥と目を合せないよう膝の上に置いた文庫を見つめる。そうすることで今日は行かないと態度で表した。

それを見た涼弥の顔には、いつもの扇情的な笑みの中に少しだけ優しさを包容した微笑みをして席に着いた。

変な意地を張らず素直に頭を下げ謝ってしまえばいい。玲は何度もそのように思ったが、無駄に高い矜持がそれを邪魔した。

そうこう煩悶している間に放課後が来て、涼弥の席に集い陽平たちは教室から出て行った。玲は教室に残って文庫を読むが、いくらページを捲っても文字は文字のままで、意味は意味をなさず、物語

は物語ることなく頭から抜けていってしまう。その空隙に入ろうと、まだ残っている生徒たちの囁きが耳に付く。それが腹立たしくて教室を出ることにした。

教卓の横を通りすぎるときに、教壇に名簿が落ちているのを見つけて足を止めた。

平静なら無視していたはずだけど、今は何かをして気を紛らわせていたい。玲は名簿を拾って職員室へ届けることにした。

階段を下りる足取りは鈍重だった。

地球の重力が増加したのだ、と突拍子もない言い訳を試みるも、途端にやる瀬無さが押し寄せる。

——やっぱり、謝りに行こう。

そう決意すると、たちまち体が軽くなった。たったそれだけで重力から逃れられるなんて、人は気難しいことばかり考えているけれど本当は単純なのだ実感する。

——自身の薄っぺらさを隠すために、難しいことを考えて理屈を築き、その重みで大地にすがっているんだ。

なにもものにも捕らわれない人は、きっと空を飛ぶことができるのだらう。

玲は空に思いを馳せ、軽やかに階段からジャンプした。



秘密基地には、普段と異なる重々しい空気が充満していた。

昨日の伍物語の終盤に起きた陽平と玲のケンカ。二人が今も和解できていないという状態が、それぞれの心底でわだかまっているようであった。

——どうにか仲直りさせられないかな。

皓皓と発光するライトを前にした実は、どうかして二人の仲裁役になれないか、とあれこれ考えてみては自分には荷が重すぎると気を落としていた。

そのような雰囲気を払拭しようとしたのか、涼弥が口から白い歯をのぞかせて提案した。

「昨日の続き、しないか？」

卑しさを含んだお得意の笑みを見て、実と浩次の顔が凍つき、ソファーに座っていた陽平からはため息がもれた。

「な、なんで、わざわざそんなことをするんだよ？」

声を上擦らせた浩次に、さも当たり前のことを述べるかのように涼弥は「面白そうだからだよ」と口にして言い添える。

「今のご時世、何処も彼処も灯りばかりだろ？ 繁華街に行けばギラギラに光る看板とかネオンの電飾があるし、深夜になっても住宅街のいたるところに街灯が灯っている。たとえ、世界中が大停電に見舞われて明かりが消えても、空には月とか星がある。だから本当の暗闇ってのは、滅多に体験できないものなんだよ」

ライトを前にして涼弥は鷹揚に両手を広げる。下から照らす乳白

色の光が舞台のフットライトのようで、その姿は貫録のある役者のようだと実にはわかに思った。

「俺たちにはこの場所があって、本当の暗闇ってやつを体験する環境が整ってるんだぜ？ やらない手はないだろうが」

涼弥なりに陽平を氣遣っての提案なのだと実は思った。

実の心中では、この涼弥の発想が魅力的だと思う気持ちと、真っ暗闇に接したときの恐怖心が互いに譲らずせめぎ合い拮抗をしていた。その決着はついにつかず、自分では決めあぐねて他の二人の反応を待つことにした。

浩次は引き攣った笑みを浮かべている。この様子では、彼も流れに身を任せるといった感じだろう。陽平は憮然と腕を組み涼弥に視線をくれていた。そもそもこの話題に興味がなさそうにも、涼弥の突飛な申し出に呆れているようにも見えた。

ややあって陽平が、「いいぜ、やろう」と口にしたことで実の決意も固まった。

「僕も、いいよ」

「浩次は？」と涼弥は黙っている浩次に振る。

浩次は実と陽平の顔をきよろきよろと見比べて、もう覆らないと知ったのか、がっくりと項を垂れた。

「――よし。いいか、消すぞ」

涼弥がライトの前にしゃがみ込み、一人一人に確認をとる。

ソファアーに横になった陽平は「さっさとしようぜ」と気怠そうに応じ、涼弥の傍にいる実は、闇に備えるかのように何度も瞬きをし

た。そんな実を見て浩次は「お前は本当に弱虫だな。だらしない」と強がりながらも、震える肩を必死に押しとどめているのか、彼の肘は不自然に動いていた。

涼弥は煌々と輝くキャンプ用の大型ライトを抱え上げ、再び三人へと目線を流した。

大きく頷く陽平。目を瞑っている実。頬を引きつらせている浩次。それぞれの面相の輪郭が際立って緊張の一端が垣間見えた。

涼弥は生唾を飲んでから、ライトの電源を落とした。

「—————。」

目隠しをされたかのように視界が消え、突き放されたかのように音が消えた。

すぐにそれぞれの呼吸音が、まるで耳元で喘いでいるかのようにはつきりと届くようになった。普段なら気色の悪いことこの上ないけれど、一切の光のない暗黒の世界では、それが心強くなって聞こえてくる。

実の目は、何も見えていない闇の中でけたたましく稼動した。

自分を見つめる視線が完全に遮断された空間。今まではどこかしらに明かりがあり、完全な闇ではなかったが、今それを体感した実の体中を恍惚に近い感覚が満ちた。実は、ここが本来自分の要るべき場所なのだ、と密かに思う。

自分と闇との境界がどこなのか、水に垂らした血液のように判断できなくなった。

血は水の中で煙のようにゆらゆらと踊り、多すぎる水量に圧倒されて霧消する。そのようなイメージを抱きながら、膨大なものと一

体になる感覚に脳が陶醉をしていた。

実は自分の口角に手をやってみた。三日月のように鋭く長く吊り上っていて、自分は声をもらさないように静かに笑っているのだと知った。

獣のように耳まで裂けた自分の口をたどるようにしてなぞる。これが本来の自分なのだと思うと、満腔に自信が満ち満ちてくる。今の自分ならどんなことでもできる。くつくつと肩を震わせながら、実は笑いを噛み殺す。

『ガ——』

涎を滴らせた獣の声で、実ははっと我に返った。

口に触ってみても、ささくれ立った唇が戦慄しているだけで、そこにいるのはいつもの臆病な自分。闇とともに湧き上がってきたあの自尊のような感情は、一体全体なんであつたのだろうか？

不思議がる実のすぐ近くから、ザツ、と砂利を踏む音が鳴り全身が栗立ち、心臓が胸から飛び出そうとして暴れ出す。

——どうして、みんな、なにも喋らないのだろうか？

獣になる空想を抱いていて気が付かなかったのだろうか、先ほどから誰も言葉を発していないことに違和感を覚える。

打ち鳴らした太鼓のように乱れた心臓の音が血管を伝って耳に届く。それに少し遅れて地面を踏む音が、秒針のように正確な間隔で暗く閑寂な地下壕に響いている。

——誰かが歩いてるのかな？ 誰だろう？

砂利の音が止まり、時間も止まる。

自分の呼吸も血液の流動さえも、何も聞こえない。

「えっ？」

続いていた空白を埋めたのは小さな声だった。

それは、唐突に起きた出来事に当惑しているかのような声音であった。激しい擦過音に混じって、犬がケンカしているかのような小さなうめき声が暗闇のどこから聞こえてくる。

「おい、ふざけるな！ 止めろって！」

絶叫に近い金切り声が突然闇を切り裂き、実はとっさに両耳をふさいだ。

耳の穴にフタをしても、叫びはしつこく鼓膜へと粘りつて離れない。じつとりと頭の中を往復し、耳鳴りとなって実に語りかけてくる。そして、この声は誰かと誰かが掴み合いになって出たものなのではないかという想像に至った。

けれど、何も見えない暗闇の中で起きている出来事は、想像でしか補うことができない。想像で補完したとしても、何ものか同士が争っているこの気配は、どこか遠い国で起きている戦争のように他人事となって届いてくる。前後不覚の現状がそれをより顕著に思わせ、実の高ぶっていた感情を丸く押し固めていった。

「お、おいっ！」

怒気を孕んだ語調の中に、絶望的な未来の景色でも見てしまった

かのような恐怖が含まれていた。それでも、テレビの先に映る戦争や災害を観るかのように、実はその声をぼんやりと傍聴した。本当に起きているのかも分からないことに、慌てふためいても仕方がないと思ったのかもしれない。

激しく争う気配は、金曜の夜にやっているロードショーとなって届いてくる。

仲の良かったはずの少年たちが、ちょっとした気の違いでケンカに発展してしまう。日々感じていた細かな苛立ちがこれを機に爆発してしまい、掴み合いの乱闘になる。

硬く握った拳で相手の頬を殴る。負けまいと相手も拳を振るう。まるで鏡の先の自分と殴り合いをしているかのように籠めた力と同じ分量の力が返ってくる。

争いはいよいよ激化する。

殴られた勢いで地面に倒れた少年の目の端に、ごつごつとした大きな石が映る。怒りで我を失った少年は、その石を掲げ――

ひと一人を水に落としかのような、重たくまとわりつく水音が暗闇の洞窟に響いた。音は茫洋と暗闇に反響し、吸い込まれていく。ばしゃばしゃ、と鯉が跳ねているかのような水の音に交じって、小さく掠れた声がする。それに被さる丸太で殴りつけたかのような打撃音。やがてすべての音が止み、暗闇に明かりが一つ灯った。

実は、その明かりの前に屈み込んだ陰が誰なのか目を細めて探る。暢気に明順応をした瞳に映ったのは、涼弥の青白い横顔だった。

そして、**蠢く闇（1）**（後書き）

昨日の一遍にアップしすぎたような気がしたので、これからは少しずつ上げていく予定です。

そして、蠢く闇（２）

職員室の扉を開けると、顔が一斉にこちらへ向いた。玲は見せつけるように名簿を顔の横に掲げる。

「渡辺先生はいますか」

一番近くにいた教師が渡辺の席を教えた。礼を述べ、玲は担任の席を指摘した。

机の間を横断していく玲の姿を見つめる教師たちの視線には、二種類あった。

「届けに来るなんて、偉い生徒だな」と「ああ、あの子か」という二つの眼差し。その違いは言うまでもなく、前者は玲が『ア行の問題児』の一員であることを知らず、後者は知っているというだけのことである。比率で言えば、前者の方が圧倒的に多かった。それは、五人の中でも玲の顔はあまり割れていないからなのであろう。

玲が一番窓側にある担任の席に着くと、そこはもぬけの殻であった。

どうしたものかと名簿をもてあそんでいた玲に、大仏のような老教師が気付いて言った。

「ああ、渡辺先生か？ 何だか最近体調が悪いみたいで、今日も早めに帰ったみたいだぞ」

「そうですか」と玲は名簿を大仏に見せる。

「これ、教室に落ちていたので届けに来ました」

「そうか！ 偉いじゃないか！」

人の善行を喜んでいるかのように、大仏は愉快そうに笑って玲の肩を叩いた。

それが彼なりのコミュニケーションの取り方なのだろうが、叩かれる都度、玲に嫌悪感が重く沈んでいった。肩に釘を打たれているかのようにその部分がじんじんと痛みだし、化膿した傷口に触れる気持ち悪さで全身が脈を打つ。胃が収縮し、上ってくる吐き気を堪え切れず――

「気持ち悪いので触らないでください」

気付いたら玲はそう口走っていた。

呵呵としていた大仏の太い眉がじわじわと上がり、快活な仏の表情から明王の形相となった。

「何だ、その態度は」

大仏教師の威圧的な声に嫌気がさした玲は、「すみません」と抑揚なく謝った。その対処がますます教師の神経を逆なでしてしまった。

「ちょっと座れ。お前、渡辺先生のクラスだよな。名前は何ていうんだ」

名前なんて聞いてどうするのだ、と言い返したかったが、早くことを終わらせたかったので素直に従うことにした。

「内田です」

それを聞いた教師の口元が嗤ったのを玲は見逃さなかった。見逃せなかった。

「ああ、『あの』ね——」

「あのって、なんだよ」

玲は我慢できなかった。

不穏な事態に教師たちの注目が遠巻きに集まる。それすら意に介さず、腹の中に溜まった積年の思いを吐き出すようにして玲は捲くし立てた。

「お前たち大人はいつもそうだ。ちょっとした規則に従わないやつを見付けると、すぐに矯正しようとする。自分の意思に迎合しない子どもを愚かだと、勝手に決めつけてレッテルを張る」

自分がどうしてここまでいきり立っているのか、分からなかった。

——なんだか最近短気になったな。昔はもっとあらゆる物事を諦観していたような気がするのに。

絶句する大仏に止めどなく流れ出る鬱憤を吐きながら、内心では自分の心境の変化を静かに手繰る。その頭の中では、誰に打ち明けている訳でもないのに自分自身の境遇を語り出していた。そうすることで、この湧き上がる怒りの正体を知れるはずだと玲は思った。

——ボクは小学校二年生のとき、親に捨てられた。

もともと裕福な家庭ではなかったけれど、父と母、三人での暮らしはボクにとって幸せ以上のなものでもなかった。それだけで、ボクは幸せだった。

窓から見える桃色の桜。川の字になって眠った夏の日の熱帯夜。金木犀の香る小さなベランダ。炬燵で過ごしたお正月。四季が流れ

ていくごとに幸せが増していくように思えた。

でも、そう思っていたのはボクだけだった。

何時になっても、父はおろか母も帰って来なかった。

ボクは待っていた。

埃っぽい玄関にある灰色のドアが開くのを、膝を抱えてずっと待っていた。

ドアを見つめながら、いつの間にかボクは眠っていた。

夢の中にも、そのドアはあった。そこでもボクは独りで父と母の帰りを待っていた。待っていた。ずっと待っていた。

目を覚ましたボクの目に、見覚えのない天井が飛び込んだ。

戸惑いながら身が上がると、ボクすぐ傍にいた知らない人がいて、その人は知らない人なのに優しい口調でこう言った。

「今日からここがあなたの家よ」

ボクが眠りに就き、それから数日経っていたらしい。その間に、様々な手続きが行われて、ボクはこの孤児院に住むことになった。

その孤児院のことは、よく知っていた。自然公園の先にある、緑に包まれた小さな平屋。まさか自分がそこに住むようになるとは、夢にも思わなかった。

そこにはボク以外にも何人かの子どもたちがいた。彼らは皆幼かった。そこではボクがもっとも年上だった。

自分よりもずっと小さな彼らは、笑っていた。

笑えていないのはボクだけだった。

ボクは、彼らはまだ幼いから自分が捨てられたことをよく分かっているのだと思った。だから、あんなにも無邪気に笑えているのだと、心の内で彼らのことを見下した。悲しいことを悲しいと知る

このできない彼らは、ボクよりも悲しい存在なのだと思え、それを自覚しているボクは、彼らよりも勝っているのだと浅ましくも優越感に浸っていた。

それでも、施設の中で自分だけ笑えていないことが、胸の中に泥を詰め込まれたかのように苦しかった。

その苦しみを失くすために、ボクは、施設の中で一番綺麗な笑顔で笑う女の子を掴まえて言ってやった。

「キミは親に捨てられたんだよ」

彼女もボクと同じように両親に捨てられた子だということを密かに知っていた。ボクとまったく同じはずなのに笑うことのできる少女が、これ以上笑えないように、重く、重く言葉を吐いた。

「しってるよ」

彼女は笑ってそう言った。

「わたしは、お父さんとお母さんに、すてられちゃったこと、しってるよ」

彼女はすべて知っていた。自分が両親に捨てられたことも、どうして自分がこの施設にいるのかも。すべて知っていた。それでも彼女は笑っていた。

彼女を傷つけるための言葉が、ブーメランのように跳ね返ってきてボクの胸を深く抉っていった。ボクは自分の境遇を自覚していたけれど認めてはいなかった。それが綺麗に笑う少女とボクの違いだった。

少女が言って、ボクはようやく自分が両親に捨てられたことを飲

みこめた。その事実はとても苦かったけど、ボクは必死に飲みこんで受け入れた。だからと言って、ボクが笑えるようになったのかと言えどそれは違った。施設では、笑みのような顔を作れるようになったけれど、学校ではそうもいかなかった。

施設の職員は、ボクが友達と離れ離れになってしまいうようなことがあつては可哀相だと配慮してくれたのだろう、ボクが転校するようないことはなかった。けれどそれが仇になった。学校からそう遠くもない施設から登校するボクの姿が、クラスの誰かに見られた。そしてその誰かが誰かにそのことを伝えた。ボクに親がいないことは、クラス中に広まっていた。悪いことに、ボクの両親が罪を犯して警察に拘まったという尾ひれ付きで。

何人かいた友達も去って行った。学校で独りになっていたボクは、やることもなく、暇をつぶすために施設にあった本棚から適当なものを取り出して、本の世界に逃げた。

カバーも外れてボロボロとなった古臭い小説。そこには難しい漢字も使われていて、二年生だったボクは煉瓦のように厚い辞書を引きながら時間をかけて一冊を通読した。内容なんてほとんど理解していなかったけれど、その本には、ボクと同じように悲劇的な運命を背負った登場人物がたくさんいた。彼らの境遇を知る度にボクは胸を痛め共感した。ボクは本の世界に夢中になっていた。そこに登場する人たちだけが、ボクの味方だと思った。

施設で生活を共にしている小さな彼らも、ボクと同じはずであるのに、年下ということが原因なのだろうか、味方という気はしていなかった。だから、たとえ現実の人物ではなくても、小説に登場する悲劇的な人たちにボクは仲間意識を抱いていた。

ボクは授業中でも構いなく本を読み続けた。注意されても無視した。そうしなければ、ボクには味方がいなくなってしまうから、狂ったように本の虫になった。

ただ本を読む場所であるかのように学校に行っては、朝から夕方まで文字を追った。

そんな日が幾日か続いたある日の放課後、その日もボクは厚い辞書が通行許可書であるかのように手元に置いて、時間も忘れて小説の世界に旅立っていた。

「――ねえ」

顔を上げると、腕に生傷を作ったやんちゃそうな男の子が割れんばかりの笑顔で机のすぐ傍に立っていた。

その彼の笑顔は、クラスメイトが浮かべている、邪なものをまだ何も知らない純粹に満ちたものとも、孤児院で暮らすボクらのような、幼いながらにして世界の暗部を体験してしまった達観の笑いとも違った。彼の笑顔は、降りかかる災難に自ら向かっていくような力強さをもった笑みであった。

ボクは彼の顔に見覚えがあった。なかなか思い出すことができなかったけれど、彼が今とまったく対照の曇りのない青空のような笑顔をしていた風景が不意に浮かんで理解した。

彼は、半月ほど前、坂の上からビー玉を転がして街中を騒がした少年であった。

幸せを噛み締めながら母親に叱られていた彼が、一体ボクに何の用なのかと当惑した。

彼は唐突に自身の境遇を語り始めた。

始めは両親のいないボクをからかっているのかと腹を立てかけたが、彼の笑みに絶えず浮いていた陰りが、彼の言葉に真実味を付加し、湯だった腹を静めた。この少年は真実を口にしているのだ。それが分かるとボクの体に電流が奔った。

この世界にも、ボクの味方がいた。そのことが嬉しくて、嬉しくて。一種の感動を受けていたボクに、彼はある提案を持ち出した。

『君と僕、この理不尽な世界を受け入れて、強く生きると互いに誓おう。互いに約束を交わせば、きっと僕たちは強く生きることができる』

彼はボクの両親の噂を聞いてやって来たのだろう。それでもボクは嬉しかった。本の世界以外に、自分の身の上に共感してくれる人がいるということが、予想以上の感動をもたらした。

だからボクは、あの日、彼と誓いを立てた。

『理不尽でどうしようもないこの世界で、強く生きていくことを誓います』

彼と一緒にいると、彼の強さに驚くばかりだった。一度、その源には何かあるのかと尋ねたことがあったが、彼は笑って首を振るばかりであった。それは誰にも言えない大切なことなのだ悟り、それ以後は聞かなかった。

六年生になって、ボクらとよく似通った待遇の生徒たちと出会った。

実と涼弥と浩次だ。彼らもなにかに苦しんでいた。それぞれが腹に闇を抱え、そのはけ口を探していた。小説の外にも悲劇が有り触れていた。自分が抱えているものなんて、本当は大したものではないのかと思ったりもした。

そんなボクたちの間に、言葉なんてものは必要なかった。ボクたちは導かれるように互いの手を取った。手を握り合うと、互いの闇は混ざり合うようにしてより深淵を増し強固になった。

ボクは強くなれた。あの洞窟に行くようになってから、それを強

く実感した。

ああ、そうか。

玲は、五人で過ごした二か月を思い出す。そこに悲劇なんてものは一切なかった。

——六年生になってからだ。

六年生になって、彼らに会って、きっとボクは変わったのだろう。

玲は、陽平を始め、涼弥、実、浩次がここまで掛け替えのないものであったことを知り、そして、その自身の変容の正体を知れたことで、胸の奥でずっと凝り固まっていた自分の過去が溶け出したかのように思えた。

——ボクたちは血の繋がりとかそんな軟なものじゃなくて、心の中で繋がっている。だから、彼らを嗤ったこの教師を許せなかった。

「ボクたちは、お前たちのような大人には絶対に従わない」

玲は最後にそう吐き捨てて、職員室から飛び出した。廊下を走りながら、潤んだ目元に手をやる。

——ボクのプライドなんて彼らの存在に比べれば川に流れる芥でしかない。

早く謝ろう。

玲は転げるように靴を履き替え、校庭でサッカーをしている生徒たちの横を駆け抜ける。

——たしか、初めて秘密基地に行った日も同じような光景を見たな。

あのかきは五人で彼らを見つめ、今は一人で彼らを見ている。それが無性に寂しく感じて、玲は強く地面を蹴って走った。

校門の先の住宅街は落陽に染まり、東から紺碧の空が迫っていた。長く急な階段を滑るように駆け下り、シオハラ邸の路地を直角に曲がる。フェンスを越え緑地に入る。早く皆に会いたい、そして謝りたい。それだけを思っで緑地の中を一心に駆け抜けた。

腐葉土の坂が見えてきて安心をってしまったのか、玲は倒れていた朽ち木に足をすくわれ顔から地面に放り出される。服が汚れてしまったことよりも、土の味が自分の惨めさを表しているようで嫌だった。土を吐き出して立ち上り、坂を這い上がる。

洞窟の入り口を前にいざ入ろうとして、手元に灯りがないことを思い出す。

内部構造は何となく頭に入っているし大丈夫だろう、と玲は洞窟の中へ入って行った。暗く何も見ることができない。明かりもなしにここへ入ったのは、これが初めての経験で少し心細くなった。



「おい、なんだよ、今のっ?！」

額に数粒の汗を浮かべた涼弥が実に向かって叫んだ。

その困惑顔から、彼自身も現状を把握できていないように見え、実は自分も何が起きたのか分からないと無心に首を振って伝えたそのとき。

実の目の端に、地下水の水面からぶくぶくと浮き上がってくる水泡が映った。

涼弥も浮上してくる泡を呆然と眺め、大事な何か思い出したかのように大きく目を見開いて、

「他の二人はッ?!」

叫び、視線を廻らした。実も釣られて照らされた洞窟を見回すと、すぐにソファアの陰で膝を抱え丸くなっている浩次を発見した。

——あんなところで、どうしたんだろう?

疑問を胸にしながら、実はまだ姿の見られない陽平を探した。しかし、どこを探しても陽平の影も形も見当たらない。

——大谷くんがいない? それはつまりどうということだろうか?

実の頭はようやく回転を始める。

——江ノ島くんがいて、大谷くんがいない……。どうして泡が浮いているのだろうか?

それに、さっきのあれはなんだったのだろうか? ああ、暗闇で誰かがケンカしているかのような物音は?

「こ、浩次!」

涼弥の声はさすがに悲愴であり、その情けない声を聞いた実は衝撃を受け思考を中断させた。

自分が知っている涼弥はいつも自信に満ちていて、発作のように奇抜なことを口走るけれど、それはとても魅力的なものばかりで、

学校のどの先生よりも荘厳な両親よりも、有名大学を出たことを鼻にかける家庭教師よりも、優れている偉大な人だと思えた。しかし、その狼狽える涼弥の姿は、ヒーローが悪役に袖の下を握らせているところを目撃してしまったかのように、長年抱いていた実の理想に亀裂を入れた。

浩次が膝に埋めた顔を上げる。その目は虚ろで、魂が抜かれたかのように放心していた。

「浩次？　大丈夫か？」

涼弥の問いかけに答えることなく、浩次は音もなく立ち上がる。木偶のように弱弱しく体を揺すったかと思うと――その巨軀を弾ませて出口へと駆け出した。

「お、おい！　浩次、待てっ！」

涼弥は抱えていたライトを地面に置き、走り去っていった浩次を慌てて追いかけていく。ぽつねんと暗闇に残された実は、茫洋とした蜃気楼のように辺りを包む暗闇へ視線を這わせる。びっしりと冷や汗をかいた背の数メートルほど先から、ぷくぷく、と小さな泡が弾ける音が聞こえて総毛立つ。このままここにはいけないと警鐘が鳴り、転げるようにして涼弥の背を追った。

お世辞にも痩せているとは言えない浩次であったが、遅れて追いかけた実は勿論のこと、すぐに追いかけたはずの涼弥ですら、壕を抜けるまでその姿を捕らえることはできなかった。

少しずつ、暗闇の奥からオレンジ色の薄日が放射してくる。その光を目に受け、ミカンの汁が染みたまかのように眇めながら、実は暗

い洞窟から外界へと飛び出た。
外は日が暮れ始めていた。

木々の合間から見える空は、橙と紫が混和した明るさがあったが、緑地には深い影が勢力を伸ばしていて、夜に備えて自らも暗く染まろうとしているようであった。

実は涼弥と浩次の姿を木陰の中に見つける。

洞穴の傍にある枯草が敷き詰められマットのようになった場に、大きな浩次の体を涼弥が組み伏せて押しとどめていた。地面を舐めているかのように顔を伏した浩次は、もう抵抗する素振りを見せず口から覇気のない声をもらした。

「俺じゃない」

それを聞いた実は、先ほどの水場での出来事がどのようなものであったのか、そして、どうして陽平はこの場にいないのか、さらに、その陽平をどうにかしてしまった人物が自分たちの中にいることによく気が付いた。それはテレビに流れている戦場をよく見てみたら、自分の家の近所であったかのように、突然、事件の渦中に放り込まれた衝撃が実の頭を殴りつけた。

「俺じゃない！」

浩次がもう一度同じセリフを叫び、身を振じって動き出そうとするのを涼弥が必死になってなだめすかした。その二人にわたわたと視線を行き来させながら、つい五分ほど前の出来事を今一度再生させた。

——誰かが暗闇に乗じて大谷くんに掴み掛かって、地下水溜まりへと叩き落とした。僕がその実行者ではないことだけは断言できる。でもそれは、自分以外の二人、涼弥くんか江ノ島くんのどちらかが

その『犯人』ってことに……

浩次の呼吸はゆっくりと鎮まってく。涼弥は浩次から離れて実に空空しい苦笑いを寄越し、ふうと息を吐きメガネの位置を直した。彼ならこの出来事を丸く綺麗にまとめることができるはずだと、実は思索に耽るように黙り込んだ涼弥へ期待の色が籠った熱い視線を注いだ。

涼弥は、地下壕の入り口を一度だけ見やり開口した。

「さっきのことは、俺たちだけの秘密にしよう」

実は文字通り耳を疑い、木の影が落ちて表情が見えない涼弥の顔を見返した。

「俺たちが黙っていれば、さっきの『あれ』は明るみに出ない」

自分たちの中に陽平を突き落とした犯人がいる。そのことを涼弥が気付いていないはずはない。その黙過的な提案に、もしかしたら彼が実行したのではないのかと不審を抱いて、起き上がる浩次を引っ張り上げる涼弥に言った。

「大谷くんは、どうなるの？ 今から戻れば、まだ――」

涼弥は手をかざし、その先の言葉を制した。実との間に立てられた涼弥の手の平からは、釈迦のものであるかのように有無を言わせない凄みが端々からあふれており、実は思わず閉口してしまう。

「あの物音を聞いただろ。あの様子じゃあ陽平はもう……」

もう、の続きは何なのだと激しく問い質したい衝動に駆られる。

それでも実は一縷の希望を手放すことができなかった。気が動転してしまっていて正しい判断が下せていないから、涼弥は友達を見捨てるようなことを言っているのだと自分自身を説得し、頻りに洞窟を顧みている涼弥へ言う。

「だ、大丈夫だって。僕たちだけで不安なら、誰か大人の人に連絡すれば」

実の声は尻すぼみになって消えて行った。眼鏡の奥に構えている涼弥の瞳が、夜空に冴えた月のように威圧的な眼光を帯びていたからであった。雨露に晒された子犬のような心境の実に、棄てた子犬を見送る元飼い主のような冷たい視線を向け、涼弥は抑揚を静めた声を放つ。

「警察や親に連絡すれば、俺たちが防空壕に入っていたことがバレるだろ」

実の細い肩が、ヒク、と上がる。涼弥は、陽平の心配よりも自身の身の内を心配しているのだと知れたその瞬間、彼に対する評価は、手の平を返したかのように失望へと変わった。昔からの憧れが大きかった分、崩れたときの反動も大きかった。

心の支柱が音を立てて崩壊を始めたさなか、ぼそぼそと浩次が呟いた。

「内田は知ってるぞ、今日俺たちがここに来たこと」

その浩次の声は、実の耳を通り抜けて行った。目標が消え去り向かうところを失くした実は、忘我したかのようにこれ以上口を出すこともしなかった。もはや陽平のことなど頭から消え失せてしまっていた。それほど彼にとって涼弥という存在が巨大なものであった

と物語っている。

「そんなもの適当な言い訳を言って、今日来なかったことにすればいい。——お前ら、明日はちゃんと口裏を合わせろよ」

そう二人に口止めをして、涼弥はいち早くここから逃れようと腐葉土の坂を下りて緑地を進んでいった。

そして、蠢く闇（3）

息を切らせ、玲は水場へとたどり着く。

暗闇でも体は道順を覚えているのだ、と我ながら自身の記憶力に感心をした。

——あれ、暗い？

着いてから初めて、玲は壕内に誰の気配もしていないことに気付いた。手探りで涼弥の大型ライトを探す——が、いつも置いてあるはずのシートの中央にそれはない。玲は不思議がりながら、異常なまでに静止している暗闇に立ちすくむ。何者もなく明かりもない。世界から一人だけ取り残されたかのような非情さが周囲で渦を巻く。

もしかしたら、自分は彼らから見放されてしまったのだろうかという不安が奔ったが、来るときに見た夕暮れに染まる街並みを思い出して安堵する。

——いつもならもう帰っている時間だ。きっと、もうみんな帰ってしまったんだ。

そう自分に言い聞かせて、玲は地下壕から抜け出した。外はもう真っ暗になっていて、物悲しさに押されるようにして歩みが速くなる。息を止めているかのように寂寥とした緑地を独り進む。密生する木々は風で囁き、独り歩く玲を取り巻いてひそひそと噂を取り交わす。

『どうしてあの子って——なんだろう？』『——なんだよ、きっと』『そういえば、あの子って——なんだった』『だから——なの』

かな？』

ひそひそ、ひそひそと影で行き交う流言。上下左右から飛んでくる囁き。気にしないように心掛ければ掛けるほど、折れ曲がった針金のように胸の端に引っ掛かり、じくりじくりと小さな傷を広げていく。

大きく風が吹き、天上の葉が毛羽立って一斉に鳴る。玲は立ち止まり、ずっと正面を見据えていた顔を伏せ、靴の先を見るように低頭した。

「つらい、な」

小さなその声も、草木の囁きに擦れて消えた。

翌日、空席となった陽平の席を見て、玲は胸騒ぎを覚えた。

——陽平は学校に来ることだけが人生の楽しみと豪語するようなやつだ。これは冗談ではなく、彼は本心からそう語っていた。風邪を引こうが雪が降ろうが台風が来ようが、陽平は一度も学校を休んだことがなかった。その陽平が、学校を休むとはとても思えない。

玲はゆっくりと深呼吸をして、頭を整理する。

——思い当たる節はあるけれど、確証がない。

昨日、秘密基地に行った彼らなら、昨日の陽平がどのような様子であったか何か知っているかもしれない。

ホームルームで、陽平が欠席した理由を渡辺が尋ねてきたが、誰も反応を示さなかった。どうやら欠席の連絡も学校に来ていないら

しい。渡辺は首を傾げながらネクタイの位置をぞんざいに直し、そのまま授業へと移行した。涼弥たちに尋ねる機会を逃して、玲は歯痒い思いで休み時間を待った。

休み時間が来ると、声をかける間もなく涼弥たちは示し合せたように揃ってトイレへと向かった。玲はトイレの前の壁に寄りかかって三人を待ち構えることにした。

トイレの中からもれてくる三人の声を、耳を澄ませて拾う。

「どうするの？」

「そうだ。渡辺が――の家に連絡するぞ。そうした――るぞ」

実と浩次の声だろうか、二人の声は何かに怯えているように聞こえた。

「俺が――するから」

これは涼弥の声だろう。こちらは普段通りであった。声がよく聞き取れず、玲は扉に接近する。どこかのクラスの女子生徒が不審な目を向けるが構ってられない。

「とにかく俺――任せと――って」

涼弥の声が扉を隔てたすぐそこで聞こえ、玲は慌てて扉から身を離した。

あ、とトイレから出てきた三人と対峙する。

「おう、どうした？」

涼弥は平然と玲の横を通りすぎたけれど、浩次と実は不自然に視

線を逸らした。玲は教室に向かおうとする三人に投げかける。

「昨日、秘密基地に行ったのだろう？ 陽平は何か変な様子ではなかったかい？」

浩次が『陽平』という言葉に敏感に反応し、実も伏し目がちになった。涼弥はそんな二人を一目して間を置き、あっけらかんとした体で答えた。

「昨日はあそこ行かなかったんだよ」

実や浩次の態度からそれが嘘であることは見抜いていた。それを追及しようとした瞬間、都合よく予鈴のチャイムが鳴り、呼び止める間もなく三人は教室へと引き返して行った。

その後も追及をしようとして三人に接近したが、涼弥が体良くかわして放課後までもつれこんでしまった。

「それでは、ホームルームを終えたいと思います」

気の抜けた調子で担任がそう告げた。パンダのように隈取られた目元でさっとア行の列をたどり、何か思いついたかのように渡辺は言った。

「大谷くんの家に、今日のプリントを届けに行ってくれる人はいませんか？」

それはクラスにいる生徒全員に向けたものであるが、その目は玲たちを見ていた。涼弥が手を上げ、「先生。俺、行きますよ」

言いながら少しだけ振り返って横目を玲に寄越した。それを受けて玲も続いて手を上げた。実と浩次は何の反応も示さなかった。

「えーと、じゃあ。二人にお願いしようかな」



「――で、どうして先生も一緒に来るんだよ」

「一応、担任だしさ」と力なく笑った渡辺を見て、こんなひ弱な奴が教師なんて勤まるのかよ、と涼弥は鼻で笑う。首だけで背後に振り返り、数歩後ろで思案顔をしている玲の横まで速度を落として並行する。

「浩次と実は？」

玲が声を低めて尋ねてきた。

「あいつらは用事があるから来れないってさ」
「そっか」

玲はさほど興味がなさそうに相槌を打つ。涼弥は正面を歩いている渡辺との距離を目測し、忠告をするかのように小声で言った。

「まだ、あいつらには黙っとけよ」

玲は涼弥が何のことを言っているのか考えているようで、ぱちくりと瞬きをしていて涼弥をやきもきとさせた。幾許かして、涼弥が何を言いたかったのか思い至ったようで、玲はこくりと頷いた。

丘の先から自然公園の入り口がゆっくり現れてくる。涼弥は舗道に沿って設えてあるフェンスをのぞき込み、下にある緑地を確認する。日が暮れて薄暗いため、底の方はよく見えないが見知った緑地に間違い。

自然公園の前をすぎ、街並が少し寂れてくる。陰った給水塔がだいた法師のように丘の上にそびえ、古びたアパートがぼつぼつと見え始める。

「なんか、この辺りって廃墟って感じだよな」

いつも以上に口数の少ない玲を気遣っているのか涼弥は何気なくそう口にして、遠くの空に浮かんでいる黒い雲塊を眺めた。今夜は雨が降るかもしれない。それを暗示するかのように強い山嵐が吹き、涼弥は反射的にメガネが飛ばないように手を添えた。玲は乱れる髪を邪魔くさそうに押さえている。前を歩く担任のネクタイが吹き飛びそうになっているのを見て、強風に煽られた間抜けな鯉のぼりを連想して、涼弥は鼻から小さく息を吹き出して言った。

「あれ、鯉のぼりみたいだな」

玲は別段面白くなさそうにそれを見て乾いた笑い声をもらす。嘲笑の対象になっているとも思いもしない渡辺が立ち止まり、脇にあるブロック塀に囲まれたアパートを見上げた。そこには、風で軋み悲鳴のような音を立てているおんぼろのアパートがあった。

——こんな骨董品みたいなアパートが現実にあるのかよ。

病的なほど老朽化したアパートを見上げながら、涼弥は口に出さず心の中でそう呟いた。

渡辺は真っすぐ一〇二号室を目指し、木戸をノックする。涼弥は

渡辺の横に立ち、玲は何故か戸の陰になる場所にいた。部屋の中がらがちがちと音がして薄い戸が開く。僅かな隙間から億劫そうな男の顔がのぞいた。

「誰だよ？」

渡辺の姿を見て、部屋の主は濁声でそう尋ねた。

「あ、えっと。私は草ヶ丘小学校で陽平君の担任をしているものでして」

渡辺は部屋の主をうかがうように低頭して続ける。

「今日、陽平君が欠席したので、プリントを持って来ました」

「あっそう。ごくろうさん」

男は隙間から皮が剥けた武骨な拳を出す。

——これが陽平の親父さんかよ。何だか、陽平のイメージとかけ離れているな。

涼弥は、陽平とこの父親を掛け合わせてみるけれど、どうやってもその二つは重ならない。彼が抱いた感想通り、陽平の父と思われる男はなかなかプリントを差し出さない渡辺に凄むように言った。

「早く渡せよ、そのプリント」

「あ、あのですね」

渡辺は気合でも入れるように小さく息を吸った。

「できれば、陽平君に直接手渡したいのですけれど」

渡辺のこの言葉を聞いて、突如として氣候が真夏から真冬へと飛んだかのように、場の空気が一変した。全員の顔を見られる位置にいた涼弥だけが、ある二人の表情が明確に変化したことに気が付くことができた。

それは、怯んだ陽平の父と、救いを得たかのような玲の顔であった。

「い、今、陽平は風邪で寝込んでるから……」

陽平の父親は明らかに狼狽えていた。素早く手を伸ばし、プリントを奪おうとする。担任はそれをかわし「一目だけでもいいんですよ」と言い、扉の隙間から室内をうかがおうとする。それを陽平の父が体で遮った。

一体今、何が起きているのか。涼弥は理解に至ることができなかった。

頑なに陽平に会わせようとしない父親。会おうとする担任。息を飲んでそれを見守る玲。三者三様の表情であったが、その目線の先は同一のものに向いているように思えた。

自分だけが知らない何かが今ここで起きている。それだけは唯一この状況から汲み取ることができた。

渡辺の不意を突いてプリントを奪い去った陽平の父親は、音を立てて戸を閉める。渡辺の顔には、焦りのようなものが垣間見えた。

玲が瞳を閉じ小さく息を吐く。その沈んだ表情の中に、どこか希望のようなものが宿っていることを涼弥の慧眼が見抜き、違和感を覚え眉間を狭める。さっきの状況のどこに『希望』があったのだと自問する。

——希望、あの中のどこに？

陽平の父と渡辺のやり取り。それを見て玲が抱いた希望。陽平に会わせようとしなない父親。粘り強く会おうとした渡辺。渡辺の一声で、場が急変したのを思い出す。

考えれば考えるほど、その答えは離れていくようで、そこに行きつくには定規で空の高さを測るかのような無謀なことに思えた。

渡辺が「もう行こうか」と呟いて、涼弥たちはアパートを後にする。

夕空を雲が覆い始めた所為で、いつもより街並みは色あせている。舗道に居並んだ街灯がちかちかと明滅する。それに触発されたかのように、涼弥の頭の中で光が瞬いた。

点在做していた欠片が合わさり絵を描く。描き出された情景を見て、考えたくもないある憶測に到達する。

——これが本当ならあいつを許せない。でも、この推理が真実であると確信するには、あと一つが足りない。

陽平の古くからの友人である玲なら、それを握っているはずだと涼弥は踏んだ。

「なあ、玲」

涼弥の神妙な声を聞いて、隣で歩いている玲が顔を向ける。涼弥は迷うことなく単刀直入に切り込んだ。

「お前、何か隠しているよな？」

申し合わせたかのように夕日が沈んだ。街灯に光が灯り、目を大

さく見開いた玲の顔を照らす。まるで推理映画の一場面のような、と暢気に考えるくらいの余裕が涼弥にはあった。

一秒、二秒——いくら待っても玲は口を開かなかった。その無言は何よりも涼弥の推理が当たっていることを示していた。

涼弥は陽平の顔を描く。そうして、いつでも笑顔絶やすことのない陽平の中にある『闇』に涼弥は触れてみた。それはとても痛くて、重くて、たぶん自分なら耐え切れないと思った。いつも笑っていた陽平が、心では笑っていなかったのだと知って胸を締め付ける。

「すまん、玲。変なこと聞いて」

玲に笑いかけ、フェンスの向こう側の緑地をぽかんと見つめていた担任の尻を叩いて通り過ぎる。

「先生、ぼっとしてんじゃないぞ、まったく」

「あ、ああ。ごめんごめん。——もう、暗いからお前たちは帰るなさい」

「言われなくても帰るよー」

涼弥は駆け出す。走って、視界を狭めて頭の中に集中する。

——玲はどうして何も言わないのだろう。陽平と最も仲の良い玲が、何もしないはずはない。

伍物語をした日、玲が語った猫の話が自然と想起した。

傷だらけの黒猫と棄てられた白猫。人間の理不尽さに翻弄される猫たち。

猫たちはどんなに人に憧れて足搔いても、人にはなれない。俺たちがどんなに世界に救いを求めても、救われることはない。

救われたいのなら我を殺して、世界に従うしかない。

——そんなのは、まっぴらごめんだ。

自分の好きなことができない人生なんて、必要ない。

俺は俺のやりたいと思ったことだけをする。誰の指図も受けたくない。その結果、周囲から浮いてしまうのなら、それこそ望むところだ。徹底的に立ち向かってやる。死ぬまでこの理不尽で不条理な世界に抵抗してやる。そうやって、自分の存在を確立してやる。俺は俺だと世界中に知らしめてやる。

黒い屋根を載せた自分の家が見えてきて、もうそんなところまで来たのだと涼弥は驚く。ズボンのポケットから鍵を出し、静かに扉を開ける。ほの暗く伸びる廊下の先、食卓の賑やかな灯りを涼弥はうら寂しげに眺め、やがて忍び足で自室に向かった。

部屋の明かりは敢えて点けなかった。ベッドへと倒れ込み、天井を見上げると満天の星々が瞳に降り注いだ。星と星の間に星座のようなしがらみはない。星々は自由に光を発し、天井に星空を創り出している。

文房具店で売っている発光シールを、星形に切り取って張り付けただけの簡易的な創作。月のない夜は明かりを点けず、こうして自分だけの宇宙を満喫する。

永遠と膨らみ続ける宇宙を旅したい、と宇宙飛行士に憧れていた頃もあった。

あの洞窟に踏み入ってから、別に宇宙飛行じゃなくて深海探査でもよかったのだと気付かされた。自分は『非情なほどの深さ』に憧れていただけだった。

その憧れをもたらしたのは、兄だった。

勉強ができ、どんなスポーツも易々と熟し、外見も申し分なかった。幼い頃から俺は兄と比較されてきた。幼いながらに、この兄に

は決して勝てないことを悟っていた。

だから、俺は突飛なことをして両親の気を引こうとした。そうすれば、あの人たちは俺のことも見てくれる、そう思った。最初の間は構ってくれたけど、次第に見向きもしなくなった。どんなに頑張っ

て己を主張しても、俺の個性は兄の存在感に到底及ばなかった。両親の注目がすべて兄に向いてしまうことは寂しかったけど、兄だけはいつでも傍にいてくれたから、そんなに苦痛じゃなかった。

俺は宇宙のように、深海のように、あの洞窟の闇のように――底の见えない兄を慕い憧れていた。それは、兄が決して俺を見下さなかったからだと思う。

『お前にしかできないことがある』

兄はしきりにそう言っていた。自分はなんでもできる癖に、俺にしかできないことがあると言う。そんな非情なほど深い懷を持った兄が大好きだった。でも――

いわゆる天才と呼ばれる部類であった兄は、事故に遭ってすべてを失った。

涼弥は上体を起こして、天井の星に手を伸ばしてみた。どんなに伸ばしても、その手が星に届くことはなかった。

――今からあの洞窟に行ってみようかな。
夜に。一人で。あの地下壕へ。

一度それを思うと、連続して起こる小爆発のようにその衝動を止められそうになかった。涼弥は足音を殺して部屋を出た。楽しそうな団らんの会話が廊下の先から聞こえてくる。

――あの人たちは、まだ兄にしか見ていない。

自分も同じだ、と苦笑して涼弥は玄関を抜けた。

夜の街には小雨が降っていた。

モノクロの無声映画でも観ているかのように、夜の街は静かで変化がなかった。

雨の匂いに鼻をひくと鳴らし、肌へと沁みる夜気が胸の底を落ちてかせる。次第に雨脚が強まってきたが、傘を取りに戻るなんて野暮なことは考え付かなかった。

雨に降られながら涼弥は夜道を歩く。

等間隔に路面から生えている街灯の明かりに、バシバシと蛾が特攻を繰り返していた。彼らは決して届かないそれに、どうしてか向かっていく。ぶつかって弾かれて。それでも彼らは突撃を止めない。今ならそんな蛾たちの気持ちも分かるような気がした。濡れ姿の彼に、帰宅途中のサラリーマンが奇異な目を向ける。そのような目は彼にとってもう慣れたものであった。

シオハラ邸まで一気に坂を駆け抜け、フェンスを抜けて緑地へと飛び込む。

雨露に濡れた夜の緑地は深かった。緑と夜が重なり合って深緑となり、雨滴が地表をぐずぐずと煮込んで振り上げた一足を地底へと沈み込ませる。

すべてが違う景色に見えて、涼弥を感激させる。

見たこともない景色。摩訶不思議な現象。思いもしない行動。自分の考えが及ばない出来事をたくさん集めていけば、いつしか自分が目標とする人物像——天才の兄とも違う、天災のような人物——いつしかそれに至れるだろう。

腐葉土の坂を上がり、洞窟へ踊り込むようにして入る。神経が高ぶり研ぎ澄まされ、真っ暗でもそこに何があるのか見える気がして、

ぐんぐんと涼弥は闇の底へと突き進んだ。

やがて、水場に到達する。雨が滲み出してきたのか、天上から雫の玉が落ちて玲瓏な音を響かせた。昼間よりも冷えているという些細なことですら胸を高鳴らせる。

涼弥はぼろぼろのソファアの上に横になって息を整える。そう言えば懷中電灯を持ってくるのを忘れたな、と今更になって気が付く。何だか無性に楽しかった。久々に兄のことを思い出したからかもしれない。

深い闇。ここに引かれたのは兄への憧憬からだっただ。あの頃の兄が帰ってきたようで嬉しくなった。もっと、兄と話したかった。もっと兄に近付きたかった。

涼弥はソファアから起きて立ち上る。足元でビニールの音がして、土足でシートに上がっていたことを聞き知る。どうでもいいと思っただけ、後でみんなに文句を言われて掃除をするのも何であったので、靴を脱ぐことにした。

脱いでいると、手の端に刺激を感じた。小さな針で刺されたかのような僅かな痛みであったが、視界がなく神経が敏感になっているため、予想以上の痛みとなって返ってきた。

それを指でたどる。針は靴の裏から生えているようであった。

緑地を抜けたときに、枝か何かが裏の溝に挟まったのかもしれない、と涼弥は靴からそれを取り払い指の腹で摘まんでみた。

——木の枝か？ いや、違う。なんだこれ？

明かりがないので視認できないが、枝のようなザラついた触感ではなく、冷たく滑らかな金属のような感触だった。

何だろう、と涼弥が首を傾げていると——背後から物音が聞こえ、仰天して振り返った。何も見えないが、何かがいるのは分かった。

砂利を踏みしだく音。動物か何かが、這うようにして歩いている

印象を抱いた。

涼弥は頭の中でこの見取り図を開いて、音源の詳細な位置を探った。

——んと、俺は今ソファーにいるから……音がしてるのは、海賊の人形のところからか？

人形が動いているという想像をして慄然としたが、そんなバカなことある訳がないと涼弥は暗闇に手を伸ばしながら、そろりそろりと慎重に音のする方へと近寄った。音源の方も涼弥に接近しているようで、地面を鳴らす音は次第に大きさを増していく。

自分自身の動作音が反響しているのではないか、と訝っていた涼弥の胸に、衝撃が奔る。涼弥は地面に転げ全身を強く打ち据えた。瞬間のことで何事か判じかねている彼の胸から、じわりと鈍い痛みがあふれて来、口の中に血の味が広がった。

——な、なんだッ？！

動転する思考の手綱を必死に握り、涼弥は状況を分析する。

——俺はなにかに襲われた。そのなにかってのは、さっき動いていたものに違いないと思う……

自分が何に恐怖しているのか、それすらも知ることのできないこの事態に、滅多に取り乱すことのない涼弥ですら全身を震わせながら恐怖した。

——なんなんだよ、これッ？！

今度は肩に痛みが襲った。地面を転がっていく涼弥は、ふと、この何かは暗闇の中でも自分の所在を把握していることに疑問を抱くも、すぐに追撃が襲う。涼弥は痛みに堪えながら、瞬時にその襲撃者を掴まえた。

——なんだ、これ？ この感触は……？

後頭部に感じたこともない鈍痛が落ちて、涼弥の意識が暗転する。聡い彼は、この一撃が致命傷であることを感じた。絶命の間近にいるというのに、泥沼に沈みこむ滑稽な自分の姿を想像して、内心では安閑と笑っていた。

やがて暗い視界から深い意識への降下が始まる。

『お前にしか出来ないことがある』

どこからか兄の声がした。

——兄さん。俺にしかできないことって、なに？

兄は答えなかった。恐らく『それは自分で考えなければならない』と理知的な顔をゆがめているに違いなかった。

急激に体が軽くなる。対して頭が重くなる。

死ぬこと自体はそれほど恐ろしいことではなかった。

元より『死』というものに興味があつたし、何よりも尊敬する兄と同じ場所に行けるのなら本望だとも思った。

ただ——あいつらに、何も言わずに逝ってしまうのは悪い気がした。

重い頭を精一杯回して、どうせ死ぬのなら自分らしく最期に何かしてやろうと涼弥は思った。

脳の血管が龍のように脈を打つ。人は死ぬときに走馬灯を見るらしい。そのときの人の頭は、きっと創造主のそれよりも優れたものに相違ない、と思考の断片を光速で重ね合わせている自分の脳を感じて、涼弥はそう思った。

今までの過去が、出来事が、細切れに碎けて、丸いビー玉状に収束する。その青と白のマーブル模様の球体の中に、兄と手を繋いだ小さな自分の姿を見付けた。

――あれは、兄が事故に遭う一週間前だった。

母親にお使いを頼まれ、俺は兄と一緒に坂の下にあるスーパーに行った。その帰り道だった。

二人で坂を上っていると、上から光が降ってきた。

俺はその幻想的な景色を見て「兄さん！ 光が降ってきた！」と興奮のあまり兄の腕を握りしめて言った。兄は痛そうな素振りも見せず、俺に微笑みかけた。

「涼弥。あの光は俺たちだよ」

幼い俺は、その意味がよく分からなくて小首を傾げた。兄の手が優しく頭に乗った。

「光には希望があり可能性がある。その輝きは俺たち一人一人の胸の底にもあるんだ。それを忘れてはいけないよ」

今考えると、光を見つめる兄の目には愁いが宿っていたように思える。まるで一週間後に訪れる、あの何もかも奪い去っていく事故を悟っているかのような、そんな顔だった気がする。

「俺にはすべてが揃っている」

兄の言葉に傲慢はまったくなかった。兄はどのような人も特別視しなかった。性別も人種も年齢も学歴も障害の有無も、兄にとって些末なものにすぎなかったのだろう。だからその言葉は、客観的に自分自身を評価した結果、口から出たものだった。

「俺には俺にしかできないことがある。けれど、俺にもできないことがある」

今なら合点がいく。兄にできなかったことは、これから自身に起こる運命を変えることだった。

「だから、涼弥。お前はお前にしかできないことをするんだ。お前にしかできないことがある。それを全力でやるんだ」

兄と俺の間を、光の玉が転がり抜けていった。

近くで見れば、何の変哲もないただのビー玉の大群だった。誰かが悪戯で坂の上から撒き散らしたのだろう。それに太陽の光が反射して、キラキラと光る玉に見えたのだ。

どこかの悪ガキの悪戯が原因となって起きた出来事であったけれど、俺にとってこの思い出は大切なものに違いなかった。

——そうか、俺はあのときのような、感動がほしくて……

どろどろと暗い中に何かが光った。涼弥が無意識にそれを手に取ると、膨大な量の光の奔流が頭に雪崩込む。血管から血液を追い出し、脳に光が充満する。暗闇だった視界が、転瞬の内に目映く早変

わりをする。

そして、涼弥は自分を殴りつけてくるものの正体に行きついた。

自分の機知も捨てたものではなかったようだ、と声を出して笑おうとしたが、口からは鉄の味がする粘ついた液体が出るだけであった。それでも彼は笑うことを止めなかった。

——諦めずに努力を続けたら、俺も兄さんのように特別な人に慣れたのかな？

絶命への後悔がにわかに過ぎたが、鉄味のそれと一緒にくたにして胸から洗い出す。

——こいつに。俺を殺すこいつに、致命的な何かを負わせてやろう。

これが最期の方策になるのだと思うと、無性にやる気が込み上げてきた。自分の口が卑しく吊り上っているのが分かった。最期にこのような策略を思いついた自分に拍手を送ってやる。

——たぶん、成功すると思う。

確率は低いし、他力本願な作戦だ。だけど成功する、と涼弥は確信していた。

これが自分にしか出来ないことなのかは分からないけれど、成功したときのシチュエーションを思い浮かべて、涼弥はやりとほくそ笑む。

——宝を隠すなら宝箱ってね。

細く薄く、緊迫していた糸が、ぷつりと切れる。支えを失った操り人形のように、痛めつけられた彼の体は、暗く濁った泥の底に重く沈んでいった。



涼弥が走り去っていった。

ぽけっと突っ立っている渡辺と一緒にいたくもなかったのも、玲は担任に声もかけず自然公園を抜けて施設へと帰った。

自室に入り、窓から厚い雲を眺めた。ぽつぽつと血しぶきのような雨が、アスファルトに落ちて、やがて本降りとなった。夕ご飯を知らせる六時のチャイムが鳴り、玲は食堂へ向かった。

開示された真相の究明（1）

翌日のホームルーム、暗澹とした表情で渡辺が口を開いた。

「今朝、市川君の親御さんから、涼弥君の行方が昨夜から分からないと連絡を受けました」

それを聞いた実の頭にぽかんと空白ができる。その僅かな間隙を、地下壕の闇底、鎮魂のために設えられた祠の存在が隙間風のように抜けた。

崇り。

その単語が実の頭に根を下ろす。

陽平がいなくなり、涼弥がいなくなった。この一連する友人の失踪は、地下壕を荒らしたことに憤った霊魂たちの崇りではないのだろうか。それならば、次は自分や浩次、玲もその犠牲になるのでは……

そのような非現実な空想を、ぶるぶると振り払う。

——幽霊なんているわけない。それに、あそこは完成前に戦争が終わっちゃったから、使われたことがないって大谷くんも言っていたし、崇りなんてあるわけない。

顔にじんわりと陰りを落とし、自分一人でも陽平を救いに行けばよかったと悔恨に揉まれながら、涼弥はどこへ行ってしまったのだろうかと実は考える。

「誰か、市川君の行方に心当たりのある人はいませんか？」

渡辺の目は明らかに実たちのことを見ていた。

その表情は立て続けに起きた出来事に疲労しているようで、目の下できた濃い隈と元々のくたびれた風貌とが相まってより一層疲弊が顕著になっている。彼のネクタイを止めているピンが「お前は二人の行方を知っているのだろうか？」と問い詰めてくるかのように鋭く照り、実は無意識にその視線から逃れるようにしてうつむき、ズボンの裾を強く掴んだ。浩次と玲はどのような顔をしてこの話を聞いているのだろうかと思い、後ろを振り返ろうとも考えたが、空席になった涼弥と陽平の席を見てしまうことが恐ろしく、彼にそれをさせなかった。

背中に一本の鉄槍が刺さったかのように、実は身動きせず凝然と授業を前にする。教師の口から出る単語は、するすると耳を抜け、まったく頭に残らない。緊張した全身とは異なり、時は漫然と通過して放課後がやってくる。その頃になってようやく、実は冷静に分析を行える状態にまで回復していた。

——涼弥くんはどうなってしまったのだろうか？

そもその原因と思われる陽平の消失にまで立ち戻る。

闇に消えた陽平のことを内密にしようと、口を割ることを禁じた涼弥。昨日、担任の渡辺にそのことが露見しそうになると彼は、「俺が何とかする」と言って陽平の家にプリントを届けに行った。そこで何があったのか……何かがあったのだろうか、今度は涼弥がどこかへ消えてしまった。

隠蔽しようとした涼弥が、陽平を亡き者にした『犯人』ではないのだろうかとは思っていた。しかし、今度はその涼弥がいなくなつた。

それならば、と再び顧みる。

陽平を亡き者にした誰かが、あの場にいた三人の内にいたとする。

自分の犯行でないことは分かっている。玲はあるとき秘密基地にいなかったから除外するとして、残るは浩次であるのだが、洞窟での怯えきった姿を思い出すに彼が実行したとは考えにくい。

——あれがすべて周到な演技だとしたら？

そのような器用なことが浩次にできるのかは怪しいが、可能性としては十分に考えられるだろう。そうなると範囲を広げなければならない。あの場にいなかった玲の犯行であるとも考えられるだろう。何て言ったってあの暗闇だ。こっそり後を着いてきていたことも……？

次々に可能性が出没し、実は頭を抱える。

——待って。前に読んだミステリー小説では被害者が犯人だった。だったらどうなるだろう？ あれはすべて大谷くんの自演で、真の狙いは涼弥くんを消してしまうことだった……いや、そもそも根本から違うのかも。

陽平が語った、暗闇に沈んだ人が獣になった物語を思い起こす。

——そう言えばあるとき、獣の鳴き声のようなものを聞いたがする。あれは一体？

ここに来て実は自分の犯行を初めて疑う。もしかしたら、獣になってしまった自分が無意識の内に罪を犯していたってこともあるのではないかと、疑心暗鬼の沼にはまり始める。一度その淵に踏み入ってしまうと、容易には抜け出せない。

「実、ちょっといいかい」

氷柱のように冷徹な語気が、混沌とした頭を抱えた実突き刺さった。

机の前には玲が立っていた。その横には引き攣った顔をした浩次の姿もある。

瞬発的に実は視点を下げた。どのような可能性があるとも、自分の犯行ではないと信じるのなら、もっとも現実的な解答は、浩次が犯人であることであった。目の前に殺人犯がいる。それを思うと恐ろしくなり、彼の爪先から髪先までを冷たい緊張感が行き渡る。

「実、浩次。今日のキミたちは何か様子がおかしい。それは、涼弥の行方が分からないことと何か関係があるのかい？」

浩次の方をなるべく見ないように、実は恐る恐る頭を上げる。

——全部、話してしまおう。

自分すら信じられないのだ。誰を疑っても仕方ない、とすべて話してしまうことにした。

「たぶん、関係していると思う。本当は一昨日、僕と涼弥さんと江ノ島くんと、大谷くんの四人で、あの秘密基地に行ったんだ」

実は一昨日の一幕を訥々と語り始める。



実が平坦な声で一昨日の恐ろしい出来事を語った。言葉足らずで、

所々つかえながらであったが、あの子のことを彼なりの視点で克明に描写した。何カ所か口を挟みたくなるところがあったけれど、浩次は最後まで大人しく聞いていた。

「僕たちの誰かが、大谷くんをあの水場に突き落したんだ」

実が落としていた顔を上げ、浩次をぐっと睨んだ。悪を糾弾するかなのような力強さが籠められた瞳を向けられ、自分には卑しいことなど何もないはずなのに、浩次は思わずたじろいだ。

「俺じゃない……」

厚い喉から捻り出されたその声には、明らかな狼狽と逡巡の色が含まれていた。このままでは、自分が犯人にさせられてしまう。浩次は、自分が潔白であることの証明を必死になって探し、それを言葉にして吐き出す。

「そうだ、俺はあの子とき一番遠くにいたじゃないか！」

取り乱した浩次とは対照的に、実は能面のような顔をして静かに反駁をした。

「そういうことを言う奴が一番怪しいじゃないか」

目の前にいるのが本当に実なのかと疑った。いつもオドオドとして人目を避けているような奴が、こうも食い掛かってくるのか、と。

「君たちは――」

下唇に手を当て、ずっと黙り込んでいた玲が口を開く。

「君たちは、勘違いをしているよ」

「えっ？」と浩次と実の声が重なった。

「陽平はちゃんと生きているよ。昨日、ボクと涼弥が陽平の家にまで確認しに行った」

「え……？ えッ！？」

再び浩次と実が声を重ねてもらした。玲は間を置いて沈黙考し、「仕方ないか」と呟いてから続けた。

「それは、ボクらが考えた悪戯だよ」

浩次は声を出して驚いた。やはり実も同様の反応を示した。

「えっと、それは、つまり、どういうことなの？」

「だから、さっきも言っただろう。陽平は生きている」

「え、じゃあ、あれは！ 誰かが争うような音は？！」

「陽平と涼弥の自演だろう」

「あの水の音は何だったんだよ？ 俺は確かに聞いたぞ」

「君が河原から持ってきた大きな石があったろう。僕が聞いた話では、あれを落とすと陽平が言っていた」

玲は一度深呼吸をし、「本当は、あの日——伍物語をやったあの日、陽平が最後の明かりを落としたときに、その悪戯を実行する予定だったんだよ」

浩次は、伍物語の最後に明かりを落とすことを必死に拒んでいた玲を思い出し、「じゃあ、なんであのとき内田は止めたんだよ？」と疑問をぶつけた。

玲は苦々しそうに言う。

「あれは……陽平の話があのかのときの状況に被っていたということもあったし、何か嫌な予感がしたんだよ」

その答えに嘘はなさそうであった。

体中の空気を絞り出したかのような深い息と一緒に、「よかった」という安堵の声が実の口からこぼれた。浩次も脱力して、どんと教壇の端に座り込む。

玲は、その悪戯のことを涼弥から口止めをされていたのだろう。それを律儀に守っていたため、今まで黙っていたのだ。

「今回ののはやけに手が込んでるな。……で、市川はどこで何やってるんだよ?」

やっと肩に乗った重りが落ちた、というように全身の肉を緩ませ、座り込んだ浩次は玲を見上げて言った。

「分からない」

再び唇に触れながら重々しく玲が口にしたのを聞いて浩次は目を見開く。玲の眉には溪谷を思わせる皺が寄り、見るからに気難しい顔となった。

「ボクが聞いていた計画は、明かりを消して陽平が誰かに落とされたかのように工作をする。涼弥がライトを点ける前に陽平はどこかに身を隠し、君たちが取り乱す様を見て楽しむ。良きところで、陽平が現れてネタばらしをする、といったものだったんだ。先ほど実から聞いた話では、浩次が逃げ出してしまったそうじゃないか。それで計画を変更したのかもしれない」

逃げ出した、ということに反論したかったが、話が逸れてしまいそうだったので浩次は飲みこんで堪える。

「でも、江ノ島くんが逃げ出したあと涼弥くんも慌てて追っていたから、大谷くんと相談するような時間はなかったようだったけど……」

実がそう述べる、一時は訪れていた朗らかな雰囲気引き潮のように何処へと流れ去っていき、残された風の静寂から切迫した海面にも似た、いずれ来るであろう動乱の予兆のようなものをひしひしと感じながら三人は沈黙した。

涼弥があのととき何を考えていたのか何て分かるはずがない。浩次は考えることを投げ出そうとし、ふと、頭をよぎったことを何気なく口にした。

「市川って、何かやばいことを仕出かしたとき、口止めするような奴だったけ？」

浩次は想像する。涼弥が何かを大きな失敗を仕出かす。それを隠そうとするだろうか？　するかもしれない。するかもしれないが――

「するとしたら、より状況が楽しいものへと転がるようにする、よな」

「うん、涼弥くんならそうする」

間髪入れずに実が答えた。

「僕たちが三年生の時に、大谷くんが起こした立て籠もり事件のときだって、あんな面白いことどうして自分が思いつかなかったの

かって、頭を掻きむしりながら悔しがっていたほどだよ。涼弥くんは、誰かに怒られるとか、そういうのはまったく気にしない、自分の楽しみを重視するタイプの人だと思う」

ならば実も浩次も、涼弥の巧みな演技に騙されたのだろう。あのとき涼弥は何かを思いつき、浩次と実に口封じを行った。それは、折角の目論みが水泡に帰してしまうことを阻止したかったという思いの表れだったのだろう。浩次の逃亡によって乱れた策略を、何とかして次に繋げられないかと思案したからこそ、あの涼弥とも思えない、逃避的な態度を演じるに至ったのだ。そのような涼弥を実は不審そうに見ていたようであったけれど、自分はまんまとしてやられたと思うと浩次の胸には少しだけ悔しさが滲んだ。

「それと」

実が前置きをして続ける。

「涼弥くんってさ、大谷くんのことをどこか尊敬するような目で見るときがあるよね……頼りにしてるっていうか、大谷くんを通して誰かを見ているような憧れの視線で」

浩次にも思い当たる節があった。

ここ一番のときに起用する代打のような、あの伍物語が良い例だと思う。ああいった五人で何かをするとき、決まって陽平の順番は最後になる。偶然そうなるときもあるけれど、多くの場合は涼弥がそうなるように仕組んでいたように思われた。

「――そうか」

二人の話を聞いて、玲は何か考え付いたのか涼しげな声で言う。

「彼は、洞窟から追って来ない陽平を不思議にも思ったが、何か新たな悪戯を思いついたのだと勘繰ったんだ。いや、陽平ならきつと何かするであろうと期待したのかもしれない。とにかく、彼は、陽平が出てこないのは、作戦の失敗を取り返そうとして新しい何かを画策しているのだと推測したんだ」

「それで、あんな柄でもない逃げ腰なことを言ったのか？」

「分からない。分からないけれど、その可能性は極めて高いはずだ」

そう断定した玲に、浩次はまだ残る疑問を投げる。

「だとして、内田。大谷は学校を休んで何をしてるんだよ？ 大谷が学校を休んでいることも、市川が行方不明になったのも、全部、大谷が考えた新しい悪戯ってやつなのかよ？」

玲の表情に影がさし、問い詰めから逃げるように視線を斜め下に落とした。

「陽平が休んでいるのは、涼弥のこととは関係ないと思う」

「関係ないって」

浩次は立ち上がり玲の肩を掴む。

「じゃあ、大谷は洞窟に残って何をしてたんだよ。お前は、昨日学校の帰りに大谷に会いにいったんだろ？ そのときあいつは何て言ってたんだよ?!」

小さく華奢な肩が僅かに振動させ、玲は浩次から顔を反らす。

「陽平は、いいんだ。今は、涼弥の手掛かりを探そう」

その語尾は、目の細かい布に濾されたかのように消えていき、後半はほとんど何を言っているのか聞こえなかった。煮え切らない浩次は舌を打つ。

玲と陽平。浩次が陽平と出会ったのは、三年生のときであったが、そのときも玲は他クラスであるはずの陽平の元へ頻繁に訪れていた。友達にしては近すぎる二人の関係。仲が良いと茶化せば二人同時に怒り、どちらかを馬鹿にすると関係のないはずの片側が怒ってくる。友達がまったくいなかった浩次は、その二人の關係に嫉妬を覚えたこともあった。嫉妬を抱いてしまうほどの片割れが、このように言っているのだ。何か思うところがあるのかもしれない。

「分かったよ。今は市川の手掛かりを探そう。――それでいいよな？」

浩次は実に尋ねた。実は「いいよ」と頷いて席から立ち上がり、浩次の前にまで歩み寄った。

そして、「江ノ島くん。ごめん」と小さな頭を下げた。

「僕は、あの秘密基地での出来事で、江ノ島くんのことを疑ってたんだ。良く考えもせずに浅はかだったと思う。本当に、ごめん」

深く頭を垂れた実を対応に困った浩次は狼狽し、実に頭を上げさせた。

「いいって、もう終わったことだろ？　むしろ、お前は被害者側なんだぞ？　涼弥と陽平が戻ってきたら、一緒にあいつらを締め上げようぜ」

実の目尻には涙が浮かんでいた。

きっと、実も辛かったのだと浩次は思った。暗闇で怪事が起き、友達の誰かを疑わなければならぬ状況に陥った。臆病だが人一倍心優しい実が、そんな一息に気持ちを切り換えられるはずがなく、精一杯の虚勢を張っていたのだ。それが今、涙とともに破れたのだろう。

「うん」と実が笑う。

「一緒に締め上げよう！」

涙顔の笑顔を見て、浩次の胸にも熱いものが込み上げてきた。それを目頭で受け止めたとき、自分が感動してしまったのだと知った。

——これが、友達か。

長年、狷介的であった性分が氷解していくのを浩次は確かに感じていた。それは、今までの自分が確実に変わってしまったほどの激震であったが、この変化は好転であるはずだと、全身に満ちている暖かいものに心震わせながら彼は目元に力を籠め、溢れてくる温もりを堪えていた。

——笑って、怒って、泣いて。遊んで、ケンカして、仲直りして。一々、態度が変わって面倒くさいと思っていた。どうして自分のやりたいことを曲げてまで、他人に媚を売らなければならないのかと疑問に思っていた。

ようやく、理解できた気がする。

一緒に笑えると、下らないことも面白くなる。

一緒に怒れると、嫌だったことも和らぐ。

一緒に泣けると、悲しかったことがとても些細なことであつたと気が付ける。

とても――。

とても大切なものに、やっと気付けたように思えた。

思い返せば、六年生になってからは、悲しいことや詰まらないこと、苛立ちよりも楽しいことの方が増えていた。来ることが億劫だった学校が、楽しみで、楽しみで仕方のないかけがえのないものに変わっていた。

浩次は水膜の張った瞳で実と玲を見、ここにはいない涼弥と陽平を思った。

――全部、こいつらのお陰だったんだ。

身勝手で我が侬で高慢な俺を、彼らだけは呆れることがあつても見放すことはなかった。どうして俺みたいな奴に構ってくれたのか、それは聞きたくても聞けない。もし、「ただ可哀相だったから」何て言われてしまったら、今の俺なら泣き崩れてしまうかもしれない。でも、こいつらならそんなことは言わないと、よく分からないけどそう思う。それがきつと、友達ってやつなんだ。

言葉にするにはまだ歯痒さを感じるその単語を、浩次は大好きなカレーを食べるかのように大切に飲みこんで胸にしまった。

――ずっと、自分が世界の中心に立っていると思っていた。

それは違った。

俺は一人で地球儀のように、ビー玉のように丸くなっていただけだった。

中心で丸く籠っていた俺をこいつらが引きずり出した。そして、

気付かせてくれた。

世界は丸くはないことを。

丸い世界に先はなく、くると同じところを回っているだけだと。

やっと至れたこの想いを、もう手放したくない。

「市川を見付けよう。そうしてまた五人で、笑おう」

遠い目で窓の外を眺めていた玲がはっと浩次へ向いた。

「うん、またみんなで笑って遊ぼう」

実が笑う。浩次も笑った。

玲も――僅かに口元を上げたように見えた。

開示された真相の究明（1）（後書き）

学校が忙しいのに加えて短編を書き始めてしまったので更新するの忘れてました。すみません。

これからもちびちびとアップしていくのでよろしくお願いします。

現在書いている短編の方は、今月末か来月の頭にはアップできると思います。

開示された真相の究明（2）

一先ず、涼弥の手掛かりを探すことになった。

家にいるという陽平に、涼弥の行方について何か知っているか尋ねることが一番の近道のように思えたけれど、玲が「もう少し待ってくれ」と懇願したので、他の方法で涼弥の手掛かりを搜索することになった。玲にも何か葛藤があつて、その所為で最後の一步を踏み出せないのだろうと、実は推測した。

方針が決まったところまでは良かったが、その次の案が出てこなかった。

こういうときに涼弥がいてくれたら、とそう思った。その本人を探している訳なのだけれど、実はそう思わずにはいられなかった。

実、玲、浩次の三人は、どちらかと言うと自分から発信をする方ではないので、誰がまとめ役になるのか多少の駆け引きがあつた。

実は遠慮し、玲は首を振る。なら、と浩次が名乗り出た。その自発的な浩次に、実は驚きを隠せなかった。

浩次は決して自分から輪に加わろうとする性格ではなく、涼弥が挑発する、もしくは、陽平が無理やり参加させるといった体を取って五人で遊ぶことが多かった。だから、浩次の申し出は実を相当驚かせた。

涼弥という中心人物の喪失によって、それぞれの中で何かが変わり出しているようだった。自分はどうなのだろうと実は自問してみなければ、それはまだ自分の中では発見できそうになかった。

進行役が決まると物事は円滑に進む。三人は案を出しあい、まずは涼弥の家に行って両親に話を聞いてみることになった。浩次の変化に触発された実は、その道案内を自ら買って出た。

涼弥の家は学校からそう遠くない。シオハラ邸より一つ前の路地

を曲がり、坂を真っすぐ下ったところにある黒色の屋根の一軒家がそうだ。

表札の横にあるインターホンを押すと、しばらくして茶色いドアからやつれた女の人が見えた。その人は、実たちを眺め言った。

「えっと、リョウちゃんのお友達——よね？」

物憂げに誰何するこの人が涼弥の母親なのだろう。端正な目鼻立ちがどこことなく面影を感じた。浩次が頷くと、涼弥の母親は少し悩んだ素振りを見せ、「どうぞ、上がって」と柔らかな物言いをして三人を中へ招いた。

「あ、いえ——」と浩次はまごつきながら顔の横で手を振る。

「おれ……ば、僕たちは、この後に用事があるので、少しだけお話を聞かせてもらっただけでいいんです」

時間が経てば経つほど涼弥が遠ざかっていくような焦りを感じ、最低限の情報収集のみを行おうと三人は決めていた。

涼弥の母は気拔けた返事をして「お話って、何のですか？」と年甲斐なく小首を傾げた。ここに来て浩次は鼻白んだのか、口をぱくぱくと開閉させてどのように尋ねればいいものか言葉を探しているようであった。それはそうだ、と実は思う。

突然現れて、行方不明になったお宅の息子さんについて詳しく聞かせてください、とは聞けないだろう。たとえそれが、息子と仲の良いクラスメイトからだったとしても、親の心境としては喜ばしいものではないはずだ。

見かねた玲が果断にも涼弥の母親に尋ねた。

「涼弥くんのことです」

ドアからのぞいていた朗らかな顔が、ぎちぎち、と音を立てるかのように無表情へと変わった。

「ああ、涼弥のことですか……えっと何を教えればいいですか？」

その投げやりな返答に実は耳を疑った。

まるで、道を尋ねられたから教える、というような軽い調子で行方不明の息子のことを喋ってしまうものなのか、このような儀礼的とも言える応答をするものだろうか。

考えてみれば、最初からどこかおかしかった。

彼女が家から出てきたとき、不思議そうな顔をして涼弥の友達であるか確認をとられた。自分たちの背格好を見れば、一目で涼弥の友人であることは知れるはずなのに。

玲も浩次も違和感を覚えたようで、互いに戸惑いの視線を交わしている。

「あれ？ 君たちはずいぶん小さいけど、『リョウスケ』の知り合いかな？」

背から投げかけられた声で振り向くと、スーツを着た壮年の男が立っていた。

「ああ、お父さん。お帰りなさい。この子たちは、『リョウヤ』のお友達よ」

涼弥の母の表情はにこやかなものに戻っている。聞くにこの背広の男性は涼弥の父親であるようだった。

「何だ、リヨウヤのか……」

涼弥の父親は興味を失ったかのように、実たちの横を通り抜けて家へと入っていった。どうしたものかと混乱しながらも、実は戦々恐々と述べた。

「涼弥くんの行方は、まだ分からないですよね？」

「そうですよ」

その返答に感情が籠っているようには思えず、機械に問いかけているかのような虚しさがあった。

「いつから、その、見当たらないんですか？」

「ええっと、たしか……私とお父さんとリヨウちゃんで晩御飯を食べていたら、食卓にリヨウヤがいないことに気付いて、呼びに行ったときだから……夜の八時くらいかしら？」

「早く見つかってほしいわ」と、まるで偶に家にやって来る野良猫を最近見かけなくなり、その行方を気にしているかのような口調で涼弥の母親は付け加えた。

言葉に詰まる実に玲が助け舟を出す。

「分かりました。長々とお時間を取らせてしまってすみませんでした」

玲は口早にそう告げてその場から去る。実も目礼をして先を歩く玲を追った。

路地を曲がり三人は電柱の陰に潜む。涼弥の家からここが見えないことを確認して向かい合って黙り込んだ。

自分たちが問題児と呼ばれるからには、その元がどこにある訳で、それは家庭であつたりトラウマであつたり様々だと思う。そのことについて互いに話すようなことは意図的に避けてきた。が、仲が深まれば意としなくても口が滑って、ということもあり、一年生からの付き合いである実は、涼弥の境遇について少しだけ聞き及んでいた。

涼弥には完全すぎるほど完璧な兄がいて、その兄の元で育ってきたから自分は両親にまったく期待されていないということ。本人は気にしていないような素振りであつたが、そのときの涼弥は普段と異なる空気を発していて、実には、意識しないように努めているふうにしか見えなかった。

涼弥の父親が口にした『リョウスケ』というのが、その兄のことなのだろう。

実は、来意が涼弥のことだと知った途端、関心をなくした夫婦の表情を思い返す。涼弥があの家でどのように暮らしているのか。涼弥のことだからのりくらりと住み分けをして、案外気楽に暮らしているのかもしれない。それは想像することしかできない。口出しもできない。

これ以上、涼弥の家庭について考えていても進まない。実は玲に向かって言った。

「昨日、大谷くんの家に行ったんだよね？　そのときの涼弥くん様子はどうだったの？」

玲は数秒間だけ考え、「いたって普通に見えた」と言つて続ける。

「昨日、陽平の家を後にして、ボクが『家』に着いたのは六時前だった。時間を確認したから、これは正確だと思う。涼弥と別れた場所から彼の家までは、十分程度なはずだから、彼が家に着いたの

も六時前後だと思うんだ。――涼弥の帰宅が六時、不在が確認されたのが八時。その二時間の内に彼は家を出た」

「もしかして、家に帰らないで、そのままどこかへ行っちゃったとか……」

あの家に帰るのが嫌になって、そのままどこかへ消えていく涼弥の幻想が実の脳裏を掠める。それは、もしかしたらありえないことでもないのかもしれない、と三人が三人とも胸の端が焦げ付くような苦しさを感じていた。

黄昏がゆっくりと住宅街の空にかかる。ぽつり、ぽつりと邸宅に暖色の灯りが点く。電線に止まったカラスが「早く家に帰りましょう」と言いたげに『カー』と鳴いた。

「秘密基地に行こう。市川が行くとしたら、あそこ意外に考えられない」

浩次がそう結論付けた。実もあそこ以外に考え付く場所もなく、玲も同じだったようで、三人はさすがの思いを携えて秘密基地へと向うことにした。

一度解散してから各自、懐中電灯を持ってシオハラさん宅の前で待ち合わせた。その所為で時間を消費してしまい、日は先ほどよりも西に傾いていて三人を焦らせる。

昨夜の雨の名残か緑地の足場は悪く、草葉には雫が滴り陰鬱さを増長させていた。緑地を歩く振動が木に伝播し、天蓋に溜まった雨滴が一日遅れの雨となって頭上から降り注ぐ。進みなれたはずの腐葉土の坂は、人喰い沼とも思えるほど三人の行く手を遮った。

洞窟の入り口にたどりつき、その闇の奥を三本の光の筋が探った。

「やっぱり、奥まで行くんだよね？」

返事など分かり切っているのに実はそう尋ねてしまった。

「当たり前だろ。行くぞ」

浩次が先陣を切って内部へ進む。

洞窟の内部も雨の影響で湿気が増し、平常よりも肌寒さを感じた。肘を抱えて気持ちだけでも寒さに抵抗するも、足を出す度に温度が下がっているかのように進むにつれて寒さが増していく。

気を紛らわせるために、ここへ来るのは何回目だろうかとは実は勘定を試してみた。

——十回は超えてよね。十五回に届かなくらいかな？　もしかしたら、それもとつくのとうに超えてしまっているかもしれない。数えることを忘れるくらいここへ来たし、僕たちこの独特の空間に夢中になってた。

水場は「寒い」を通り越し、もはや極寒のようであった。寒さに身を震わせながら、三人は思い思いの場所を調べることにした。実は最初にあの悪戯に使われたらしい大石の有無をたしかめる。いつも置かれている個所にそれはない。どうやら玲の言っていたことは嘘ではないらしい。

手元の明かりだけでは心許なくなり、いつもビニールシートの中央に設置されている大型ライトを点けるため、実は靴を脱いでシートに上がる。

——あれ？　ライトがない？

辺りを照らしてみても、シートの上に大型ライトは見当たらない。

——何かの拍子にどこかへ転がっちゃったのかな？

そう思いながら懷中電灯で周囲を探る実の視界に、どろりと動く何かが映った。

溶けきれていない墨の塊が、黒々とした墨汁の中を遊泳しているかのようなそれは、初めてここを訪れたときのことを嫌でも思い起こさせて、外気からくる寒気とは違う底冷えのような悪寒が、実の背筋を舐めるようにして駆け上がっていった。

手元のライトで海賊の人形を照らす。

幽霊船の亡霊のような様相で照らし上げられた人形の裏に、あの寂れた祠が悄然と建っているはずである。蠱惑的ともいえる動きで『闇』が消えて行った祠。陽平は安全祈願か何かだと言っていたが、本当にそうなのだろうか？ 実はその祠を調べてみようと思った。

——今までは、意識して祠の方へは近寄らないように心掛けていたけれど……

押し寄せる嘲笑の幻聴が、芯のない自身をぐらぐらと揺さぶる。

——そんなんじゃ、だめだ。

必要のない羞恥心は、手足のみならず思考すらも停滞させた。

——逃げてばっかじゃ、だめだ。

いつまでも、自分の嫌なことから目を背け、うつむき、顔を伏せていてはいけない。

辛酸を嘗めたあの日から、嫌なことから逃げるのが自分なのだと

諦めていた。

どんな必死になって頑張っても、どうせ自分のような内気なやつはまともな結果なんて残せない。自分は欠落品なのだ。ちゃんとした製品でないのだから、誰からも注目されず倉庫の奥の方に隠れていればいい。そうやって、端から決めつけたら気持ちが悪くなって、両親からのプレッシャーも幾分か和らいだ。自分は隠れていればいいのだと、行動する前から自分自身に見切りをつけていた。

——いつだって、僕に足りないのは最初の一步だった。

隠れていた倉庫が取り払われてしまえば、欠落製品だとしても衆目を浴びる。無骨な姿を見て笑われるかもしれない。まったく機能を果たさないと投げ捨てられるかもしれない。たとえそのような悲惨な目に遭おうとも、人の目に触れることで、誰かが自分の価値を見出してくれるかもしれない。

「変わるなら、今だ。それに——」

いつまでも彼の背中に隠れてもいられない、実は小さくそう呟き、下腹に力を籠めてその意気を逃さないようにする。この決意が逃げないようにする。

固唾を吞んで人形へと歩んだ矢先、出し抜けに人形の裏から『人影』が現れて実は小さな悲鳴を上げる。

大切に作ったシャボン玉が強風に煽られてパチンと爆ぜるかのように、その裂帛によって実の決意は容赦なく壊れていった。

震えた手からライトがこぼれ落ち、シートの上に転がる。

ゆっくりと全貌を顕わにしたその影は——

「ああ、ごめん。驚かしてしまって」

玲であった。

呆氣にとられている実の元にやって来た玲が「大丈夫かい？」と実のライトを拾い上げて渡してやる。

「あ、あそこでなにやってたの？」

まだ自失としている実が尋ねた。

「人形の裏に祠があるだろう。それを思い出して、なにか涼弥の手掛かりになるようなものがないか探していたんだよ」

「それで、なにかあった？」

多少の期待を込めてそう尋ねたが、玲は首を振って何の進展もなかったことを告げた。がっくりと気落ちした実は、ライトがいつもの場所になかったことを思い出して玲に伝える。

「涼弥くんが持って来た、あの大きなライトが見当たらないんだけど知らない？」

玲は一度左右に首を振ったが、その弾みで何かを思い出したのか喋り出した。

「――一昨日、君たちがまだこの場所にいると思って、ボクも一度ここへ来たんだよ。そのときには、もうライトがなかった。ボクの記憶では、伍物語のときに見たのが最後のだけけれど」

実は一昨日の涼弥と陽平が実行した悪戯を思い返す。

――ライトが消えて大谷くんが落とされたフリをして、涼弥くんがライトを点けた。そのときにはたしかにあった。そのすぐ後に江

ノ島くんが駆け出したから、それが見かけた最後だろうか？

涼弥は明かりを消さずにライトを置いて行ったと実は記憶していた。

「あの悪戯で、江ノ島くんが走っていったとき、涼弥くんが明かりの点いたままライトを地面に置いて追いかけたのまでは、覚えているけど……ごめん、その後から分からないや」

「そうになると、キミたちが浩次を追ったあと、明かりの点いたライトを陽平が消したことになるが……ライトをどこかへやってしまう必要は果たしてあるのだろうか？」

——たしかに、ライトをどこかへ持って行ってしまう理由が思いつかないや。

実と玲が首を捻っていると、一人離れたところにいた浩次が「おい、ちょっとこっちに来てくれ」と真面目な声で二人を呼んだ。訝りがなら寄ると、浩次はソファアの前のシートを懷中電灯で照らした。丸い明かりが照らす先には、泥がべつとりとこびり付いていた。

「泥、だよね？」

泥くらいなら付くこともあるだろう。不思議に思っただけで尋ね返すと、「もっと、よく見てみろって」少し苛立った語気で浩次がさらに返した。

実は顔を接近させてその泥を観察した。

——泥、だけど……なんだろう、凸凹としていて、何かの跡のようなのかな？

「分からないか？」そう言って浩次がシートの外に脱いであった
実の靴を持って来てシートの上にどさっと置いた。

「ああ！ そんなことしたらシートが汚れちゃうよ！」

実は浩次の奇行を咎めるように言う。

「どろどろのとこ歩いて来たんだから、シートに、泥が……あっ
！」

浩次の口元がにやっと上がる。何だか涼弥のようだな、と感想を
抱きながら、先ほどの浩次が示していた泥を再見し、今付けた靴の
泥と見比べた。

大きさは異なっているけれど、波状や丸形の泥が等間隔で落ちて
いるところは同一であった。両方の泥に触れてみる。ここが水気の
多い場所であるから、その変化はほとんど分からないものであった
が、ライトで示された方が若干、軟らかくなっているように感じら
れた。

「普通の、晴れた日の土じゃ、こんな跡は残らないはずなんだ」

浩次は覚えていた。伍物語をやる前にこのシートにつまずき、踏
んづけてしまったことを。そのシートには、細かい砂しか残らな
かったことを。

「昨日の雨って、いつから降ってたっけ？」

浩次がそう尋ねた。

実は昨日の下校後は家に籠もり切っていたので、雨がいつ頃から
降り始めたのか知らなかった。察するに浩次も同様なだろう。

「夕方くらいからだね」

間を置かずに答えた玲に重ねるようにして、今度は実が質問する。

「その夕方から降った雨で、緑地の地面がぐちゃぐちゃになったってことだね？」

「そうだろうね。今日来たときは大分固まったみたいだけれど」

「えっと、つまりこの靴の泥跡は、昨日、雨が降ってから緑地を抜けて来た誰かが付けたってこと？」

自分の推理の確認をとるかのように、実は二人を見て言った。

「そうなるね。ちなみにキミたちは、昨夜ここを訪れていないよね？」

玲の目には尋問するかのような色が含まれて、実は緊張しながら頷いた。同じように首を縦に振った浩次が、慎重に言葉を選ぶようにして口を開く。

「ということは、だ。これは市川のものかもしれないし、大谷のものかもしれない。また別の誰かかもしれないってことだ」

玲を見据えて続ける。

「何れにしても、この靴跡が市川の手掛かりとなるかどうか判断するには、大谷にも同じように昨日ここに来たか聞かなきゃならないってことだよ」

浩次の物言いを受けた玲は、闇の彼方をすいと見つめた。まるで

闇の奥部にいる偉大な何者かに自分はどうすればいいのか尋ねているかのように、その唇からは細かい息が繰り返しもれ出た。

しばらくして、玲の目に力強い色が帯びた。ずっと抱いていた懊悩に決断が下ったのだろう。

「明日、話す」

消え入りそうな声で玲が言った。

檻の中の獣（1）

明日が来れば、その日は今日になってしまいうので、明日というものは永遠に来やしないけれど、その明日がやって来た。

朝日が昇れば否が応でも目を覚ますように、洗面台で顔を洗い終えた玲は、自然な動作で正面の鏡を見た。ガラス板に反射する自分の表情は、どこか吹っ切れたようにも、浮かないようにも見えた。要はいつも通りの、何を考えているのか自分でも分からない顔であった。

——彼らに真実を打ち明けることは、あの約束を反故にすることになるのだろう。

あの日から一貫して法律のように心に打ち立てていた誓いを破ってしまうことは、自分自身をどれほど揺るがすのだろうか。それはやってみなければ分からない。

寝間着を脱いで外着へと着替える。これから、あの約束を破ってしまうのだから昔のように振る舞った方がいいのだろうか、という考えがふとよぎったけれど、それはまだ決心がつきそうになかった。かつて重心を支配していた四角いランドセルは今ではただの四角い箱で、両親に見守られながら嬉しそうに新品のランドセルを肩にかけていたあの子は、今では立派な問題児として扱われている。

——どこで、ずれてしまったのだろうか？

時は間断なく流れ、物は寂れて鈍り、人は老いて変わる。

変わらないものってなんだろう、と偶に考えてみることもある。

人は着実に死に直進するし、物も劣化の一途をたどる。誓ったものだって、歳月とともに風化してしまう。

——まったく変わらないものって、ないのだろうか？

学校へと向かう玲の足取りは風船のように軽くもあり、漬物石のように重くもあった。要はいつもと通りの、どこへ向かっているのか自分でも分からない足取りであった。

往来する生徒たちは、十人十色の表情をしている。

楽しそうに、怠そうに、辛そうに、泣きそうに。学校へと続く坂道を上っている。

人はみな違うのに、そんなこと誰でも分かっていることなのに、人は集団から外れたものを白い目で、奇異な目で見ると。外れたものたちがいけないのか、そのような体制をとる世界がいけないのか。玲には、まだその分別が分からなかったが、自分が間違っているとは思いたくなかった。

いや、間違っていることは理解しているけれど、それを間違いだと認めてしまうことは、彼に対する裏切りであるように思えてしまい、その感情をひた隠しにし、目の前の虚構に共感していただけないかもしれない。

坂は空へ続いているかのように、ゆるゆると伸びている。

ずっと昔、この坂の上に立ち、手の平からあふれ出しそうなほどのビー玉を転がした少年がいた。彼の手から離れていくビー玉は、キラキラ、カンカン、キンキンと、好き勝手に坂を転がっていった。玲はその少年を遠目で見ていた。直後に駆けつけてきた母親に怒られている彼の表情は至福に満ちたもので、今でも記憶にくっきりと跡をつけて残っている。名前も知らない幸せそうな彼を羨望し、坂を好き勝手に転がっていく光の玉のことをともうらやましくも思った。

——ボクたちはビー玉には成れないのだろうか？ 好きな通りに

坂を転がれないのだろうか？

その質問への納得のいく答えが、この長い坂の上にあるとは到底思えなかった。

人生の分岐となる重大な決心をした日であったとしても、それと相乗するようにして運命を左右する劇的な大事件は訪れない。飽くことなく日常は常として存在し、その決断は運命を揺さぶるほど大それたものには成りえない。だから、自分の口から発せられるこの言葉にも、世界を震撼させるほどの力はないのだと、半ば念じるようにして玲はそれを口にする。

「陽平は父親から虐待を受けている」

四年もの間、胸の奥の裏の底に丁寧にたたんでしまい込み、決して開かないと誓った思いをたった一文で要約できてしまったことに、玲は少なからず衝撃を受けた。

言葉にすることは何よりも簡単で楽だった。覚悟を決めれば呆気なく、息を吐くのと同じくらい無意識に口を開閉させれば言葉が出た。それだけ、日々そのことについて考えていたからだと言えるかもしれない。

——そこへ乗せられなかった四年分の思いは、どうやって表現すればいいのだろうか？

自分が懸命に守ってきたものはたった一文程度の価値しかなかったのか、と口にしてそのような感想も持った。

浩次と実が息を飲んだのが、その表情から易々とうかがうことができた。

これ以上、何を話せばいいのだろうか。あの一文にすべてが詰まっているし、詰めたはずだ。そう思ったけれど、枷が外れたかのように

に玲の口は言葉を吐き出し続けた。

「陽平の母親は、彼が二年生になった少し後に家を出た」

今になって日数を逆算すると、それはビー玉事件から一週間後のことだった。息子の悪戯を怒っていた彼女の胸の中では、既にその決心が固まっていたのかと思うと、人間の表層を覆おう薄皮の存在が空恐ろしくなる。

「父親の母子に対する暴力は何度かあったらしい。彼女はその暴力に耐えきれず、陽平を残して家を飛び出した。朝、彼が目覚めると、前夜までいたはずの母親の姿は家になかった」

残された陽平は消えた母親のことを恨もうとはしなかった。

むしろ、逆の感情が彼に宿った。

獅子の子落とし。

どこで知ったのかは分からないが、彼は、母親の逃亡をそのことわざの通りに解釈した。母親は自分の強さを信じて崖へと突き落したのだ、と都合のいい言い訳を自分自身にした。

「陽平はその日から、今現在まで、父親と二人で生活をしている」

理不尽な境遇も不条理な条件もすべて受け入れ、抵抗し、彼はこの世界に反抗している。絶壁を這い上がり、その上にいる母親の姿を夢見ている。

——ボクは、陽平に何かして上げられたのだろうか？

玲は自嘲気味に頬を歪ませ、陽平から受け取ったものの多さに圧倒される。あの誓いによって自分は強くなれたけれど、陽平はどう

だったのだろうと様々な了見を飛ばしては、彼にとって誓いがどうしても必要なものであったとは思えなかった。互いに強く生きると約束を交わさなくても、当時から独りで暴力に耐えていた彼は、十分に強い人であったとしか思えなかった。

「陽平の欠席は、それと関係していると思う」

涼弥とプリントを渡しに家へ赴いたとき、陽平の姿を確認するころとは叶わなかったけれど、彼はあの家にいた。虐待の事実を知っている玲は、陽平の父親の反応を見てそう確信していた。

強く歯を噛み締めて怒りに耐えている浩次。目を端に涙を湛えている実。目の前にいる二人は、恐らく、陽平を救おうとする。

大抵の人が虐待を受けている子どもの存在を知れば、どうにかしてその子を助けようと奔走するだろう。そうなってしまえば、逆境に立ち向かい獅子の子のように強くなるうとしている陽平の誓いは粉々に粉碎される。そうなること知りながら、ボクは二人に話した。陽平の信条を瓦解させてでも、五人で過ごす日常を取り戻したかった。

「でも――彼は虐待の事実を認めはしないだろう」

困難の先に待つ、ありもしない希望を夢見ているのだから。

檻の中の獣（2）

そこで玲は口を一文字につぐんだ。

陽平の境遇は衝撃的であったが、どこか予想の範囲内であった。

自分たちは、心のどこかに傷を負っている。だから、所謂、問題を起こすような生徒なのだ。傷の痛みを紛らわすために、その苦痛の発露を世界に求めているのだ。

陽平はその苦痛に耐えている。強くなるために、理不尽な世界に反抗するために。だから、自分の苦難を玲に口止めをしていたのだろう。

実は鼻を大きく吸った。横に座る浩次が、拳が白くなるくらい強く手を握り締めて言った。

「どうして大谷は認めようとしらないんだ？」

浩次がそう尋ねても、玲は一直線の唇を開けようとしなかった。

その痛切な表情は、今にも倒れてしまいそうな石柱を思わせた。

大事な支えを失った柱が、風に吹かれて斜めに傾げ、それでも倒れまいと踏ん張っている。それを見ていたら、これ以上玲に口を開かせることは残酷な仕打ちのように感じて、実は浩次に向けて小さく首を振る。浩次はその仕草を読み取ってくれ、それ以上尋ねようとはしなかった。

三人だけの教室に沈黙が続いた。時計の秒針が神経質な家庭教師のように規則正しく秒数を細かく区切る。このまま何もせずにといたら、あの秒針は大切な繋がりをも細かく刻んでしまうのではないかという強迫観念が実を襲う。

「大谷くんの家に行かないと、涼弥くんの手掛かりも掴めないよ

ね」

前に座る玲は、自嘲的な笑みを浮かべる。

「陽平の父親は、ボクらを陽平に会わせてくれるだろうか？」

そう。もし陽平が虐待による何らかの外傷を負ったことで、学校を欠席しているのなら、彼の父親は陽平への面会を拒むだろう。現実的な問題を突き付けられ、自分たちの力量を思い知って絶望した。自分たち三人で陽平の家に行ったところで陽平の父に邪険に追いつかれるに違いない。子どもにできること何て所詮たかが知れているのだと、突き付けられた気分になる。

「どうしよう……」

知らず知らずの内に実は弱音をこぼしていた。

「大谷の親父はいつも家にいるのか？」

浩次が玲に尋ねる。

「分からない。さすがに仕事はしていると思うけれど……」

していたとしても、それが何時頃なのか分からない。三人は自分たちの無力さに打ちひしがれるように黙った。

涼弥ならこのような行き詰ったとき、にやり、と逆境を楽しむように笑って思いもしない妙策を口にするのだろう。涼弥と自分は違うのは分かっているけれど、いなくなっただけでも涼弥の偉大さを痛感した。

「僕たちだけじゃ、だめなのかな……」

「ボクたちだけ……」

玲はオウムのように繰り返して呟き、勢いよく顔を上げた。

「一人だけ、頼れる人がいるかもしれない」

「誰だよ？」

浩次が語気を強めて聞いた。

「担任の渡辺だよ。彼は陽平が虐待を受けていることを知っていると思う」

「どうして、分かるんだよ」

「陽平が学校を休んだ日、彼は陽平に直接プリントを渡そうとしたんだ。それも、拒む陽平の父親を相手に必死な様子で喰らいついていた」

「それだけで、あいつが虐待について知ってるっていえるか？」

「断言はできないけれど、プリント何て直接渡さなくても構わないだろう。なのに、渡辺は直接会って陽平に渡したいと言ったんだ。虐待について知っていたからこそ、そうしたと考えられないこともないだろう」

それは——ありえるだろう。

現場をこの目で見た訳ではないが、玲の話聞くに、あの頼りない渡辺がそこまでするには何らかの理由があると思う。

「あいつは虐待についていつ知ったんだよ」

浩次はここにいないはずの担任を責め立てるように言った。

「それは……分からない。ずっと前から知っていたのかもしれないし、家庭を見て直感で悟ったのかもしれない。――それでも、現状を理解していてボクたちが頼ることのできる大人は彼しか思い当たらない」

自分たちを迫害する教師たちに頼ることは、一種のタブーのように思え、実は複雑な想いに駆られた。浩次の表情も苦いものに変わる。

けれど、どのような手段を取ろうとも、実には玲が口にしたその希望にしがみつくしかないように思えた。どのようなものでも、今すぐ陽平を救い出し、涼弥の手掛かりを掴むことが最も重要なはずであったから、

「行こう、職員室に」

そう言って実は椅子から腰を上げた。

教室を後にして一階の職員室へ向かう。階段を下りながら一つ懸念があったので実はそれを口にした。

「今、涼弥くんのことですっぴいになって、すぐには対処してくれないかもしれないよね」

その質問に二人とも答えることはなかった。恐らく、同じ不安を抱いているのだろう。

職員室のドアを開けると、厳かな視線が一斉射撃のように実たちを射抜いた。教員たちの面持ちはどこか物々しく、やはり涼弥の行方不明がこのような沈鬱な雰囲気にかけているようであった。実は担任の渡辺の姿を探す。職員室を訪れたことなど数えるほどしかな

いため、どのように席順が決められているのか見当もつかなかった。加えて、教員たちの鋭い視線が入室させるのを尻込みさせた。

玲は数々の視線を物ともしない様子で室内に踏み込み、教師たちと反目した。

玲の眼力に数名の教師が気圧され、視線を逸らす。乱れた視線の海を渡航するように玲は職員室の奥へと進行する。実と浩次は、毅然と進む玲の後ろに従者のように着いていくことしかできなかった。

「渡辺先生」

玲が窓側の一番奥の席に頭を垂れて座っていた渡辺に声を掛けた。渡辺は寝ぼけたような顔を寄越し、訪問者が彼らであると気付いて眉を上げた。

「あ、あれ？ どうした？」

「ちょっと。相談したいことがあります」

玲はそう言って、こちらへ奇異な目を向けていた他の教師たちに侮蔑の籠った視線を返した。渡辺の隣席の仏像のような教師が何かを言おうとしたが、玲に睨まれて怯み、その図体を萎縮させる姿は滑稽としか言いようがなかった。

「できれば、静かなところで話をしたいのですけれど……」

教師全員への流布を避けたのは、陽平のことを思った玲なりの配慮だったのかもしれない。

「えっと、じゃあ——応接室にでも行こうか」

三人は職員室に隣接する応接室へと連れて行かれた。応接室とい

うものを一教師が好きなときに使ってもいいのかどうか、という疑問を持ったが深く考えないことにした。

蛍光灯を照り返して黒光りする重厚なソファ―に腰を掛ける。二人掛けのものなのに三人座ってもまだゆったりとくつろげる空間があった。

ソファ―に身を預けると、秘密基地にあるおんぼろとは比べ物にならないほど柔らかく、座ると実たちの身が十センチほど沈み込んだ。実には、この肉厚ソファ―と秘密基地にある雑巾のようなソファ―が、同じ用途で使用されるものとは到底思えなかった。

壁には歴代の校長の写真が額縁に入れられ、実たちを見下ろしている。写真とはいえ、その眼差しには校長になるだけの威厳が見て取れた。圧巻されて身を竦ませていると、長方形の卓子を挟んだ向かい側のソファ―に担任の渡辺が腰を落とした。

「それで、三人揃って何のようだい？」

「陽平――大谷陽平が父親から『暴力』を受けている件についてです」

玲は敢えて「暴力」という言葉を強めて発音した。そうすることで、渡辺が陽平の虐待について存知であるのか探る腹積もりのようだった。

知っていれば、自分たちの来訪の意図がすぐに掴めてスムーズに事が進むだろうし、たとえ不知だったとしても、自分が受け持つ生徒が虐待を受けていると聞けば、教師として何もせずにはいられないだろう。

渡辺は「ああ」と声をもらし、眉をしかめ懊悩に苦しんでいるかのように表情を歪めた。その苦悶顔は、前々からそのことで悩んでいたかのような表情で、渡辺先生は知っていたんだ、と実は心中でにわかに安堵した。

話の進行はもつとも状況を理解している玲に任せて、実は聞くことに徹する。

「市川君のことで混乱していて手が回らないのは、重々に承知しているつもりです。ボクたちも、先生方と一緒に市川君のことが心配だという気持ちは変わりません」

玲が一呼吸置く。頭の中で話すことをまとめ上げているのだろう。

「市川君の行方について、大谷君が何か知っている可能性があるんです」

渡辺は大きく息を飲み、小さな瞳をカッと瞳目させた。

「く、詳しく聞かせてくれ」

卓に身を乗り出し、その顔は上気しているようにも見えた。

玲が実と浩次それぞれに視線を投げた。どこまで話してしまっているのだろうか？と意見を求めているようであった。

教師にあの秘密基地のことを話してしまえば、もう二度とあそこへの出入りは禁じられるだろう。もちろん、罰も受ける。話してしまったことに涼弥や陽平は烈火の如く怒るかもしれない。けれど、いくら怒られようと、ケンカしようと、二人が無事に戻ってきてくれるのなら、また笑い合える。実はそう思い「ぜんぶ」と囁いた。浩次も同意して二重あごを引いた。玲は「分かった」と小声で言い、正面へ向き直る。

「渡辺先生。これからボクが話すことを怒らずに最後まで聞いてください」

渡辺は神妙に頷く。その額には緊張の所為か、脂汗が滲んでいた。

「ボクたちは、一カ月ほど前に草ヶ丘特殊地下壕の入り口を発見しました」

正しくは、陽平が元々知っていてそれを教えてもらったのだけけれど、そこは省いたようだ。

それを聞いて渡辺はソファーから引っくり返るくらい仰天すると思った。しかし、意外にも渡辺は沈着な様相だった。実たちならそれくらいのことをしていてもおかしくない、とある程度の予測を立てていたのかもしれない。

玲がそれ以後の出来事を要約しながら話す。

地下壕を秘密基地として利用したこと。三日前に涼弥と陽平がある悪戯を企て、実行したこと。そのときに陽平の姿が見られなくなったこと。その翌日、陽平が学校を休み、さらに涼弥が行方不明になったこと。昨日、涼弥の行方の手掛かりを探しに地下壕へ赴いて靴の跡を発見したこと。

「その足跡の詳細を大谷君が知っている可能性があります」

渡辺は腕組みをし、「靴跡……」と口の中で呟いた。腕の中で人差し指が一定のリズムで落ち着きなく上下している。

「内田は、大谷が父親から暴力を受けているっていうのは、いつ知ったんだ？」

「知ったのは、二年生のときです」

玲が苦々しく答えたのを聞いて、渡辺は眉間に切り傷のような皺を寄せる。あの無頓着の塊のような渡辺もこのような表情を――自

分の受け持つ生徒が虐待を受けていることを、どう対処したものかと悩んでいる顔を――するの、と感心にも近いものを抱いた実は、ふっと突っかかりを覚えた。

それは、日常におけるちょっとした違和感のように他愛もないものであった。友達の声が少しだけ掠れていて風邪っぽいとか、昨晩親に叱られたのか今日はどこかつけんどんな態度であるとか。ほんの些細な心情の違いのようなのだが、人の視線に、感情を向けられることに人一倍敏感な実だからだろうか、渡辺が浮かべる苦悩の顔から、どこか嘘っぽさを見出した。

浩次は話に聞き入っているようだった。玲も、話すことに精一杯でその不自然さには気付いていない。

うーん、と渡辺は瞑目して唸り声を上げた。

――渡辺先生は、本当に大谷君の虐待について知っていたのだろうか？

そのような疑惑を抱き始めた矢先、渡辺は屈伸するようにしてソファーから立ち上がった。

「今から私が大谷の家に行って話を聞いてくるよ。お前たちは、もう遅いし家に帰りなさい」

そう言って部屋を出て行くとするのを玲が慌てて引き留める。

「ボクたちも、一緒に行っちゃだめですか？」

応接室のドアを開けようとした渡辺の動きが止まる。潤滑油の切れた歯車のように振り返った渡辺の口から出たのは、普段の気弱さが排斥された命令調のものであった。

「君たちは、家に帰りなさい」

その顔は鬼気迫るもので、玲と浩次は面を食らったようで二の句を継ぐことができなかった。実だけは胸に溜まった疑念の真偽を知りたいと、一人食い下がった。

「先生ひとりで行ってどうにかなるんですか？　この前だって、大谷くんのお父さんに対応しても、何もできずに追い出されたそうじゃないですか」

この渡辺に対する不審も、人の注目を嘲りだと変換してしまう自分が身勝手にも疑っているだけなのではないか、と確証なさに不安を抱きながら渡辺の出方をうかがう。

実の言葉を受けた渡辺の顔が、痛点を突かれたのかのように苦々しいものに変わっていったことで、渡辺は知ったかぶりをしていたと当たりを付け、畳みかけるようにして実は続ける。

「大人数で押しかければ、大谷くんのお父さんの対応も変わると思うんです」

「いや——子どもの人数が増えたからといって、それは変わらないだろう。なにかあったら危ないし、私だけで行くよ」

中々折れようとしないう渡辺にこのままでは押し切られてしまう。焦りを感じ始めた実は、そもそもどうして渡辺は頑なに一人で行こうとしているのか、その理由に思い当たった。

——渡辺先生は、自分のクラスの生徒が虐待を受けていることを、他の先生に知られたくないんだ。だから、事を荒げないようにできるだけ穏便に、一人でこの問題を片付けたいんだ！

それには、渡辺が自分たちの担任であることが根深く関係しているのかもしれない。

実は、自分たち——問題児五人組のクラスを、半ば押し付けられるような形で渡辺が担任を任されたと風の噂で聞いたことがあった。問題児五人を背負わされた渡辺には、他の教師たちの目が鋭く光っているのだろう。ただでさえ何を起こすか分からない、爆弾のような自分たちが仕出かしたことの責任を負うのは、多くの場合その担任だ。彼らが問題を起こす度に監督不行を咎められる渡辺は、生徒が起こす問題ごとに過敏になっている。できることなら、内々に自分だけで処理したく思っているのだ。

その憶測が正しいものなのか確かめるために、実は鎌をかけてみることにした。

「それなら、他の先生にも声をかけて一緒に来てもらえれば、危険は少なくなるので、僕たちも行っていいいですよね」

渡辺の一挙手一投足を見逃さないように目を皿にする。目の色、頬の僅かな動き、口元の皺の本数の変化すらも見極めようと、実はすべての視束を渡辺の動作に集中させた。

渡辺は鼻から小さく息を吸い、瞬きを一度した。引きつった頬を笑みに変えて誤魔化し、眉尻を数ミリ上げた。乾いた唇を舌で舐めてから口を開く。

「今、他の先生たちは市川の件で忙しいみたいだから……」

取って付けたようなその言い訳は、上げ足を取るまでもなく自らぼろを出していた。

渡辺は先ほど玲の口から『涼弥の行方に陽平が関係している』と

聞いていたはずである。心の底から涼弥のことを心配しているのなら、この涼弥の行方の有力な情報に人員を割くべきで、たとえば他の教師たちが忙しいのだとしてもまずは教師陣に一報を入れるべきなのである。渡辺の様子からは、そうしようとしているようには思えなかった。こうなると、本格的に自分の推測は正しかったのだと実は確信した。

渡辺が秘匿に走る原因を作り出しているのは自分たちなのだと思うと、実は心苦しくもなる。

——だからと言って、ここで引くわけには行かない。やっと掴んだ涼弥くんの手掛かりを離す訳にはいかない！

「大谷くんが、市川くんの手掛かりを握っているかもしれないんですよ？」

この一言が決め手になったのか、渡辺は「仕方ないか」と実たちが着いてくることを了承した。

「でも、他の先生たちは忙しいから私たちだけで行くよ」

あくまでもそこだけは譲らないと顔に張り付け、渡辺は応接室を出た。

実たちは顔を見合わせ、これからが本番だ、と無言で交わして渡辺の後を追った。

檻の中の獣(3)

蛇口を捻ると、きゅつと息が詰まる音がして水が止まる。白い泡ぶくが別れを告げるように爆ぜ、排水溝に吸い込まれていく。洗剤の泡と別れてしまうことが悲しい訳じゃないけれど、シンクに映る自分の顔は奇妙に歪んでいた。

窓格子の先は夕暮れに塗れている。風はなく、時期に来る夕闇の予感が静かに波打つ。陽平は水仕事で冷えた手で頬に触れてみた。涙に濡れてはいないけれど、触れた個所に軽い痛みが奔る。

——これが、母を追い詰めたもの。そして、自分を苦しめているもの。

陽平は頬の痛みを噛み切るようにして耐え、目を閉じて下まぶたの痙攣を抑える。

薄明るく、夕焼けが染み入るまぶたの裏。遠くで電車の音がする。母もあの電車に乗って行ったのだろうか、と陽平は静かに電車の音を聴き入った。この街に通る唯一の路線。あまり利用したことはないけれど、あれに乗ればどこにでも行けるのだろう。

——母の元にも、いけるのだろう。

猛スピードで風を切って進む電車。クリーム色に臙脂のラインが入った車両。どんどんと小さくなる草ヶ丘の街。大きく開いた車窓には、景色が代わる代わる通過する。

田舎っぽい風景から、少しずつ高くなる建物へ。建物は頭を上げるほどの高層ビルに変わる。剣山のように並ぶビル群。その間を散策する人々。その中に、母の姿を見付ける。慌てて電車から降りようとしても、びっちりと閉じたドアは開いてくれない。窓越しに声

を張り上げて母のことを呼んでも、走行音にかき消されて声にもならない。電車の速度は増していく。母の姿はどうにも見えない。街並みは巻き戻っていく。ビルの高さが徐々に低くなる。川を渡り、牧歌的な風景が広がる。山を駆け上がるようにして建つ住宅。懐かしいのにとても悲しい景色を観て、涙があふれてくる。

死ぬ寸前の獣のような声を上げ、電車はやっと停車する。両端にスライドしたドアの先には――

真っ暗な地下壕への入り口。

はっとして、陽平は目を開けた。

思い出してしまった『あの出来事』から逃れるように頭を振る。振っても降っても、瞬きをしたときの瞬間的な暗闇の中に、それを垣間見てしまい消え去らない。濡れた手を拭き、調度品が乱雑する部屋を横切る。物置のような自室に入って勉強机の前に胡坐をかいて、目の前に置かれた大型のライトを注視した。

涼弥が家から持ってきたというキャンプ用の大型ライトを見つめながら、もう何度目だろうか、陽平の全身に悪寒が駆け回った。いくらそれを振り払おうとしても、頭にはあのときの恐ろしい記憶が浮上してくる。横隔膜が震え、吐息が奇妙なうねりとなって吐き出される。

玄関の戸口が叩かれる音で陽平は我に返った。

父親が返ってきたのかと時間を確認してみた。たしか今日は遅番であるはずなので帰宅にはまだ早い時間であると訝りながら、玄関へと赴き木戸を開いて来訪者に対応する。

「あ、大谷」

訪問してきたのは渡辺であつた。目をぱちくりとさせ、自分から訪れた癖に、陽平が現れてことに驚いているようであつた。

そう言えば、一昨日の夕方にも担任がやって来たこと思い出す。

あのときは、まだ頬の痛みがひどく布団で寝ていたため、仕事及早番であつた父親が対応したのが……聞こえてきたやり取りで判断すると、どうやら父は担任を言下に追い出したようであつた。それはそうだろう。あのときの自分の頬の青あざを見られたら、どれだけ愚鈍な輩でも暴力の二文字を発想する。それを学校の先生にでも見られでもしたら虐待を疑うに違いない。

そこで、陽平はとっさに頬の痣を手の平で隠した。薄くなったとはいえ、今の自分の頬にも暴力の痕跡が残っているのだ。

「お父さんは、いる？」

不躰に家の中をのぞき込みながら渡辺が言い、戸の陰で顔を隠して陽平は答える。

「今日は、帰りが遅いのでまだいいです。で、なんの用ですか？」

陽平には渡辺の来訪の意が掴めなかった。

——一昨日は学校のプリントを届けに来たようだったけど、昨日は来なかったよな。なのに今日はくるのか？

一昨日の担任は、自分に会おうと必死になっているようにも感じたが、一体どうしてだろうと陽平は思索に耽る。父から受けている暴力のことは、玲しか知らないはずである。いや、あのときの渡辺は何か目的があつて自分に会おうとしていたようにも思えた。

——もしかして、玲がバラしたのか？ 俺との約束を破って……

目元を僅かに引き攣らせた陽平に渡辺は言った。

「ちょっと話したいことがあるんだけど、家に上げさせてもらってもいいかな？」

相変わらず意図を理解できないまま、陽平は横にずれて渡辺を家に入れる。頬の痣については、ぶつけたとか適当に言い訳をすれば納得するだろうと思った。

そして、渡辺の後にアヒルの子のように続いて家に入ってきた玲たちを見て、陽平は虚を突かれて驚いた。

——こいつらも来ていたのか。

その中に涼弥がないことを不思議に思い、外にいるのかと戸口から身を乗り出してのぞいてみたが、そこには誰もいなかった。

ごたごたとした机の上を片付け、人数分の座布団を床へ投げた。肉薄な座布団の上に皆が着席したのを確認して、物珍しそうに内装を観察している渡辺に對面して陽平は座った。誰も口を切らなかつたので、仕方なく陽平が切り出すことにした。

「それで、話したいことってなんですか？」

渡辺の目が宙を舞う埃を追うように右往左往し、やがて陽平の頬もとで止まる。喉仏を一度上下させて恐る恐るといった体で口を開いた。

「大谷。君はお父さんから虐待を受けているのかい？」

開け放たれた窓から風が吹き込んで、襖が威嚇するような音を立てた。

眼球に力を入れて掠れていく視点を正し、陽平は渡辺の隣に畏まって座っている玲に視線を向ける。そこには、裏切りに対する糾弾の色が籠められていた。

目を合わせようとせずにつむいた玲を見て、玲が話してしまったのだと陽平は悟った。悟って、刹那の間だけ放心した。やがて陽平は殊勝な顔になるよう意識して渡辺に言った。

「先生。虐待というのは親から一方的な暴力を受けていることを言うんですか？」

渡辺は陽平の意図を図りかねるように、「そう、だけど……」とどう出ればいいのか分からないといった反応を示した。

「なら、俺は虐待なんか受けていませんよ」

渡辺が間拔けな声を出して驚き、隣の玲に「どういうこと？」と小声で尋ねた。顔を伏せた玲は、泣き笑いのような混沌とした表情で担任を見つめ返していた。

先ほどから浩次と実は、だんまりを決め込んでいるかのように口を開かなかったが、陽平の口述を聞いた彼らの顔に愁いの影が差した。

「たしかに、父から暴力に近いものを受けるときもあります。けど、俺はしつけの一環だと思っています」

担任は玲が嘘を吐いたのだと思ったのかもしれない。「そうか」と頷き、居住まいを正した。これ以上何か話があるのだろうかと言

平は、はてなと思う。まるでこれから話することが本題であるかのような、そのような雰囲気であった。

「市川のことはまだ知らないよね？」

陽平は目を剥く。この場に涼弥がないことを不思議には思っていたが、まさか、話の本題がそれであるとは思わなかったようだ。

「何か、あったんですか」

得体のしれない不安を覚えながら渡辺の返答を待った。

「行方不明なんだ」

脳天を揺さぶられ茫然とする陽平に渡辺が言い添える。

「大谷が学校を休んだ次の日から、市川が行方不明になってるんだ。――君たちが草ヶ丘特殊地下壕で遊んでいたことは、ぜんぶ内田たちから聞いた。もちろん、大谷と市川が企んでいた悪戯のこと、だ」

渡辺が何を喋っているのか、陽平はほとんど理解していなかった。ただ、突然目の前に張り出された行方不明の張り紙を唾然と眺めていた。

「それで、内田たちが発見したこと何だけど」

渡辺は乾いた唇を湿らす。

「秘密基地のシートに靴の泥が着いていたらしいんだ。彼らはそ

の跡が市川のものである可能性が高いと言っているんだ。それで、大谷はその跡に何か心当たりはあるかな？」

陽平は二三度瞬きをする。まぶたの裏に、暗闇で襲撃を受けたときの場景が投射され、総身を強張らせた。実が陽平のその身震いを見逃さなかった。

「何かあったんだね、大谷くん」

陽平は一度大きく息を吐いて、あの悪戯を決行した日のことを、洞窟に一人残った後のことを話した。

三日前、秘密基地で行った悪戯。

突然浩次が逃げ去ったことでネタばらしの機会を失った陽平は、一人洞窟に取り残された。予期していた以上の反応を示した浩次と実に、苦笑いを浮かべるしかなかった。今からのこのこと追っていても中途な結果に終わるだろう。そうなるくらいなら何か新しい、涼弥の度肝を抜くほどの悪戯を新たに企もうと陽平は思った。

——たとえば、このまま本当に行方を晦ませてしまおう、とか。

一瞬、とても魅力的な案に感じたけれど、それは現状から逃げているだけだと思い直す。陽平は海賊の人形と祠の間から身を出し、涼弥が置いて行ったライトのもとへ向かった。

暗闇に陽平だけがぽっかりと浮き上がる。

始めてここを訪れたときも一人だったな、としんみりする。突き上げるようなライトの明かりでまぶたが痛くなり、陽平はしゃがみ込んでライトの電源を落とした。

――訪れる暗黒。

無音。無明。無感動。この世界のすべてのしがらみから解放されたかのような安堵感が陽平を満たした。

陽平は大きく深呼吸をして肺に暗闇を入れ、息を止める。こうして闇と溶け合えば、耐えがたい思いがいくらか和らぐことを彼は知っていた。

音もなく、視界に映るものもない。感じるのは自分の存在と、自分を取り巻く大きな存在。この洞窟、この暗闇には、まるで母体の中に戻ったかのような安心感があった。暗闇に守られているかのように安心し、警戒を解くことができた。この場所があったからこそ、陽平は今まで父からの暴力に耐えてこられた。

そんな安心感に浸っていた矢先、胸がむかつくような不穏が彼を襲った。それはまるで、気味の悪い何者かが羊水に荒波を立て、安らかな時を妨害されたかのような気持ち悪さであった。

陽平がライトを点けようとする――

頭上に何か大きなものが覆いかぶさって来て、陽平は天と地が引っくり返ったかのように動転した。暗い深海に突き落され、上下左右も分からず、必死に海面を目指しているかのような途方もない絶望感。もがき、抗い。渾身の力を振り絞って、身体を捕捉していた渦潮から飛び出す。

体が軽くなり、ようやく冷静になった脳が危険信号を発した。

――な、何だよ、これっ?!

何が起こったのか確かめようとライトの電源に触れたとき、暗闇の奥で荒々しい猛獣の息遣いが耳に入った。今明かりを点けることは、自分の居場所を教えてしまうようなものだ、と彼は慌てて電源から指を離した。

四足の獣が這いずるような砂利を踏む音。地面を蹂躪し闊歩する気配から、父親の暴力を連想した。

今、安息のこの地を侵す何かが闇のどこかに潜んでいる。それは陽平から居場所を奪おうと、暗闇の中を這って彼の姿を探している。陽平は音を立てないように壁際に寄り、へばり付くように密着する。胸にあるライトを必死の思いで抱き、息を殺し、ただ暴力がすぎ去ることを祈った。

荒い吐息が何度も彼の傍を通過した。その度に陽平は心臓すら止める勢いで気配を殺し震えた。蠢く気配は内部を周回し、やがて出入り口へと通じる通路の方へ向かっていった。それは十五分ほどの出来事であったが、彼には、暴力に耐えてきた四年の日々と同等の長さを感じさせた。

突き付けられた拳銃から解放されたかのように陽平は脱力する。立ち上がろうとして、腰が抜けてしまったことに気が付き、壁にもたれるようにして立ち上がった。

先ほどのあれは一体何であったのか、と頭では考えようとするのだけれど、反して体中に古傷が疼くようなじくじくとした痛みが広がり、それをさせなかった。

気配が消えてからも、しばらくの間陽平は警戒してその場に留まった。ライトを点けようとはせず、息を潜め感覚を研ぎ澄ましていた。それが幸いした。

本棚の物影にうずくまっていると、もう一度何者かが息を切らせ駆け込んできた。

さっきのやつがまた戻ってきたんだ！ と陽平は怯えた。その気配は何かを探すかのようにシートに上がり、やがて出て行った。いつ、あの何かがまたやってくるとも分からなかったので、その後も陽平はその場から動こうとはしなかった。

彼が洞窟から抜け出したとき、辺りはもう完全な夜であった。真

っ暗な緑地を滑るようにして駆け抜け、陽平は家に帰った。

家に帰り、出迎えたのは泥酔した父だった。

父は帰りが遅かったことに激怒し、頬を殴った。

頬に熱がさした。どこか切ってしまったのか口の中に血の味が広がる。三和土に横倒しになり痛みにも悶える姿を見て、父もさすがにやりすぎたと思ったのか、真っ赤だった顔がみるみると青ざめていった。

結局、この人も不器用なのだと思っただ。

母が家を去ってから、何だかんだ父にも感じるものがあったのだろう。時間が経つにつれてあからさまな暴力の頻度は減った。それでも、稀に殴られるようなことはあったが、大体において自分が何か悪いことをしたときであつたので、本人はしつけのつもりだったのかもしれない。父も父なりに後悔しているのだろう。口下手な父は、言葉で感情を表現することが苦手なのだ。そう思ってやらなければ、彼はいつまでも浮かばれない。

玲たちは目を瞬かせながら聞き入り、渡辺も息を飲んでいた。

「そいつが市川を――」

浩次がその次の言葉を継ぐことはなかった。

「それで、大谷は一昨日の夜、秘密基地を訪れたりしたかな？」

陽平は首をぶるぶると横に振る。

涼弥の行方不明も衝撃的であつたが、自分を襲ったあの何かが涼弥を襲ったのかと思うと、陽平は居た堪れなくなり今すぐ家を飛び出して涼弥を探しに行きたい気持ちに駆られた。腰を浮かしかけた陽平の機先を制するように、「あと、とても大事な何だけど」

と渡辺が殊更大事そうに口を開いた。

「大谷はその襲ってきた人物に心当たりはあるかな？」

「……ない、です」

暗く沈鬱な錘を頭の上に乗せているかのような重圧が、陽平の全身に押し掛かって身も心も遙か地中へと埋没させた。

日がさらに西へと傾き、室内にいる五人の影が伸びる。気温が下がったのか、実が両肘を抱えて寒そうに手で擦っていたのを見て、陽平は台所の小窓を閉めに重い体を持ち上げた。

冷気が窓格子の間を抜け、部屋に這い入ろうとしているように冷え切った風を吹き込ませている。陽平はその風に小さなため息を紛れさせる。

——涼弥が行方不明になっているなんて、思いもよらなかった。

しかも自分を急襲した何ものかに危害を加えられている可能性が濃厚であるという、追い打ちをかけるかのように絶望的な展開。あの生き物の本能に従順で野性的な殺意を想起して、彼は寒気に体を震わせた。

くしゅん、と誰かが子どものようなクシャミをした。

窓を閉めて振り返ると、クシャミの主は玲だったらしく恥ずかしそうに鼻の頭を擦っていた。

陽平は座布団の上に戻り、まだ顔を合せようとしないう玲を見つめた。

実も浩次も重い表情だった。もうこれ以上の進捗はなさそうだと渡辺が腰を上げた。玄関先に立った渡辺が室内にいる陽平に言った。

「市川は、その変質者に襲われた可能性がある」と学校に進言して

おくよ」

陽平は頷き、「よろしくお願いします」と口にする。

「任せておきなさい」

渡辺はそう言い、玲たちを連れて家を後にしようとした去り際、
「市川のライトが何か証拠になるかもしれない」と言い出した。

「警察に連絡することになると思うから、あのライトは証拠として学校側で預かっておくよ」

陽平は自室に取って返し、涼弥のライトを渡辺に託した。

さよならの暗闇（1）

残照が映え紫色に染め上げられた雲は、上空を流れて給水塔の先へと解けていく。黄昏に塗れた夕景には昼の名残が幽かに観られているが、それもやがては夜に変わっていく。おんぼろアパートを後にした玲たちの足取りは、その昼夜の移ろいのように緩やかであり、どこか切迫した重さもあった。陽平の話から涼弥の失踪に関与しているらしき謎の人物の存在は明らかになったが、依然として暗礁に乗り上げていることには変わりなく、むしろ、真相はより深潭に近付いてしまったことが、足に重くまとわりついでいるのだろう。

生温い横殴りの風が吹き乱れ、玲の髪をかき乱す。

涼弥と陽平の家にプリントを届けに行った日にもこのような風が吹いていた。思えば、あれが涼弥と会った最後のときだった。遠くの空に漂っていた黒い雲は、まさしく暗雲だったのだと玲は髪を直しながら感傷に浸る。

あの雲さえ来なければ涼弥がいなくなることはなかったのではな
いか、と雲に責任を転嫁してみるも、それは気休めにもならなかった。
渡辺もあの日を思い出しているのか、ばたばたと揺れるシャツを鬱
陶しそうにしながら、遠くの夕空を遠視していた。

誰も口を開くことなく自然公園の付近まで漫ろに歩いた。公園の
入り口を通過するかしらないというときに、前を歩いていた渡辺がふ
と足を止めた。

「確か、この近くにあるんだよね？」

渡辺は地下壕のことを言っているらしく、玲は首を縦に落とす。
渡辺は何か考えるように細長い顎に手を当てて言った。

「これから行ってみたいんだけど、案内してもらえるかな」

玲たちは顔を見合わせて戸惑う。

「もう、暗いですよ」

「私が一緒に行くから大丈夫だよ。帰りが遅くなるようだったら、私から親御さんに遅くなった理由を説明するよ」

もう一度顔を寄せ、三人は相談を交わす。

「どうする？」

「僕、もう暗いから帰りたいな」

「でも、あいつ行く気まんまんだぞ」

渡辺をうかがい見ると飄然とした顔で玲たちを見つめ返してきた。

「まあ、ああ言ってることだし」と玲たちは渋々と渡辺を案内することにした。

近いといっても、ここから緑地へと飛び降りる訳にもいかず、比較的緑地へと入りやすいところまで行かなければならなかった。五分ほど歩いて金網を越え、急ぎ足で壕まで向かったため、たどり着くのにそれほどの時間は必要なかった。

暗く湿っぽい洞窟を渡辺がのぞき込む。普段の気弱さから入るのに気後れすると思ったけれど、陽平から預かったライトを点け、意外にも揚々として中に進んで行った。もしかして、初めから帰りにここを訪れることを予定していたのかもしれない、と玲は勘繰りながら彼の後に続いた。

渡辺の明かりを先頭にして、浩次が口頭で道順を伝えながら水場までたどり着く。ライトを玲に預けた渡辺は、「すごいねえ、ここ」と内部を見回した。

「あ、これが君たちの言ってた足跡？」

渡辺は件の泥の跡を屈み込んでのぞき見る。我が物顔で中を歩き回る渡辺に、玲は自分の部屋を勝手に荒らされているような不快感を覚え、居心地悪くしながら無遠慮に動き回る担任を目で追った。ひとしきり内観を見終えた渡辺は、壁に掲げられた絵を見て「おお！ これ誰の？」とこちらを振り向いた。童心に戻ったかのような渡辺の姿に実は失笑して、「僕のです」と返す。

「へー、すごいな」

興味を示した渡辺が絵に触れようとするのを見て、実は慌てて止めに走った。

玲は浩次とシートに上がり、ライトを定位置に置いて座った。ややあって、浩次が声を潜めて「市川、見つかるかな」と玲に耳打ちをする。

「分からない——けど、見つけなければならないだろう」

「そうだな」と浩次の返答は弱弱しく、どうやら陽平が言っていた謎の人物の登場により、涼弥の搜索を半ば諦め始めてしまっているのかもしれない。本人は無自覚なのだろうが、動作や言動の端々からそう感じられた。

「まだこの洞窟のどこかに、涼弥の手掛かりがあるかもしれない」

浩次の意気を吹き返させるため、玲はさらに手掛かりを搜索することを提案した。浩次はやはり力の抜けた語気で応答しただけで、それほど士気が向上したようには思えなかった。

絵を前に何やら話している実と渡辺を一度見て、玲は頭の中で状況の整理をすることにした。

——涼弥が行方不明になった。

彼は、一昨日の夜六時から八時の間に家を出、この秘密基地に向かった。そこから彼は行方不明になった。

この推理の根拠は、涼弥の両親の証言と玲自身が家に到着したときの時刻を掛け合わせたものである。訪れたのが秘密基地だという根拠は、シートに付いていた靴の泥だけの心許ないものであった。この泥に関しては他のものの可能性も、もちろんある。けれど、それを言い始めたらあらゆる可能性が生まれてしまうので、多少強引でも玲はこの推理を進めることにした。

涼弥と陽平が、実と浩次を驚かせる悪戯を決行した。玲はその場になかったので、ここからは聞き及んだ話を総合させたものである。

——浩次が逃げ出してしまい、それを涼弥と実が追った。そのため陽平は一人残された。陽平がライトの明かりを消したとき、何ものが彼を襲った。

陽平が襲撃されたことと、涼弥が失踪したことは、二日の内に連続して起こったことである。そのため、この二つを関連づけて考えることは至極当然であるだろう。

陽平を襲ったその何ものかが、夜に秘密基地を訪れた涼弥を襲撃した。この結論に至っても、それほど問題はないはずだ。

玲は口内を甘噛みする。

——その人物とは、一体誰なのだろう？ ただの変質者という可能性がもっとも高いのだろうか？

経時的この事件を考えると、陽平が先にその人物に襲われた訳だが、そうなるとその人物は、涼弥と陽平が水場に落ちたフリをする悪戯を執行している間、ずっとこの暗闇に潜んでいたことになる。

意固地にならずさっさと謝って皆と一緒にその現場にいれば、何事も起こらなかったかもしれないと、玲は悔やんだ。

——そうだ、陽平にまだちゃんと謝っていない。それに、あの約束のこともちゃんとけじめをつけないと……

そう心に誓いを立てながら、玲は再び推理に没頭する。

陽平の証言によると、彼を襲った人物は一度外に出てから舞い戻って来たようだ。そう言えば、自分もあの日、陽平たちに謝ろうとこの場に訪れていた。そのことを思い出し、再び戻って来たその人物とは、自分だったのではないかと玲は思った。

——そうか、あるとき陽平は基地にいたのか、まったく気が付かなかったな。

その人物は、その次の日の夜。雨が降りしきる中、またしても壕に潜んでいた。

そいつは日常的にここを訪れていたのだろうか。それとも何か用事があったてここに来ていたのか。いずれにしても、運悪く涼弥が出くわして急襲を受けた。

「あ、そうだ——」

浩次が何かを思い出したようで、玲は思考を中断して浩次の話に耳を傾ける。

「大谷が作った地図があるぞ。それを見ながら市川の手掛かりを探していけば効率がいいだろ」

浩次は腰を上げ、海賊の人形の元へと向かった。玲もそれに続く。人形が抱えている宝箱を浩次が開け、中から筒状に丸まった用紙を取り出した。

「内田が怒って帰った後に、市川がここへしまったんだよ」

言いながら丸まった用紙を解き、前に広げた。

地下壕の構造の絵は丁寧な線で描かれていて、陽平の几帳面な一面が見え隠れしていた。玲は描かれた地図と自分の頭に記憶している地図とを照らし合わせ、まだ行ったことのない個所があるか探した。

入り口から一本道が続き、途中で左右に通路が分かれる。左をたどると大きな空間が描かれていて、楕円の中に『水場』と書いてある。分岐路に戻って今度は右側に進むと、細かく枝分かれした短い道が四方八方に延び、最終的にはすべて行き止まりとなっていた。

自分の知らない秘密の通路のようなものがなく、玲は少しがっかりして地図から目を離れたそのとき、地図の端の丸く癖付いた部分に何か引っ掛つているのを見つけ、それを摘み上げた。

「何だ、それ？」

浩次も枝切れのようなそれを矯めつ眇めつ眺めた。

玲の脳みそでは、まるで歯車の間に挟まっていた歯止めが取り除かれて動き出したかのように、頭の端にあった数々の场景と、今まで感じていた些細な疑問が徐々に噛み合っていく不思議な挙動が始まっていた。突如動き出した脳髓の歯車に戸惑いながらも、玲はその駆動に思考をゆだねた。

——謎の人物が涼弥を襲った日、どうしてそいつはこの場を訪れたのだろう。日常的に訪れていた、とも考えられるが、雨の夜にぬかるんだ緑地を抜けてわざわざ来るものだろうか？ 来るかもしれない。事実、涼弥も何らかの理由があって訪れてしまったのだから。

仮に、だ。

その人物は何か目的があってここを訪れていたのだとしたら。

それは、ぬかるんだ緑地を抜ける苦勞をしてまで、来なければならなかった早急な事態だったのだとしたら——

涼弥に出くわした相手方も、相当びっくりしたのではないだろうか。気が動転して涼弥を襲った。涼弥はそのとき『これ』をこの宝箱に隠した。それ以外で、これがここにある説明がつかない。

玲は指先のその物体が何であるのか理解する。

——涼弥は、ボクたちが『これ』を宝箱の中から見つけてくれることを期待して隠したんだ。

この『塗装の剥げたネクタイピン』を……！

さよならの暗闇（1）（後書き）

そろそろ終盤ですね。

さよならの暗闇（2）

「実っ！」

玲は叫びながら、猫のような俊敏さで背後へと振り返った。壁に飾られた砂絵の前に、渡辺がにこやかに立っていた。

渡辺の顔はライトに照らされて陰影をつけ、その奥に潜む悪辣とした表情を映し出しているかのようであった。その胸元には、明かりを反射した真新しいネクタイピンが煌めいていた。

玲の目が、渡辺の脇に抱え込まれた実を捉える。実の手足は骨が抜かれたかのように身動き一つなく、物干し竿に干された布団のようにはだらりと弛緩していた。

あはは、と今にも声を上げて笑い出しそうな表情のまま、渡辺の表情は凍りついていた。それが偏執に歪んだ異常者のように玲の瞳には映った。

玲は摘まんでいる塗装の剥げたネクタイピンに目をやる。

——いつだ。いつから渡辺は新しいピンに代えたッ？！

玲は必死に歯車を回して思い出す。

いつも皺くちゃで、だらしのない服装だった渡辺。その胸元には、ずっと昔から使用されていたと思われるネクタイピン。ピンは塗装が剥げ、光を返す力もないほど錆びたものであった。彼のその恰好が変わったことはなかったはずである。でも、ネクタイピンほどのものであったら、変わっていたとしても気が付かなかっただろう。

歯車の動きが滞り始める。ガチガチ、と機械的な音を擦り合わせ、駆動を止めようとする。玲はその稼働を止めないよう、呼吸を繰り返す。

返し無我夢中で頭に血を入れた。

そして、思い出した。

『あれ、鯉のぼりみたいだな』

——あのときか……！

たしか、陽平が欠席したためプリントを家まで届けにいった日のことだ。

強い風が吹いたとき渡辺のネクタイは、まるで鯉のぼりが風に煽られてはためいているかのように棚引いていた。ピンを着けていたのなら、絶対にそうはならない！

——ということは、あのとき渡辺はネクタイをピンで止めていなかった！

それが潤滑油となり、歯車は風を受けた風車のように回転する。

——あの日は、陽平が襲われた次の日のことだった。これはどういうことだろう？

渡辺は、陽平を襲ったときにこのピンを落とした。

そのことに渡辺が気付いたのは、多分、その次の日、つまり陽平が学校を休んだ最初の日、そして、陽平の家にプリントを届けに行った日。

渡辺は陽平の家を後にしてから、涼弥とボクが先に帰ったのを見計らい秘密基地で探していたのだ。夜になってもピンは見つからず、諦めかけたとき、突然、涼弥が地下壕を訪れた。そして、涼弥はピンを渡辺より先に手に取った！

玲がそこまで推理したのは、ほんの一瞬のことであった。
なので、玲が実の名を叫び、そのただならぬ様子に浩次が気付いて振り返るまでには、それほどの時間はかかっていない。

振り返った浩次は、渡辺の腕の中にいる人形のような実を発見し――叫んだ。

耳を劈くような声が反響し、何重にもなって鼓膜を叩く。

渡辺は眉をしかめ、「うるさいなあ」と呟いて、ぞんざいな手付きで実を地面に放った。実の小さな体が弾み、地面に沈むようにして動かなくなった。

飛び出そうと前のめりになった浩次を、とっさに玲は制した。全身から興奮を噴出する浩次に、言い聞かせるように区切りながら言った。

「落ち着いて、よく、見て」

うつ伏せに地面に横たわった実の背中が小さく上下していた。意識がないだけで、まだ存命はしている。玲は声を落として渡辺に言う。

「先生が、陽平と涼弥を襲ったんですか？」

「襲ったとかいうと何だか私に変態みたいじゃないか……」と渡辺は独りごちる。

「大谷には逃げられちゃったから『未遂』だよね」

「未遂って――」玲はその次に続く言葉を口にできなかった。

「変な想像はしないでくれよ。殺人未遂だよ、殺人未遂」

花でも咲いたかのように渡辺の白い顔が笑った。

未遂、殺人未遂。

陽平は未遂。

涼弥は――

「あああああああああああ！」

制していた玲の手を跳ね除け、浩次が絶叫しながら渡辺に突進していく。

玲は心臓を握り潰されたかのように身動きができなかった。呆気なく渡辺に殴り倒される浩次を眺めることしかできなかった。

浩次は実のすぐ横に大の字に倒れ、奇妙な咳をした。その脇腹を渡辺が爪先で蹴り上げると、浩次は微かな呻き声を上げ動かなくなった。

地面に横たえた浩次と実を満足そうに見下げていた渡辺の白い顔が、ぐるりと玲へと向く。

「どうして気が付いたの？」

声はいつもの軟弱な調子で、それがより一層玲を慄然とさせた。玲の返事を聞く前に、渡辺は震える玲の指先にあった自分のネクタイピンを見付けた。

「あ、それどこにあった？　ずっと探していたんだ」

そう言って、皺くちやのシャツから伸びた手を前に突き出した。

「それ、大事なものなんだ。早く返しなさい」

玲は痙攣する肺と緊張しきった喉から、やっとの思いで声を捻り出す。

「りよ、涼弥は……ど、どこにいるんですか？」

——何で敬語？ どうしてそんなことを聞くの？

どこかにいる冷静な自分が、口から出てきた言葉を聞いて失笑した。

「市川は死んだよ——獣が殺した。だから」

もう君とは会えないんだよ、教職者らしく諭すようにそう口にした。

「洞窟にいた私たちを、ずっと監視していたんですか？」

玲は自分の口が勝手に言葉を吐き出したことに驚く。蛇に睨まれた蛙のような心境であったが、存外、内心は冷静なのかもしれない。

「そうだよ。君たちが悪いことをしないように、昇降口で君たちが地下壕の話をしていたのを職員室で聞いた日から、あの祠の裏のスペースでずっと監視していたんだ。君たちがまた何か悪いことでもしたら、私も叱られてしまうからね」

地下壕の陰惨な空間が、その行動の異常性をより露出させた。

玲は祠の方へと視線を投げる。海賊の人形が邪魔をしているが、たしかにあの暗がりでは、誰かが奥に潜んでいても分からないだろう。最初からいたということは、地下壕へ行く合図を決めたあのと

きも、渡辺は祠の裏に潜んでいたのだろう。

——ボクたちが家に懐中電灯を取りに戻っている間に、渡辺はあそこに忍び込んでいたのか。

「しかし、この場所は本当にすごいね」

渡辺は手を突き出し、玲に向かい歩きながら続ける。

「いればいるほど、安心できるっていうのかな。体の中に『癒し』が沁み込んでくるような感じがして、とてもリラックスできるよね」

そう言う渡辺の顔は、先ほどからまるで変化なく、とても癒しを感じているようには見えなかった。玲は寄ってくる渡辺から逃げようと後退りしながらも、心では渡辺のその意見に共感していた。恐らく、陽平も実も浩次も涼弥も——口には出さなかったがこの洞窟の魔力に引きつけられていたのだと思う。

渡辺との距離がじりじりと狭まってゆく。それでも冷静な人格は、怯むことなく口を開く。

「どうして涼弥を殺したんですか？」

渡辺は興奮しているのか自慢話でもするかのように、いつもより言葉数多く話し始めた。

「今更こんなことを言っても信じて貰えないと思うけれど、本当に突発的な出来事だったんだよ。大谷を襲ったときもそうだったんだ。何の明かりもない暗い闇の中に身を置いたとき、胸の底にあったものが発作的に暴れ出したんだ。暴れ出して、それを止めること

ができなかった。市川を殺したあと、私なりに考えてみたんだ」

渡辺の口調に高揚した抑揚が少しずつ混じっていく。

「ネットとか、相手の顔が見られない状況に置かれたときの人間ってさ、野生に還るんだよ。そう、獣になるんだ！ 理性を失くして、ちょっとしたでも気に食わない奴がいたら平気で悪口を吐いたり、もっとひどい罵詈雑言を平然と口にするだろ？ ネットならそれだけで済むんだけれど――」

もし、憎い相手に顔を見られない、なおかつ、自分も相手の顔を見られない。そんな状況がネット以外の現実世界にあったら、人はその憎い相手を平気の平左で殺してしまうんだよ、内田」

しかつめらしく渡辺は玲へと投げかけた。

「それは、先生は私たちのことが憎かったということですか？」

玲の問いかけに、渡辺の動きが止まった。まるで、今初めて指摘されてそれに思い当たったかのようにであった。

「そう、だね。きっと私は君たちのことが憎かったんだ」

渡辺は前に突き出していた腕を下げて足を止め、顎を引いて地面に語りかけるかのように呟く。

「君たち五人が揃ったクラスを受け持つと決められたときは、それほど悲観してはいなかったんだ。一年我慢すれば、君たちは卒業して行く訳だしね。でも、君たちが悪行をする度に、他の先生から嫌味を言われたりするのが、どうしても耐えられなかった。お前たちが身勝手に、自分が楽をするために、あのクラスを押し付けてき

たんだろ！　って何度も叫びたくなったよ。けど、大した経歴のないペーペーの私がそんなこと言ったら、途端にどこか遠くの学校に飛ばされてしまっただろうね。それは嫌だったんだ。何だかんだ言いながらも、私はこの街が、あの学校が好きだったんだから」

「でも、私たちのことは憎かったんですよね？」

玲は卑下するような笑みを浮かべ、渡辺を挑発するように言った。

「そう、君たちさえいなければ、私はこの街を、学校を心の底から愛せていたんだ。君たちさえいなければ、私はもっと楽しい日々を送れていたんだ」

渡辺の口から齒軋りの音がこぼれた。胸に抱えていた憤懣を口に出せたことへの快感を噛み締めているのか、自分の犯してしまった罪への後悔を噛み締めているのか、そのどちらかだろうと玲は推察した。

「内田なら、私が市川を殺した理由を分かってくれるだろう？」

「たしかに、この場所で憎い相手と対面したら、そうするのもかもしれませんか」

冷静な人格があっさりと肯定したのを聞いて、渡辺の表情が若干緩んだ。

後退する玲の腿の裏が固いソファーに衝突し、放り出されたかのようにソファーへと着席した。逃げ場を失ったはずであるのに、玲は悄然とソファーに腰をかけていた。

「先生は、陽平が虐待を受けていたことを本当に知っていたんですか？」

「もちろん、そんなこと知らなかったよ」

「そうだったのですか、私は勘違いをしてしまったのですね」

そのことに悔しさを滲ませることなく玲は続ける。

「先生と陽平の家にプリントを届けに行った際、先生は必死に陽平の父親に喰らいついていたので、虐待について知っていたのだと思っしまいましたよ。それを見て私は、先生が陽平を救ってくれるかも、と変な期待をしてしまいました」

「内田たちから虐待について聞かされたときは、驚いたよ。あの馬鹿みたいに元気な大谷が裏ではそんな事態になっていたとはね。人は見かけにはよらないのだと良い勉強になった」

渡辺はソファアの玲に向かって前進を再開した。

「それでさ、大谷は本当に虐待を受けていたのか？ あいつ否定しただろ、『俺はしつけの一環だと思っています』とか言ってる」

冷静な態度を維持していた玲の視線が、初めて動揺の色を見せた。回答を示さない玲に渡辺は着々と接近していく。

「先生は、陽平に顔を見られていたのかどうかが気になっていたのですね」

出し抜けに話題を転換した玲のことを疑問とも思わない様子で、渡辺は答える。

「そう。だから私も、あの日、一緒にプリントを届けに行ったんだ。そして、大谷の様子をうかがおうと思ったんだよ。もし、襲ったときに顔を見られていたのなら、大谷は何らかの反応を示すと思ったからね」

渡辺は大きくため息を吐いた。

「あのときは、虐待について知らなかったから、生徒も一緒にいた方が怪しまれないと思っていただけだね……まさか、そんな面倒のくさい事態になっていたとはね。本当に焦ったよ」

——あのときの陽平の父親への食らい付き方は、今後の進退を思っていることだったか。

「それに市川の件で中々職員室を抜け出せなくて、昨日は大谷のそこへ行けなかったし。だから、今日の機会に一人で大谷の家に行こうと思ったのに、君たちがなかなか折れないから困ったよ。特に明石。あいつは、私が虐待のことを知ったふうに見抜いていたようだったね。まあ、どうして知ったかぶりをしているのかは取り違えていたみたいだけど……それでも、本当に困った。他の先生でも呼ばれたものなら、余計に場が混乱して直接大谷に会えなくなるかもしれないしね。だから、妥協して君たちと行くことにしたんだ」

「子どもなら誤魔化せると思ったんですね」

「そう。所詮子どもだしね。危険そうだったら力づくでどうにかする」

「まさしく今がその状況ですね」

「そう。まさしく今がその状況」

渡辺の骨ばった手が玲の首へと伸びた――

刹那。

玲の視界から渡辺が消えた。

「玲！」

名前を呼ばれた方へ向くと、そこには息を切らせた陽平がいた。呻き声が聞こえ、そちらへと顔を返すと、ひくひくと痙攣するようにして渡辺が倒れていた。どうやら駆け付けた陽平が玲を救おうとして、渡辺を突き飛ばしたようであった。

地面で悶える渡辺のすぐ傍にある本棚の角が不自然な形に歪んでおり、陽平が突撃した勢いのまま、彼の頭部はその角に激突したのだろう。

「あ、やば。もしかしてあれって、渡辺？」

陽平は誰とも分からず突き飛ばしたようだった。自分が急襲した人物が担任の渡辺だと認知したようで大いに慌てた。

「ど、どうしてここに？」

玲の口調は、先ほどまで渡辺と対峙していたときのような冷徹なものではなくなっていた。窮地を救われたことよりも、陽平の登場に心底驚いているようであった。

「いや、玲が合図出したから」

「合図？　いつ？」と首を傾げる玲に陽平は言う。

「お前、俺の家でクシャミして鼻の頭擦ったじゃん。あれ合図だろ？」

玲は陽平の家でしたクシャミのことを思い出した。あれは素のクシャミをして鼻を擦っただけだったようで、生理現象を指摘された玲は頬をほんのりと紅色に染め、緊迫したこの場にそぐわない反応を呈した。

「え、というか、どういう状況なのこれ？」

陽平は倒れていた実と浩次を発見して、現状の理解に苦しんでいる様子で玲のもとへとやって来る。玲は呼吸を整えソファから立ち上がった。

「渡辺が、涼弥を――」

それだけで、陽平はすべて理解したようであった。驚かないところを見るに、彼にも渡辺が元凶であると納得しうる推測が既にあったのだろう。たとえ、玲の言葉が間違ったものであっても、今の陽平からは無条件で妄信するかのような従順ささえうかがうことができた。

陽平は渡辺の動きを見張るように目を逸らさず玲に尋ねる。

「浩次と実は平気なのか？」

薄暗くて不明瞭だが、浩次の厚い胸も上下しているのを確認し、「たぶん、気絶しているだけ」と玲は返したけれど、こう離れていては二人の詳細な状態が分からないので安穩としてもいられないだろう。玲は陽平の横に立ち、頭を押さえて悶絶している渡辺を見下ろして言う。

「先生、涼弥はどうしたんですか？」

玲は『遺体』という言葉避けた。犯人である渡辺が殺したといっている以上、もう涼弥が帰ってくることはないのだろう。しかし、玲はその単語を口にできなかった。

『また、五人で笑おう』

浩次のあの言葉が玲の頭の中で繰り返された。玲はまだそれが実現すると信じていた。

「沈……め、た」

渡辺が息苦しそうに、しかしどこか嬉しそうにそう漏らした。後頭部に添えている手の間から、赤黒いどろどろとした液体が止めどなく零れ出ている。

玲は口の両端を上げて声を出さずに笑いながら、虫の息の渡辺に尋ねた。

「沈めたって、どこにですか？」

「そ……この、みず」

途切れ途切れに息を吐きながら、渡辺は震える指先で闇の奥にまで広がる水面を指した。緑地から拾ってきた石か何かを重しにして、涼弥を地下水の底へと沈めただろう。玲と陽平は茫漠とした地下水を静々と眺めて言葉を交わす。

「あそこにいるんだな」

「そうみたいだね」

そう返し、玲はシートを中心に置かれたライトにまで、ゆっくりと時間をかけて歩み寄った。その玲を見る陽平の瞳は、陶醉しているかのように虚ろであった。

二人は二人にしか分からない合図のように頷きあう。
玲が躊躇いもなくライトの電源を落とし――

世界は溶暗して親しんだ闇に包まれた。

昏黒を鍋で煮込んだかのような闇に、渡辺の痛みに喘ぐ声だけが聞こえた。

玲は顔の前にひらひらと手をかざす。

もちろん、見えるはずもない。

その手を口元へと持って行き、鋭く歪んだ唇を艶めかしい手付きで撫でた。

腹の底から、じくり、と湧き上がる疼きのような感覚を吐息とともに吐き出す。

どこに誰かがいるかも分からない暗闇に、目はその能力を発揮せず衰えて鈍る。その代行として、耳が、鼻が、肌が、剥き出しの内臓のように鋭敏になり、結果として目に見えないものまでも感じ取れるようになる。いないはずの『もの』をこの場に想像することができる。

それは、涼弥が語ったあの吹雪の小屋での話のように――四方形の部屋を、四人だけでも回れるようにするために、新たな『一人』の存在をこの場所に追加することができる。

玲は歩いて陽平の隣に立った。

倒れていた実と浩次が、むくりと地面から起き上がり苦笑いを浮かべながら、二人の元へとやって来る。

そして――

『さて、あの人どうしようかね、まったく』

涼弥が口元を釣り上げ、にやり、と卑しい笑みをして闇の底から現れた。

暗闇が体中の穴という穴から体内にどろどろと流れ込む。腹の底に沈殿し堆積したそれを、目を覚ました獣が鋭い牙を使って食らうのを見つめながら、渡辺が述べていた殺人の動機は本物だったのだと玲は思った。

暗闇で、憎い相手と、対面したら、人は、そいつを、殺す。

「涼弥はどうしてえんだ？」

玲の耳のすぐ傍で陽平がそう涼弥に尋ねた。

『俺か？　そうだなー、こいつに殴られたところ、スゲー痛かったしなあ』

涼弥は何か良い案がないか思索し、前髪をふうと吹き上げた。

『お前と同じ目に合わせればよくないか』

浩次がそう進言すると、

『あ、それいいね！ 僕もそれが良いと思う！』

実が賛意を表して、玲の顔色をうかがった。

「それでいいよ」

玲はいつも通り、一步下がって皆の意見に賛同する。

『じゃ、そうするか。……一応、決を取ろうと思う。賛成の人は手を上に』

五本の手が真っ暗闇に浮き上がる。

それはあの日のロウソクのように、ゆらりゆらりと揺れては、闇に消えていった。

皆が地面にひれ伏し、もうほとんど動かなくなっている渡辺を見つめた。

『じゃ、先生。そう言うことになったから』

——バイバイ。

さよならの暗闇（2）（後書き）

次で終わりです。

日ノ音カキケス門ノ音

頬の腫れも引き、陽平は二日ぶりに登校した。

昨日の気怠さが抜けきっていない体で、だらだらと伸び上る坂道を上がるのには骨が折れたのか、彼は足を引きずるようにして校門へと続く長い階段を上がる。最後の一段を踏み、彼は少しだけ背後へと目を流す。

目端に映った街並みは、爽やかすぎるほどに初夏の青が落ちていた。

陽平は景色に背を向け、校門をくぐる。横長の校庭を過ぎ、昇降口で靴を履き替える。廊下を渡り、階段を上がる。上階から下りてきたボールを持った生徒たちと擦れ違い、教室へと向かう。

教室に入り、陽平はどっかりと自分の席に腰を据えた。

実、涼弥、玲、浩次。陽平は空席となった前の四つの席をぼんやりと眺めて、冷たい北風が吹いているような虚しさを胸の内に感じていた。

ホームルームが始まるいつもの時間より少し早めに、大仏を思わせる老教師先生が教室にやってきた。教壇に立った彼の顔には、まったくといっていいほど血の気がなかった。

「今朝は、私が渡辺先生の代わりにホームルームをやります」

そう告げて、ホームルームを始めた。

簡単な連絡の後に、浩次と実が怪我で入院してしばらく欠席することと、今日の授業は毎時間違う先生が担当することを矢継ぎ早に述べ、教師は教室を出て行った。

生徒たちはどこか落ち着きがなく、教室の所々から陽平以外の四人が休んでいることや、渡辺がいないことを好き勝手に噂をしてい

た。

何人かの好奇心旺盛なクラスメイトが様々な憶測を持って陽平へと直々に尋ねてきたが、彼は曖昧な返事でそれらすべてをかわした。

靄がかかったかのようなはつきりしない頭で授業を聞いていると、いつの間にかその日の授業はすべて終わっていた。一人残った教室には焼けるような夕日が射し込んでいて、黒板の上にある時計は下校時刻をとうに過ぎていた。陽平は血のように赤い夕焼けに誘われ、机と椅子を避けながら窓辺へと歩んだ。

真赤な空を見上げ、膨れ上がった水風船を針で突いたかのように溢れ出してきた鮮血を思い出し、陽平の体中が打ち震えた。

とくん――。

胸の心臓が小さく唸った。

その唸りは次第に叫びに変わる。叫びは悲鳴に変わり、最後には獣の咆哮になる。

校庭にサッカーボールを追いかけてまわしている幾人かの生徒が見えた。

どの子も嬉しそうに、何の悩みもなさそうに、無事に、無邪気に丸い球を追っていた。

未来の希望をビー玉に託したあの日の自分のように、彼らは校庭を走り回っていた。

「――陽平」

急な呼び掛けに仰天して、陽平は背後へと振り返えた。
ドアの向こうに玲を見付け、小さく吐息をもらす。

「何だ、来てたのかよ」

「うん、職員室でずっと尋問を受けてた。やっと終わったと思ったら、その後は保健室に監禁されて困った」

その対応をみる限り、学校側も渡辺の行方が分からなくなっていることは存知のようであった。最後の目撃者である浩次と実が入院していることから鑑みるに、玲たちが関係していると嫌疑をかけられても仕方ないのだろう。

——明日くらいには自分の番がくるかもしれないな。

言い訳を考えおかないといけないのか、と苦手な分野に陽平は頭を悩ませる。

玲は扉の向こうから上半身だけをのぞかせて、なかなか教室の中に入ってこようとしなかった。それに気付いた陽平が呼びかける。

「どうしたんだよ、玲？ 入って来ればいいじゃねえか」

「う、うん——」と、玲は歩きなれていない新品のスニーカーを履いたかのように、ぎこちない動きで教室に入って来た。

陽平は玲の顔から視線を徐々に落としていき——

ひらひらと揺れるスカートを見て、目を見開いた。

玲はその視線に気付いているようで、恥ずかしそうにしながら窓辺の陽平の隣に並んだ。陽平がスカートからのぞく小さな膝小僧をぼんやりと眺めていると、玲は膝を隠そうとスカートの裾を引っ張った。

「もう、いいのか？」

陽平が尋ね、玲は答える。

「陽平との約束を破っちゃったから……」

その言葉遣いは前の気取ったものから、大人しい女の子のものに戻っていた。

——そう言えば、あの日も今みたいな夕暮れの教室だったな。

陽平は大切な記憶を宝物のように取り出して、再生させる。

今とは逆に、玲が独りで夕方の教室にいた。

陽平は母との記憶を余すことなく、写真のようにいつでも思い起こすことができた。だから、独りで読書に耽っていたその子が、ビー玉を坂から転がしたあの日にもいた女の子であったことにすぐに気が付いたのと同時に、その子に対するある噂話を思い出した。

『あの子の両親って、悪いことをして捕まっちゃたんだって。だから、お父さんもお母さんもないんだって』

そのとき、陽平の胸には何だかよく分からない感情が奔った。今彼女に話しかけなければいけない、とその何かが堰き立てた。

陽平自身は気付いていなかったが、彼は玲の所作から母の面影を投影していたのだった。その根幹には、ビー玉を転がしたあの想い出の中に玲がいたことが関連し合い印象付けされ、深層下で玲と母を混同したことによるものであるのだが、いずれにせよ、そのときの陽平は玲にただならぬ好意を抱いたのであった。

高鳴る鼓動を鎮めながら、その子に声をかけたところまでは良かったけれど、次に何を話せばいいのか分からず、陽平はとっさに自分の境遇をべらべらと話してしまった。

父の暴力。母子に対する虐待。母の失踪。父と残された自分。いつの日か母が帰ってくると信じて、父の暴力に独りで耐えている現状まで話し終え、陽平はどうして自分が彼女に自身の境遇を打ち明けたのか、その理由を知ることができた。

クラス中で噂になっている自分と似た境遇の彼女のことを、好きになっていったのだ。

自分と同じように一人で耐えている彼女のことを、支えてあげたくなってしまったのだ。

『一緒に強く生きると約束しよう』

信頼していた人に見捨てられた自分だからこそ、そのように言えば、彼女を繋ぎ止めることができる。浅ましくもそう確信していた。その狙い通りに、陽平の言葉に彼女は感銘を受けたようだった。

そして、約束を交わした後、玲が陽平にこう言った。

「どうしたら、キミみたいに強くなれるの？」

陽平は玲の言葉に小さく笑い声をもらしてこう答えた。

「でも君、女だよ」

女と言われてむっとした顔をした玲は、けらけらと笑う陽平にこう返した。

「だったら、今からわたしは男になる」

「男になるって、どうやって？」

陽平がそう尋ねると、玲はうつむいて黙り込む。嫌われてしまうのではないかと陽平は焦り、偶々思いついたことを口にした。

「それなら、僕の『僕』を君に上げるよ」

その意味が分からず小首を傾げる玲に、陽平は噛んで含めるように言った。

「今日から君は自分のことを『僕』って呼びなよ。そうしたら、自分のことを男と思えるようになって、強くなるかもしれないよ」

玲の表情は明るくなったが、すぐに影が差した。

「でも、そうしたらキミはこれから自分のことを何て呼ぶの？」

「んー、僕はこれから自分のことを『俺』って呼ぶことにするよ。その方がカッコいいし」

椅子に腰かけていた玲は、自然と上目づかいで陽平を見上げるようになった。

「いいの？」

その仕草に陽平はどきっとし、ぎくしゃくと答える。

「う、うん。今日のことを忘れない良い思い出にもなると思うし」

陽平は頭を掻いて恥ずかしさを紛らわした。

約束を交わしたあの日と重なっていた景色は、太陽が山の奥に沈み始めたことで静かに現実から分裂した。地平線に隠れてしまう一段と煌めくその瞬間を、陽平は目を細めて見送る。

「陽平に『ボク』を返すよ」

そう、玲が言った。

その提案は、あの約束をないものにしようというものだと言平は受け取った。

二人が交わした約束によって玲が男性のようにふるまい、男子とばかり遊ぶようになったことが原因で、陰で虐めを受けることになったのを陽平はもちろん知っていた。けれど、この約束をないものとしてしまったら、玲は自分から興味を失ってしまうのではないか、母と同じように自分のもとから去ってしまうのではないか、と陽平はそれが恐ろしくて、今まで玲の虐めを見て見ぬ振りをして過ごした。

今、玲は中途半端な状態でぶら下がっていた約束を、陽平に『僕』を返すことで完全になくしてしまおうとしている。前までの自分なら、玲との繋がりがなくなってしまうことを恐れて、その誓いを失くすことを拒んだのだろう。しかし、陽平にはもう約束に対する未練は、まったくといっていいほど残っていなかった。

昨日のことで、そのような約束よりもっと強固な鎖で二人は繋がることができたのだから。

それに、彼は既に賭けに勝利していた。

——この崖から飛び降りて生き残れば、玲は俺から離れない。

あのとき、陽平はそのような想いを抱いて緑地へと飛んだのだっ

た。

「分かったよ」

だから、彼はそう答えた。

二人を縛っていた糸が途絶えたことを伝えるように、黒い峰々へと太陽は沈んだ。

空一面に広がっていた赤色は、西へと退潮する。

黒い山の上に浮く赤い残光。太陽の名残。

それが、自分の姿と重なる。

とく——り。

もうじきやって来る夜を嗅ぎつけたかのように、陽平の腹の底で何かが蠢いた。その何ものかの駆動は、陽平にあのときの、渡辺を押したときの感触を思い起こさせる。

——突き飛ばす直前までは、誰か分からなかった。

玲の身に危険が迫っているように見えたから、軽くぶつかってそいつを威嚇しようと思った。でも、薄ぼんやりと渡辺の顔が見えた瞬間、体中に細かな痺れが廻った。

突風に背を押されたかのように突発的で衝動的、気付いたら渾身の力で渡辺を本棚の角をめがけて突き飛ばしていた。

あれは事故ではなかった。

——僕はたしかにあの瞬間、渡辺を殺そうと思って突き飛ばした。

ぞ——わり。

渡辺の頭から堰を切ったようにあふれ出た赤い液体。

殴る度に小さくなった動き。蹴る度に闇に溶けていった呼吸。

陽平は手の平を前に出して眺める。

太陽は沈んでしまったはずなのに、二つの手の平は赤く染まっていた。

「陽平。今日の帰りも、あそこへ寄るんだよね？」

玲が蠟人形のように微笑んで投げかける。その笑みは、初めて会ったときに見せた綺麗な笑顔とよく似ていた。

「ああ、涼弥も一人で寂しがってるかもしれないな」

深く伸びた二つの影が寄り添うように混じりあって暗い教室を侵食する。溶け合い、絡み合って濃厚な影を作り出す。

ふいと陽平は窓に背を向けてまぶたを落とした。

——大人が、あの夕焼けのように裏表なく綺麗にしてくれたのなら、僕たちも道を逸れずに歩めたのだろうか？

そして、暗い夜がやってくる。

闇の中で獅子が細く伸びた口端を舐め、隣にいる雌の獅子へと向く。

彼女は彼と同じ顔をして、笑う。

二匹は笑い合う。

暗い闇の中で、笑い合う。

二匹の獅子は街を走り抜け、深緑の森へと駆ける。

決して離れぬようにと身を寄せ合い、

日の音も聞こえぬ森の奥、

暗く閉ざされた穴底で、
二匹は静かに爪を研ぐ。

日ノ音カキケス門ノ音（後書き）

しっかりと完結させた長編ってこれがはじめてだなー、と。

まだまだ文章も拙いし物語も穴だらけだと思いますが、自分が文章として表現したいものに着実に近付いている気がします。

感想、意見、アドバイス等ありましたら是非お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8657v/>

日ノ音カキケス門ノ音

2011年11月14日19時47分発行